

人目を忍ぶ愁^{せつな}苦^{くる}は、罪なくして配所の住居、眺めむ月もなければ花もなく、拵事の戀に身を憫まし、前髪に蛛巢を懸られ、手枕の傍に籠馬に啼立られ、物も言はず身も動かさず、陰^{かくれごと}事は幼稚^{こころのいさ}時の遊戯^{たはぶれ}、大人になりては一向に興なきものと心中に眩き、壽命の短む思ひを忍びてやうやく二日を過ごしぬ。此間日々食事を剝膳にて据えられしが、訝かしきは此貧家に似合ぬ調菜なり。朝晩は味噌に澤庵、午飯は焼鉄の汁ともあるべきを、刺身口取焼肴など、品類を變て心を籠けり。給仕は從^{ゆつ}僕^{かひ}の文七なれば、此の一事膳に落すと尋ねけるに、文七頭を掻き、申すはことがましけれど、拙者めの寸志、ちと過ぎたる御放埒より、黄金装の大小をも佩せたまひし旦那様が、雑炊吸らぬまで羽尾打枯らしたまひしも御不便なれど、其れをだに棄てたまはず、廓に在らば綾錦の夜具に玉の枕とやらむの此方様が、かゝる大小屋に下りても旦那様に册^{かしづ}かむとお心が嬉しさに、美食のお口には豆腐梅干は石瓦を噛むより可愁^{つら}らむかと、餘閑を偷みての手内職に貯へしわづかの錢も、薪醬油代に拂ひてなほ残れるを掻集め、三度の菜を調へて進ずるなり。かく立入ての始末をお聞かせ申しなば、人間の肉を啖ふ心地じたまひて、一箸も着たまはじと思へば、何所までも深く裏^{つひ}了^{おは}せむと存ぜしに、お訊問^{たづね}に預りて下司^{げす}のさもしくも腸を吐きたり。此の御苦勞も此所少時^{しばし}、御家中に有徳

なる伯父様おはせば、不遠何とか始末を附けて下さるべければ、やがて高坂の奥様、安樂なるお身上ともならむを樂みに、此文七が寸^{こころざし}志^{こころざし}に免じて長持地獄の苦艱^{くるしみ}を忍びたまへ。此頃は三度の食も、腹^{はら}膨^{ふく}るまほどはならざる次第なれど、此方様お入來ありしより、旦那様の御機嫌優れて麗はしく、お身を御謹直^{たしな}に嘖^{たしな}まれ、其方はいかばかりか憂^{うれ}も迷惑にもあらむは氣毒なれど、我は此の上乞食になりても苦しからぬぞと、御本望のお顔をだに見ば、文七も乞食にならむことを厭はずと申せしに、辛抱してくれと涙を流したまひし、無^{にな}二主^{にき}従^まの心を汲みたまひて、必ず旦那様を棄てたまふなど、杓子持つ手を震はせ、佐太夫を見てはらくと落涙しけるに、かばかりの至誠の一念、佐太夫の胸を抉^ひりて腸^{はらわた}を掻^かき、かく佛のやうなる男を欺き、今にも二百兩攫つて古巢へ飛還る事かと思へば、其後の時雄が思、文七の心は、天裂地崩るばかり憤亂して、その怨念我身の皮を喰裂き、骨までも噛^かみくだ碎^{くだ}かやと坐に物怖しく、または文七が至情に融^とされ、持來りたる小包の中より紙入を出して、此中に些少の金子あれば、此後ば之にて調へたまへといふを、文七は無用といふ。佐太夫は取れといふ。取れ取らぬに聲高く争ふ其中に、ぬつと入來れるは時雄の伯父なるに、文七不意を撃たれて是ほどばかり、面色土の如くわなく、胴震して佇めば、伯父は罪ありげに二人を睨め、文七、

此ものが佐太夫か。其方が佐太夫かといへば、佐太夫長持を匂出で、慇懃に手を支へて、時様とは淺からぬ契約の佐太夫と初々しき聲作。此方は時雄の伯父と其處に坐りて名るとも知らず、時雄周草で歸來り、鶯地に座敷に飛入れば、南無三、伯父君！合すへき顔なしと、引還して遁る刀の端を伯父に捉られ、何とも所爲なきまゝ物を言はず平伏すれば、伯父は屹と容を改め、散々遣果せし揚句は、遊女を根引すへき金子のあるべき様なし。この女をいかにせしぞと詰れば、年明の身の置所なしとて、一昨夜便りて参りしを、馴染の顔とて昔なくも逐返し難く、留置たる不埒の段は偏に御容しと詫入れば、佐太夫も言葉を合はせ、年明からは放鳥の、誰調繫のものなければ、賣色上のやくざものとお厭忌だになくば、一人の命を助くと思召したまひて、一生御奉公申上げたき心願を協へたまへ。いま時様に棄てられましては、古郷の京の両親は死断えて縁者もなく、この江戸には猶更頼るべき家なければ明日よりは路頭に迷はむほどにと、洞入りて哀れげに訴へければ、伯父も時雄が此女ゆゑに、身を持崩したりとかねて知れば、さまでに思ふ女なれば、册せて放埒を慎ませむか。其にしても此女の氣性は如何あらむ、取るも捨るも其次第と注目しけるに、佐太夫胸に一物あれば、萬事を内端に見せかけ、言葉の首尾に實意を籠めて其心を眩ましける上、昨

日今日の顔末を伯父は文七に尋ければ、二日半日長持の芥座に塗れて屈する色なく、唯家内の光景を見ては勿體なや我ゆゑの御零落かと、いひ續ては涙ぐみたまふしほらしと、正直一圓の心に唾液涙の愁嘆を眞に受けて、感ぜしまゝを有體に答へければ、伯父も心迷ひて、冠く玉藻は替なりけり。

(四十四)

伯父をも瞞着たりと見るより、立兵庫の大髭を引き抜き、家暮なる圓鬚に結び、大事に抜揃へたる眉毛も手管の邪冤物と惜氣なく剃落し、緋鹿子の襷懸に縮緬の袖を括り、錆庖丁に大根を切り、釜を洗ひ、糠味噌を掻廻はし、座敷椽板の拭掃除に片時身の休息を見せず、山出の如く色氣を捨て立働らまければ、時雄は身悶へして氣の毒がり、文七はあるにもあられす勿體ながり、伯父はまた小首を傾け、遊女の果と鯛の腐敗たるばかりは、何にもなるまじく思籠みたるに、此れはそもお竹大日如来などの御化身にや、世に有難き女人なり。賣色餘といふばかりが愧かしけれど、得難くも天晴なる花嫁と、意見すべき伯父が音頭取になりて惚れて懸かれれば、佐太夫肩身廣く家一杯に巾のなるべきを控へて、なほ一家内の氣を損ぜぬやうに三指好の伯父には三指すくめに仕向け、貞節仕懸にしていよく時雄を上げせ、文七は長持の往時忘れざる實意

三味に綾なし、唯其身をいとをしがられぬるやうにと巧みし大手練團に當り、内々は立派なる奥様に成濟まして、大願十が七までの成就、二百兩はたしかに天井にぞ釣下りて見えける。

一夜時雄との寢物語りに、ふとせし事より相互に「眞實」の有無を言募りて、縦合いかほど口頭にておぼせらるゝとも、此方様の御眞實には是ぞといふ痕跡なし。女人は無慮なるものにて、舌頭の誓紙を眞に受け、廓を遁出して此頃の始末、惚れたる弱身とは申しながら、賣色の身にして客に陥められ、今にも秋風そよと立たば、縁桐一葉の投出されもの、やがて胴置の耳に入りて、あつばれ物笑ひになる事かど心細げに怨めば、時雄は辯解言に窮りて、其には劣るまじき眞實の見せたまに、伯父より固く止られたる唇封をうかど切りて、知らざる事とて冥加なき怨言かな。男の情といふものを見て其口を慎めと、夜衣匆退けてむくくと匍出し、一通の書状を持來りてまづ之を見よと、自ら行燈の心を撞立て、佐太夫が枕頭に直せば、上封の手跡は女文字！見たくは御座んせぬと時雄の胸に投付けて、くるりと後向になれば、馬鹿め！馬鹿は性、實今御存じか。馬鹿め！伶俐ならば男に陥めらるべきか。あれ、この馬鹿め！情氣は後まはし、まづ見てから腹を立よと手紙を引出し、佐太夫にのしかかりて顔の前に披けても、目を瞑りて見ざれば、時

雄小音に讀けるを、耳を塞ぎながら聞けば小判の音するごとく、時雄が放埒逐一國元の宅に聞え、刺さへ佐太夫廓を脱出し、此家に身を忍びながら夫婦同様に暮すと知より、巢守の女房は十四五日路離れたる此所まで情氣届かず、胸に怨恨の數を疊み兼て、ぶらりと名の知れぬ病氣に憫み、浴ぶるほどの薬湯水のごとく驗なく、やがて思死に果べき容體、殺してよき妻ならば貰ひはすまじ。三才になる鋸が利かぬほどに根性腐りけるか。目と鼻の間に見事意見すべし伯父も居ながら、一言もいはで見て居らるゝは、平素の御氣質にも似合はざる近頃の不注意と、連累に餘人まで恨みたる國元の母よりの手紙なり。

此先は我讀むに忍びずと投出すを、佐太夫氣遣はしげに拾取りて見れば、時雄が不埒の段々を殿しく責め、まづと其女に暇出さずば、病人を引連れ、母親自身に出向かむまでと、怒氣の面影目に見る如き文言なり。佐太夫讀了りて少時は顔を得上げず、やがて書状の上にはほろりと涙を滴し、かく歴としたる奥様おはすか上にお子様である事を嘔氣にも出したまはず、此身をいとをしがらせたまひしは御眞實が過ぎて恨めしや。かゝるお身上と初手知らば、なか／＼迷ふまじきものを、今となりて此佐太夫を如何にしたまふ御了簡ぞ。奥様か我か、いづれ一人は死なねばならざる成行。心中ならば奥様に何劣るまじき此身なれど、賣色の中

伽羅枕

の相思せしひるひと、親々容なごしたまひての夫婦めかけとは格別の相違ちがひあれば、いふまでもなく頁ひらは我われに極たぎめたり。まじてやお子こまでなしたる奥様おくさまの御心ごこころ根ねは、我胸わがむねの中に思おも較かべておいとしければ、我下わした婢ひども成なり下くだり、一生奉公いっせいほうこうしてなりとお側わがはたを離はなれまじき心こころなれど、奥様おくさまお物思ものおもひの種たねともなりて、お身に障さわる事ことやあらむも心こころ苦くるく、且かつは好このたる男おとこを喻たとへば奥様おくさまにもせよ、他人たにんに眼前がんぜんに自由じゆうにぞして、曠患くわんげんの炎ほむら立たつしてあるべきや。一思ひとひに此家このいえを出でてお姿すがたを見みもせずば、此戀このこひの色いろ無く褪しめたるまでも、他事たにんに紛まれて折し々は忘わする事こともあるべければ、永とこの暇ひまをこの身にたまひて奥様おくさまの御心ごこころを休やすめたまへ。此こまで淺あからぬお情なさけを受うけました、此方このかた様さまへせめてもの寸志すんし。今いまとなりていふは死うせし子の年とし齡ねいとやらに似にたれど、此方このかた様さまはようもく奥様おくさまあることを憂うれひたまひて、この佐太夫さたふを散ち弄物さんぶつにしたまひしよな。いつも此傳このつたにて男おとこ傾城けいせいの口くち車ぐるまに乗のせられ、無理算段むりさんだんに廊ろうを出でて路みちの柳やなぎの折放しりぞしとなり、根ねには返かへられず葉はは枯かがれて、賤屋しんげの茶釜ちかぶの下したにくべられ、見る影かげなき果はの遊あそ女めは、朋輩ともだちにては先代せんだいの花露はなつゆ殿どの、沙路さろ殿どの、松葉まつばの乙女おんな殿どの、扇屋あふぎやの夕顔ゆがは殿どの、悉ことごとこの手に懸かりければ、手管てくだの約束やくそくはともあれ、此方このかたより心こころ底命しんそくを懸かけたる中の女夫おんなの契約けいぎやくは、片思かたおもの獨心中どくしんちゆうにては末々すえすえの覺束かくそくなさに、うるさし、ぬつしといひたまふほど、お獨身どくしんかと根柢ねぢり葉柢はぢりお尋たずねませせし上うにも、心元こころもとなければ如ごとく

在ありなく手を廻まわして訊問きんもんせば、いよく奥様おくさまはなき事に極たぎまりたるに、心をゆるし、かゝる目に遭あてからは泣なくも恨うらむも所益ところえきなしと、その女房にようばうの名なから年とし齡ねいから容色ようしきの善惡ぜんあく、顔かほに黒子くろこのあるまで知りぬいて居ゐながら、今更いまさらのやうにわが不覺ふかくを悔くみ、恨うらめしくもなき怨言うらみごころをならべけるに、他人たにんの心こころを見通みとおしの人ひとなければ、武士ぶしの海鼠なまこがく。

(四十五)

其明朝あす佐太夫さたふ伯父おやぢの宅うちへかの手紙片手てがみかたに馳込かみ、今いまが今いままで時雄ときゆうに欺あかれたるを口惜くちやくがりて、涙なみだに咽すすび、身を震ふるはせ、袖そでを喰裂くはき、狭せまき心こころは亂みだれたるやうに見みせかけの所作そとせ。扱あはと伯父おやぢも當惑あつごくの頭あたまを搔かき、見れば思おも通とおめたる容子ようしに、離縁りえんの事ことは流石りうせきに言出いしかね、當座あつざの欺あかれし欺あきしとの事ことは、悉ことごと其方そのかたが邪推じあといふものにて、女房にようばうある事ことを時雄ときゆうが推秘おしひみしも、戀こひひしき其方そのかたが心を引寄ひきよせむばかりにて、謂いはと可愛こひきあまりなれど、今いまとなりては成程なりほど欺あかれたるやうに見みゆれば、其怨恨そのうらみは一ひと道理道理にて、中ちゆうに入いたる此伯父このおやぢの當惑あつごくはといへば、佐太夫さたふなほ嗚なげながら、何事なにごとも御存ごぞんじなき此方このかた様に、御迷惑ごめいわくを懸かけます心こころにはあらねど、平素へいそのお憂うれしきに甘あまへてかくの次第しうばい、伯父おやぢ様さま、今日けふより花はなにお暇ひまを下くだされまし。何なに、何なに、何なに、と伯父おやぢは煙草たばこを

伽羅枕

詰かけし煙管を捨て、膝の進むを覺えず、顔を衝出し眼を睜りて、佐太夫が決心の面色を窺へば、思切りたる言葉の後に、またむら／＼と未練の朋せるごとく、凋れて更に湧出る涙に、幾度か眼を拭ひ鼻をつまらせ、今日より花にお暇をくださるやう時様にも得心させて下されまし。そりや此手紙を見てからの覺悟か、但しは時雄めと口論くわんなごせし上に、彼が貧乏に飽て麻が戀しうなりたるか。ええ！お情なや、ええ、ええ、ええ！花がかほごに辭讓おごかしくも果斷けつだんなる心中こころのほどを賞めて下さらぬのみか、貧乏に飽くの、いまはしと麻が戀しかるのと、當もなき怨言げんごみは恨めしとお言葉なり、無情つれなきお心なり。數年來の實色の中に、唯の一人も此身を頼むへほど眞實ある男に逢はず、漸やく時様を此人はと見立し、目鏡の曇らざるを心に矜りて、嬉しくも女夫暮めづらしの日數なくして、さしたる苦勞難儀にも出遇はされば、花が思ふ程の實意の見せ場なく、尋常の遊女果糊口いづちの道なきまゝに、乞食にならんよりはましとの了簡にて、辛抱するかなんその様に口に出してこそはのたまはね、物堅き伯父様などはとも思はるべし。どうなくては、唯今の如きお言葉のあるべきやうなし。果のなる秋ともならずは、花の色は仇なるが多くて其心計り難ければ、其配慮もさらく御無理ならぬぞさりとは、平素私へのお言葉にも似ず、御心中の水臭さ。唯世に哀れなるは花なり。馬鹿律義にも當座たら

この偽誓文を一圖に守り、われ一人女房になり濟まして、時様は吾物顔に冊さし昨夜までを思へば、羞かしくもあり口惜くもあれど、其等には更へ難き戀慕の念は、此身を下婢はしたにしてなりとお側を離れとすれど、此身といふものあるを苦に病みたまひて、お國元なる奥様は容易ならぬ御大病のよし、このお手紙にて知りまして、昨夜は通宵よもすがら寝もやらず、獨瘡つかさを抑へての物案じ。とても人一人の命をとりて、無理に添ふ夫婦ならば、奥様のお怨念にても末々二人が身上も氣遣はしく、また此の身を逐出さずば、其の御大病人を抱えて、年寄りたまひたる親御様此地へお出懸の上、さつと處置せむどのお手紙なれば、いづれにしても時様とは悪縁の、相思はかなはぬに斷念めて我よりお暇を願ふは、一には奥様のお命が助けたさ、また一にはいとしき時様を此身あるゆゑに不孝ものにせむも悲しく、また我にしては、よくも義理を思ひておのれが戀の角を折り、あれまでの、執心をおし曲げて、我から暇とる程の心のしほらしさほど、後々までも伯父様時様に、折々は不便のものと思出されなむ事を心ゆかしにして、此までを吉夢とあきらめ、何所になりと下女奉公に棲込み、一生所天は持たずに籠前にて果まする所存を、少しはいぢらしとも思ひたまへと正體なく泣伏せば、伯父は感入りて、其方が謂へる通りいかにしても添はし難きに及びたれど、生木を引裂く思にて、

伽羅枕

此方よりは暇やる切れてくれ、とほいひ悪くして進退谷りたるに、其方より今の言葉、心中は重々禮言ひたきにも、何とやら他人の憂慮を喜ぶにあたりて、其方に對する此方の所思は通じ難けれど、必ず仇や疎かには思ぬぞと、此後二日三日はとたくとして、やがて金二百兩伯父の手許より出で、身の所置着までの雜用との名にして手離とは言ず。佐太夫はいかにしても取るべき理なしと、剛情におし還すを、家内惣懸りにて不承くへに擱ませ、二ヶ月と五日目にてやうやく此家を飛出し、淺草邊の知己に身を寄せ、潜に樓主の許へ此趣を通じければ、知らぬ顔にて追手をさしむけ、知らぬ顔にて佐太夫も引釣られて龜和泉に歸れば、樓主外見の立腹太劇しく、部屋へも入れさせずして遣手飛懸り、太夫様御定法と荒繩に縛られ、その日より三十三日間土藏の闇黒に閉籠められて握飯に澤庵。二百兩はそのまゝ其時勢に樓主に預けたれど、吾物にせよとて還へしぬ。この入牢中繩目の苦惱に腕さけるに、かく繩肉に喰入りてと、今も手首の傷痕を見せて、當代は規則改まりてかゝる事はなくなりしとかや。雖有き御代なりと其手を撫でて、老後の佐太夫著者に語りぬ。

(四十六)

和尙も大黒を拜む世に、武士なればとて八幡大菩薩摩利支尊天の堅い三昧では竹刀鍛錬の屑でも凝る。今

伽羅枕

泰平無事の天下に飾物の御太刀は細身々々！佩に輕うて第一女人輩が悦ぶことほど、養父の意見を聞きながらの胸中がそまゝ如件し。我等が其方の年齢にはと、家康公の御遺訓讀むやうなる事を列ぶれば、なほ以て鼻頭に應待ひ、品川新宿と浮れ廻るに、容貌美しく其儘生寫とて、坂彦と持離さるゝ面白さに身が持てぬは、太田備中守家來にて、奥用人の重役なる新堀左内が養子左源太とて、當年廿六の男盛。空襲も浪費盛に多財は堪るものか。養家の福々に魅入て相應に擱出すを、左内憂く思ひて強意見の百出なるに、對手も三才兒ならねば遺恨を含み、この禿頭、何がな落度あれかし、其尾を捉へて化皮を引剥き、此腹を癒さずはと、常分は左源太身を慎みて、夜晝宅にじやに構へ、四角四面の忠義禮智信に、したゝか憐ましくれむとすれど左内更に屈せず、武士はそこそあらまほしけれなどと、機嫌好く見せ懸くるが悪し。知らぬと思ふか、ちらく老年に耻ぢざる保、養の噂は耳にすれど、其所行を衝留めされば少時此處に、金鐵頭に鼻油布で満月のごとく引絞りて待つとは識らず。今にも野鼠くんと遣出でなほ、唯一筋ぞ。老年の根短く何時までか辛抱すべき、今宵か明夜かと養父の外出を窺ひしに、今夜は下谷の山部氏方に甚會ありと夕暮より出懸ぬ。吹たぞ天津風、十八年ぶりの遺恨思知れや、と左源太も續いて飛出し、陰見にその蹤を慕う

て行けば、一二町にして辻駕籠に乗りけるより、左源太も急あわて 避駕籠を就ひ、切かに彼駕籠を追尾け、何處までも先者の行く所まで行けど急がせけるに、此方はわざと二三間引退りて、左源太は絶えず垂席たれの隙より左内の駕籠を視みまりながら、何處へか志さすやらむと、流るるごとくに過行く輿外わらひの景色を眺むれば、おのれおやち 禿顛め、禿顛め、たしかに吉原への御登城！こりや無上に面白いと扇に額を亂つ打に打ち、我を忘れて雀こぞどり 躍すれば、鼻かこかき 丁迷惑して旦那様お静しづか穩にといへば、遅しづか緩にはして居られぬ所、やれ急げやく酒代は望次第と、我尻に扇子の鞭を當て、やうやく大門を入れば、左内の駕籠は七軒の井筒屋に着くを、少し離れて見澄して駕籠を下り、其茶屋の前を過ぎながら様子を窺へば、家主夫婦を先鋒さきに使つかひ 役の男女店口に面を揃へ、これは新堀の旦那様、よう此路を忘れたまはでなと離立て二階へ導かるるは、昨今の馴染とも見えす。唯々と都合點して此所を立去り、京町江戸町の素見に時刻を移し、最早好時節と取て選せば、井筒の二階に人氣なく、左内疾に送込まれたる氣色なれば、づつと入て此方へといふ二階座敷に通れば、引繼いで挨拶に出ける女房に、最前見えし老年の客は、わが隣となりやしき 邸にて高名の好色ものなるが、此家の久しき馴染かと、問へば、去年の花時分から御蟲負に預りまして、二なき大事なる此家の福ふくの神、此方様の御知おしり已様か。否、物

言ひしことは替てなければ、顔を合はさば先方にても識るべし。何屋の誰に通ふぞ。されば、一時は彼も氣に染まず誰も面白からずとお氣むづかしく、諸所方々をちらしに武者修業を遊ばされし末、其よりは今に變らずお心を寄せらるるは、龜和泉の佐太夫様と應へけるに、左源太故意に呀あッといひて小膝を拵ち、南無三寶あの禿顛に一番鎗をつけられしか。我も佐太夫には見ぬ戀にあくがれ、かねての執心なりしに扱々無念千萬と悔めば女房笑ひて、遊女は賣物買物、何を其様にお力を落させたまふぞ。御思召だにあらば此より直ぐにお伴いたしましたよといふ。左源太首を揺かし、もとより賣物買物なれば吾自由にならぬを苦にするにはあらねど、あの禿顛の二番煎を飲まざるゝがいかにしても氣色悪るければ、一手後れて待たのならぬが一代の殘念なり。さりながら目させし敵に背を見せんは卑怯なるべし。此上は越ひよどり 越まっさかを眞逆落まごころに間道かんだうから抜懸して、彼が不意に出でなば勝利は手の裏。驚おどろ尾は居らぬか、案内頼むと立上れば、巴ども御前おんまへ此にありと女房先立に階子を馳下り、お履物はきものよ提灯かんばんよと喚きて、左源太悠々しづくと打立ちけり。

(四十七)

左源太廻部屋に伸縮して獨寝の胸に手を措き、什麼してか禿顛やかんめを撃破たきつよしてくれべき。何所までも不知顔に

鞘當の對手となりて業を沸させ、蟬の切齒を見て笑うてやらむ歎。但しは今宵此所にて立派に面を合
 ばせ、父上ようこそなごう喰はして新膽を挫ぎ、逆捨の意見に散々膏血を絞らむも心快き業なるべし。執
 れにしても網中の干魚、思ふさま玩りて嚙で吐出してと、憤怒の露むづる歡喜に胸躍り髪堅ち、臥も居ら
 れず起むも所爲なく、身悶して床上を轉輾る折から、ばたくと慮下に上草履の連響を、障子細眼に開
 けて其かと覗けば、養父左内腰衣姿のしたたなく酒氣に躡躑ながら附添ひて介抱する佐太夫に何やら言
 懸け、肩邊を平手に拵たれて半白頭を掉立て、又一言何やら言へど、笑うて應答なき佐太夫の頬を突き、
 抓らるゝやら抱附くやら、淺ましき舉止を左源太冷汗を流して見物しけるが、漸く此方に近づくは、此の
 廻部屋の後面なる手水場に来るならむと、左内の姿を見るに疊みたる無念むらゝと湧上り、何の思慮にも及
 ばず横手の障子を蹴開き、先回りして手水場に待つと知らねば、左内しどころもどろと足場を定めかね、操
 糸の断たる人形のごとく風來風來と來懸り、渴く唇を舌なめすりしながら、又しても自慢の遠吼。げに逢ひ
 難き親と子の縁は盡せぬ契とて、佐太夫先刻の言を忘れまいぞ。日こそ多きに今宵しも、手水場に誰れやら
 居るではないか。此三井寺に廻り来て……。父上お危険ござると左源太ぬつと現はるれば、佐太夫した

たか呆れて此方様は、と左内を背面に圍へば、その肩頭より皺面を出して、朦朧たる醉眼を見開き、何ぢや、
 父上？貴殿如き壯俊に父上稱呼を受くべき高齡にあらず。慮外ながらかほどの妙齡美艷妻あるもの
 をと、呂律も亂れたる爛醉の體に、左源太手を附けかねて唯舌を巻たりしが、突然心を取直し言語を改
 め、父上、父上、これ父上、お眼鏡なりと懸て篤と此方を見定めたまはぬか。無謀なる愚息の放埒も心魂に
 徹する御意見を蒙りては、前非を悔ひて行狀謹直の武士と生替りたる左源太が、七時下りの雨に床板から新
 堀家の腐らむことを憂ひ、此所まで早乞の祈禱に罷越しました、と半睡れる左内の耳根に喚べば、垂たる首
 を擡げて、いや誠に其方は左源太、好所にて逢ふたるものかな。これよ佐太夫、御珍客を座敷へ御案内申せ。
 老爺大分酩酊の氣味なれば、失禮の段は御免を。一寸用を辨じてと、左源太が捉へたる袂を拂へど放さず。
 餘所くしき其口上はまだ酒氣が醒めたまはぬと見承けたるが、或は面目なごの餘り、酒に紛らして此場を
 遣むとの意か。何にもせよ豚兒に意見を加へたまふほど御分別ある父上にしても、この道の甘味には頬を
 落し、恥辱も面目も忘れたまふばかりなれば、血氣盛の我等が一夜二夜外泊せむは、無理にもあらずと此宵
 始て曉られたるべし。以來はちと家則を寛仁にしたまひて、をりくくなる左源太が色遊に、可怖顔は必ず

したまふな。家内に人なければ今宵は我歸宅して待ちますほどに、明朝は早々歸りたまふべし。またの日御見と佐大夫に目禮して、つと部屋に入りながら衣類をといへど、此場の始末何事やら一圓勝に落ちず、狐狸に魅まれたる思ひしる、様子知れざれば仲裁もならず、孰れも吾客なるに右にも味方し難く、左の敵にもなりかね、後に于細は知れむと、まづ左内を伴て閨房に戻り、床内に押込めば、枕を當がふ中に高野初雷のごとく寝入りぬ。窃と抜け出して左源太の部屋に行き、何事とも知らねど我に罪科はなきを、餘りに本意なき首尾かな。せめては枕を双べて一言二言嬉がらせたまふとも、怨言をいふ女はあるまじきにと、左源太が結懸たる帯を奪取り、床の上に引介して起せず、吸付煙草二三服の絶ぬ烟に男を縛りて、争論の様子を聞ばしかくど始終を語りけるに、その復讐の御意にてこそ此櫃へは來たまひつれ、最早事濟みたまひしからは、再度と顔を見せたまふ御眞實はなきに極めたり。我好と思ふは女人の心に變りなく、誰しも好きにやどかく引付けて、洒落にも浮氣させぬやうに仕向けたれば、このお多福を不便とは思したまはぬよ。今宵を限りに入來なき男ならば、誓文還さじと抱締めて離さざれば、養父と一つ大夫を張合はむはいかゞとも思しなれど、此方が一味して我を助けたまふとならば、面白からむ随分根良く通て見せむほどに、今宵は還したまへ

といへば、佐大夫其に得心して必ず味方して此方の武士の棄るやうにはせぬほどに、明の夜にも顔を見せたまへ、と左源太も容易手捕にされけり。

(四十八)

養父いかなる顔をして歸るやらむと、左源太待ちに待つやらむと、玄關より容體咳のニツ三ツを響かせ、溢面作りて入來れば左源太出迎へて、これはお歸りなされ。昨夜は面白きお手合も御座りましたか、お眼中赤みて臉の腫上りたるは、痛く夜を更したまひけると見えたり。御老體のことなれば、血氣ものゝ對手となりたまひてはお身が續くまじければ、此後は随分お厭ひあるべしと、眼の膜一層裏に冷笑を湛ふれば、左内悄然として手煉の千本、鍼に吹着めらるゝ如く、たらくと流るゝ顔の冷汗を掌に拭ひ、好道なればさしては疲労も覚えぬと、何所までも隠し通さむ氣色なれば、左源太も深くは容なめず、唯相眼にて此朝は無難に過ぎけれど、左内は心中焚ゆるごとく、昨夜絶和泉にての始末さへ憎き所、わが遊女を買ひて假初にも我に恥辱を與へむとする了簡、または弱身に附入たる愚弄の過言といひ、養父を養父とも思はざる所置に、その胴骨一ト碎きにしてやるとも堪忍なり難けれど、この方にも落度あれば、親の權柄も此所には役立たずと、勝

をこいて憤怒を忍べば、不快おのづと肩に頼はれ、眼見きておのれ左源太、わづかの鹿忽だにあれかし、其に托して存分此恨を露らさむと、角立つ眼を配りて油断なしと見れば、左源太は卑怯なる最見を心中に嘲みながらも萬事に注意すれば、透間なき青眼の構へに斬込みかねて、左内が一撃微塵の大上段振冠れるまゝ、一步進み一步退き、左に揺き右に避け、一本試合の曠勝負と、龍蟠まり虎踞まるまゝ三日四日と過れど、打撃ふ音は絶てなかりき。少し間隙を見せてお面を取むと、左源太五日目に所用ありと、午後より家を出でる夜に入とも歸らざれば、老たりとも色道に血氣の衰ふといふことなく、此年齢にしてもあるものかな、格氣の角に新芽を萌き、彼奴もしや佐太夫方へかと疑念を起して、某氏が昨日求められたる名刀見などこまよひ出で、駕籠に形軀を載せて魂魄を息杖の下に轉がし、佐太夫の許に馳着て見れば、云はざる事か、左源太め先様顔して座敷の真中に高楊枝の可惜ほど、じだんだ履むで之を佐太夫に當れば、柳受にすべらされ、少々ばかり舌味などいひしばかりにて歸されぬ。昨夜養父行きたりと知れば左源太今夜通ひ、左源太今夜通ふと見れば、明夜は養父必定出懸け、入替り立替り通ふ度の重なるほどに、左内の眼に子なく左源太の心に父なく、餓鬼一枕の腐飯を争ふ様は、胭脂さしの彈指にも懸りぬ。

此遺恨を根に持ち、些細なる左源太が過失を養父事々しく責めけるに、言葉返しは不埒なりと散々に打着せしより紛議起りて、面倒なり縁離て逐出さむと左内がいへば、此方は望む所と悪たれ、相方折れず屈まず、死物狂になりて吼れば仲人も手も引き、此上はお隨意と放しけるに、水に入る糊付舟の難なく二ツに割れて、一家中の淺ましき手本と指をさくれぬ。

(四十九)

父子競争の放埒一家中に知れわたりければ、左内斑點まじりの難面を見られむも愧かしく、當座は謹慎に縮まり、難去き用事を捨てても外出を憚り、此一條もしや上聞に達して、いかなる譴責に遭はむかと、色酒浸の心腸の酔もやうく醒め際の不愉快。青呼吸を吐きながら主宰の沙汰を待ちけるに、仕合と珍事に及ばずして、領分千葉に御用を領承はり、長くて二月の滞在と家内に言遣きて發足せしが、あら熱やの苦惱も咽喉三寸を過ぐれば夢さばかり忘れ果て、懐ひいづるは佐太夫の事のみ。

左源太は下谷なる實家の立花へ逐戻せしが、もとより富裕ならざる家なれば、渠も百羽播して北國の空はいかばかりか戀しからむに、思ふにまかせずして草雙紙に畫ける傾城にも心を動かし、自由なる物の不自由

伽羅枕

なるに、断念断念て自づと手を退くへければ、言はでも佐大夫は此方のもの。扱はや氣味好きこの胸中の日本晴、海上だに安穩なる旅日和を陸地の氣散じ。やがて戻らば直に行くぞ、と吉原を左に眺めやりて眩き、其日暮船橋に着さぬ。

薄闇き旅籠行燈に照らされ、骨柳を枕に老按摩が京阪談を聞かむも氣の竭さる穿鑿。八兵衛と下司なる名に呼れ、日光と汗の臭氣を此地には伽羅ほどに想ひ、二度と御見は覺束なき行懸りの旅人の慰情なれば、泣くも笑ふも一時と、後朝にしほらしき物を滴して見する事を慣はず、まことに情淡くして其交や君子、もかうして一人居の徒然に堪えず、と宿の下男に案内させて此所彼所見廻るに、いかに田舎なればとて隨分念入にむさくろしき家屋の結構。さすがに菰簾にはあらぬ夜鷹小屋、と大籠を見馴れたる眼を驚かせば、案内のもの笑ひて、何事も旅中と我慢せむとおほせられましたは、此光景を御覽なき中の御了簡なり。かゝる家に御寝ならば、瓜や蕃瓜の化物に寢はれたまはむ。まづく無難にお歸りと諫めけれど、これも笑話の柄とさる樓に入れば、年齢二十三にして色緒黒く、でくくと肥料利きていかにも丈夫一式の女郎敵妓と定まりけるを、可笑さの餘り「早乙女」といふ名にやあらむといへど下男合點せずして、此地にさる立派なる

伽羅枕

名はござなしといふほどなほ可笑しく、飲まれぬ酒に盃事は眞似ほどに濟ませ、此よりはまたしもたゞ草が寝心好かるべしと思はるゝ、堅焼の煎餅蒲團はいとど老體にこたへて愁し、せめては御手枕を借用申て、面白き談話もあらば聞かせよといへど、江戸のお武家様と敬まひ畏れて更に打解けず。隣座敷にて騒ぐやうな此土地の時、話など話など唱つて聞かせぬかといへば彌々身を管め、可笑き訛にて知りませぬといふ。其方が名ほど尋ねれば、花と答けるに忽ち佐大夫を思出して、ありし夜の嬉しき事、面白き事など胸一杯に浮べば、急遽戀しくなりて得堪ずや、聞も氣の毒なる左内の長太息に、花は少し身をすり寄せ、訝しや何事やらむ、我名を名乗ると齊しくどうやら御苦勞相なる御様子と尤むれば、否子細なし。今急に持病の胸、痛と紛らせば、しほらしくも妙薬なりとて可怪なる丸薬をわやく、持來り、壓し壓しよ撫りまじよと介抱の實意を見れば、其名の花といふだに懐しきにと不便を催し、我側に終宵自由に寝かせ、歸際に少額の貨幣を捻りて取らすれば、伏拜まぬばかりなる喜色を、思ふ花の顔に見ばや一日も早く、と道を急ぎてやうやく千葉に入り、役宅に着くや否や、身持放埒の條不届至極に付き宅番申付くるもの也、と江戸表よりいつの間にか下りたる官告書を示され、居宅は即刻釘付にされけるに、左内したるか呆惑ひ、懼となりて旅裝束のまゝ力な

伽羅枕

く仆れぬ。

其の明る日竊に番人を呼びて黄金を掴ませ、二通の書状を頼みければ、日ならずして届先は佐太夫方と本宅なり。

老人様の末路いかにと佐太夫其文を披けば、懐かしき思ひの數々を書續け、頼みに頼みたるまたの逢瀬は徒事となりて、此身は亂行の譴責ゆるに片田舎に逐籠められ、何日世に出でむ希望もなく、且は老年に愧ぢざる不行蹟を今更後悔に及べば、よしや世人に笑れざるまでも、天地に俯仰して餘命を偷むべきにあらざれば、藩主へは不忠不義の謝罪、藩士へは不面目の覺念、今夜臍腹屠割て相果るものなり。かく心志を穢へしながらも、最期の際まで其方が事を思ひやみ難くて、未練ながら一筆書遺し候とあるに、佐太夫仰天して、餘りなる藩主かな、あれしきの身持を告立して、春秋なき人の命を取るまでには及ぶまじきと、今は記念と遺れる塗枕の其人の定紋に線香を供へて、心ばかりなる回向も殊勝なり。
其夜左源太久しぶりに來たりければ、その後の始末は何處と尋ねけるに、知らざるか老漢は千葉の宅番中に自殺して果てたり。我は縁切つてまた立花に戻り、此の後は對手なしに張合なけれど、此方の不實と意氣

伽羅枕

地競して通ふほどに可愛がりたまへといふ。扱も御不便なる事かな。いかなる罪ありて田舎へはおしこめられたまひけるぞ。されば罪は此方に惚過ぎたればと戯言まじりにいひ紛すを、詰懸く問ひければ、佐太夫へ心申立の意にや、あの禿頭あまりの可憎に、離縁の際に佐内が段々の放埒と、御用向にわが外に人知らぬ不都合の始末を、委細打明けたる書面を重役に差出したるより此度の仕合。老て子に従はぬ親父の果は大概かうしたものと酒に亂れて口外しければ、佐太夫思はず切齒をなして、おのれ畜生武士と無遠慮に夜衣を刎退けて立起る裙を、左源太引提へて身を起しながら、何が畜生武士なるぞ。いかに女色に性根を亂せばとて、假初にも父と名のつくものを讒訴して、手は下さずとも殺せしは、人間業か人の心か、人非人よ、畜生よ、犬よ、犬よ、犬よ、犬武士の左源太！犬に太夫は借上なり。夜鷹の寝顔なりと甜れといへば、おのれ！と攫む長襦袢の袖を力まかせに斷りて、廊下に馳出でながら犬武士と、振向て唾液を吐懸けたる氣象尊しと、此男一人落せしがまた繁昌の種とはなりぬ。

(五十)

歸咲の色なほ深き二十四の冬、節季近に好鳥と迷はせけるは、甲府八日町に數代の楠分限、土蔵には

伽羅枕

黄金の俵屋と、家號まで福々の太物店の家督幸助、江戸の諸店へ年中の大懸金を取集めの逗留中、得意先の伴頭が馳走にて一夜龜和泉に遊びけるに、不運や、通銀江戸前の色師にも身動はさせざる、佐大夫が床の山に上せられ、戀の淵に打込まれ、恐悦すくめに揉みに揉まれし揚句の身體綿のごとく正體失なり、懸金半分まで集めて革財布の口堅かりし紐此夕より寛み、中の物有るにまかせて引摺み、惜氣もなく静散らして、人の顔だに見れば誰彼の辨別なく、佐字がくと喚くに、つひ先日までのおむくが、江戸はなるほど恐ろしき所と、附人の庄八が一存なる分別ながら、かく大束なる若旦那の御放埒はお家の大事、國元柳町あたりの色酒ならば數の知れたる事ながら、此吉原とありては其の底天竺の流沙川に續く大増堀、佐渡一國をすつぱり入れてもたまるものにあらずと、日夜傍を放さず舌を爛らして歸國を勧めけれど、聞かばこそ、聞かぬはずは幸助天性の壁なれば、廓にては變名をから様と命け、藝妓牽頭までが小馬鹿に廻はせと、堀立の山男は萬事に鈍なる上、むづかしき色里の風習いささかの心得なしに、唯我一人おもしろく浮かれて有頂天に舞昇り、脳目もふらず蕪地に佐大夫が胸邊を目懸け、飛着て通來るほどののろ殿、傍で見ると氣毒なるばかり手玉に取られけるに、あれほどの男ならばと茶屋の藝婢も、小鬘の禿を撫て口惜がりけり。

伽羅枕

總計六百兩餘の懸金、取立ては費ひ、費ひては立てける威勢の凄じさに庄八舌を吐き、とても我手に合ふべきものにあらずと、急飛脚を立て大旦那へ此始末を通じければ、早速の返書を幸助に突付け、この通り親御様の命令なれば一も二も御座なし、お否とあらば引すつてもお連れ申さねば庄八の役目が濟みませぬと、主從喧嘩面にて發足せしが、隙あらば振切つて遁すべき幸助の氣色に、庄八夜もおちく枕につかず、袖を捉むばかりにしてまづは無難に甲府に戻りぬ。

佐大夫手の中の如意寶珠を失ひければ、來る初春には目覺しき全盛をと心懸けし目算狂ひて、いよく歳末ともなれば、日頃は水晶骨に錦張の傘を伽羅柄にして翳せむなどといひし客が、何處へか影を潜して呼吸も聞かせず。吉原毒斷とかく節季前に流行さへあるに、折からなる世上の不景氣まづ此所に影響けば、此暮は時ならぬ野分吹きて、一夜は明けても元が極月の三十二日、門松の色も發輝と綠ならず、獅子舞の機音も済えずして、此月かくはづまで、二八月は年に二度の大厄不景氣月と、動かさる定期の如月後に待ち構ふるに、心をさまくりに碎きて此中を喘喘まじりに渡るべき大船もがなど、馴染の宿所帳繰れど、今はみな昔時、名にのみ残りて打絶えたるばかりなるに、路遠けれど甲府の壁は、蓮の絲ほど折れ

伽羅枕

際に未練を牽きければ、もしや誘出しの文が助くる神ともなりて、熱氣冷口の戀を突衝き、首尾よく焚えてかの人を齎出さむも計り難しと、和歌の道にも少しはたづさはりし筆の運おもしろく、鴉を驚と虚を實に書くろめ、やりくり事に物馴たる男を見立て甲府へ立たせけるに、日敷を歴て吉左右の返事を握つて還りければ、土地の景氣、倭屋の建築、分限の様子を尋ねれば、其どえらさは江戸子の膽も冷えたり。土地にては商賈の甲斐守といひ難すばかり、と聞けば逾頼もしく、待ちに待ちける其の月の十七日の午後、旅装の儘汗を流して今着いたとの乗込を聞くより、したとか憊たる狼共四方より聚りてとりまきけるに、一々好きな餌を取せて一先逐散しけり。此夕は幸助何日になく生真面目になりて、其方の量見が聞きたいとは、誰に教へられたやら恐らしき口上を、鸚鵡の口真似と心中に笑ひながら、壁の耳に口を寄せ、今改めて聞かむとは男といふものゝ無情證據、平素の舉止を何所に目を附けて居て見たまふにやと其肩を衝けば、蒲團の端に載たる幸助、衝れて後方に身體の片重りするを、支へむとして衝きし手知らず空を押せば、すてんころりと仰天に轉落ちたり。南無三！かうは手荒にせむとの心ならざりければ、氣毒にもあり可笑もあれど、此所を外らさば折角しんみりしかけし苦説無殘に崩るべしと、佐大夫あつとも言はねば身動もせずし

伽羅枕

て、おくく起返る幸助を流盼に懸け、理ある此方の言葉に挨拶盡き、遁路なくなりたる苦惱をされたに、わざと突倒されて言懸りの逆捻といふ古手かと窮めて見しに、少し隔たりたれば聞こえぬかして、顔を擧めながら、え何、何と耳を持来る舉動の可笑さ。これが佐大夫とあらうものゝ一の客か、世界は黄金の事と今に始めぬ事ながら頻りに感じぬ。

(五十一)

平素の舉動のみにては、どうありても此心の中が解らぬとの事ならば、何も此方ゆゑにやもの申さいでかと、男の膝に身を寄懸れば、なるほどく、浮氣半分の情契にて濟して置かむとならば、左右むづかしき言草はいるまじけれど、これ其方を女房に持つ氣ぞ、嬉しいか、嬉しいか、不得心か。何、此身を女房にせうとか、空言、空言々々、柳町の玉何とやらいふ美しいのとは違ふぞえ。誓文ぢや、倭屋の幸助ぢや、と此方ばかり激んで見ても埒明かぬは其方の量見。此麻に賣色するほどの身に、情夫とやらいふ附屬品なくては協はぬと聞けば、それは其方にも屹度あるべし。黄金でも買へぬは人の心、さあならば身請するも無益の至りと言せも果てず、幸助の顔を恨めしげに見遣てころりと横になり、我一人夜衣と鼻の上まで引被り、彼方向に睡らむとすれば、

幸助堪らず夜衣を剥取り、これ！と言へどぐつとも言ず、なほ睡眞似すれば又これ、これと腰に懸て揺る手を邪慳に刎退けられけるに、懲りずして又肩を揺れば又刎退け、枕を抱へてすつと起上るを幸助飛懸つて抱き、肩頭より女の顔を覗込みて、何としたる腹立ぞ、子細を聞かせよ、これなぞ子細を云はぬぞ、と再三問へど一向に返詞なく、じろりと幸助を媚、睨に睨み、何やら言はむとして躊躇ひ、不意にぐつと口惜やと幸助の上、臂に噛み付けば、あッ痛、たたたたと身を捻ぢりて倒るゝまに佐太夫も倒るれば、幸助紫色になりたる齒痕に唾を塗りて連りに揉みながら、其方にならば命もやる氣の男ぢや、これしきの傷が何とするもので。血の出るまでに噛で見よ、と痛まぬ手をぬつとさし出しけるを、矢庭に引捉みてあつと一口噛付けば、おのれ、あ痛ッ！と女の手を振りあげ、噛む——抓るに情剛く相互に放さず、苦痛の聲をふり立てて相喚へば、折から入來りたる佐山は珍事かと胸を轟かして馳入れば、何たる事ぞ、この始末に呆れ、二人の皺面を見てわつと笑へば、二人も漸く放れて笑を催し、痴話はこれ限に納まり、幸助旅疲勞におとなしく朝までぐつぐつと睡りぬ。

此度幸助が出郷の次第を訊ぬれば、佐太夫が呼出文に感かされて、帳場の有金と母親の祠堂金を攫渡ひ

て夜逃同様と知るに、所持金此限に盡て後は勘當の體か、國元より追手懸て引戻さるか、此二者の一つを免れざる身上なれば、何事も今間に手懸せざれば、いつまでか人は無間鐘にてあるべき、敲くも撃つも血よりは外に出るものなかるべし。機會もよく腰殿より身請の相談を仕懸けたる圖を外さず、一日も早く廓を出づるが最期、踏臺にして突放し、それからの思案も大概は附置きたれば、さしづめの手管はうまく乗せて身請を急ぐにありと、精根限にたらしめて見れば、筋断れ骨落け、魂魄まで脱骸になりながら、不具者は健見ありて邪推疑念始終附纏ひ、今日諾と呑込むかと思へば明夜直に裏返りて、東西南北難をいひ立てけるに、海賊を塗箸に挿むばかり佐太夫も困むけるが、かゝる男は道具入の仕掛ならば墮すべしと、鬚毛を断て投出し、口頭に詐欺なき替紙代と與ふれば、半熟なる江戸摺の男と違ひ、山奥のお坊養育はしほらしくも正直にして表面を飾らず、よく／＼難有忝なきかして、其毛を推戴かぬばかりに悦びて懷中になれど、邪推疑念はなほ薄らげる氣色にもあらねば、佐太夫は唯心急きて、一夜身請の一條を底の底まで口説きつめ、枕を介して其上に懷紙を敷き、仰天に左手の小指を載せて、指頭に剃刀を當がひ、幸助に自身の枕

を持たせ、此上を一撃にしたまへと迫れば、心弱くも顔色を變て、此ばかりは止めてくれよ、たしかに心底見えたれば明日といふ明日は必ず身請すべしとて、切に止めけるを無理に枕を振下させ、あつと事々しく叫びて剃刀の背を内に曲ぐれば、指頭の皮に唯肉少し添うて落るが秘傳、血は敷紙を恐ろしく染めなすと、さまでにもなき痛をしたるか苦みて見すると二ツに、凡庸の男は驚きて、心中見えた脆くも得心せざるものなし。幸助をも此手に載せてやうやう口説落し、後で笑はれぬほどに美々しく大門を出で、下谷摩利支天横町に小奇麗なる借店住居、後は知らず當座を幸助人に美ませけり。

(五十二)

驥の幸助今年は二十六といふ立派なる男盛、才子は早一人前の事を仕送げ、此所等で一先死にて惜まるる時代なるに、秘藏過たる紙積愛に育てられし身は一向に世間を識らず、惚れましたといふ女人は必ず我に惚れたるものと承知して、人間は誑詐を皮に裏みて目鼻を附たるものと悟るにも及ばず。さらぬだに瞞着られたる佐太夫が髮切指切の心中立に、我もし機ゆらむ曉には、あの太股の肉を裂てくれもすべきほど骨髄信じて、さながら嬉しき夢を覺めて見る如く、其日を送れど、對手の佐太夫は更に面白き事なし。おむづからぬやうにと振、鼓を廻し鳩笛を鳴らし、晝夜お傍去らずに御機嫌を取り、我には氣、露といふものなきに、精根盡て随分可愁業なれど、長年の廓住居に飽きくしたれば、米價を知ぬ新世帯は氣が變て一風可笑く、大仕懸の飯事して遊ぶ氣なり。

其上世間女房一代の氣苦勞の本尊と、冊く所天の幸助はぼんやり。天下は我物、まだく盗出しの金子を費果らざるに甲府の實家は勘當と父親は獨力めど、月々の仕送金は母親の才覺にして絶ゆことなければ、衣食に贅を盡して萬事不如意を知ざる樂世帯に、心牽かれて幸助を棄るに忍びず。一寸世上の光景を見渡すに、町人百姓は算盤錘、鋤にしがみ着きて、齷齪と稼ながら、年瀬には毎度絶死多し。又は四民の首座におし直り、今太平の世は純益の扶持を食て結構さうなる武家方だに、傘張楊枝提灯の骨製等それくの内職、大事の命との合戦なれば是非なしや、とかくは額の血汗を舐めて渡る世なり。それに引替へて我身上の氣樂さは何に譬ふべき様なきに、まづは辛抱の仕所かと、不思議にも此女賣色の中に間夫の氣もなかりければ、壁者の山出のラッパとリはさうで心に染むまじければ、さりとて外に氣を移すべき男を持たねば、此所を出てはさして行衛なきに風まりて、居るともなく出るともなく四月五月は最早かと過ぎけり。

平生信心なれば、淺草藏前なる不動尊の緣日に夜參して紅勘横町へ廻り、其所に升屋といへる貸本屋は、賣色の頃出入の馴染より、今もなほ花客にて借れる情書の續編を、通路なれば自身受取りて行かむと、當矢の提灯持は子女の松を先驅にして、隘横町の闇路を辿りけるに、曲角なる土藏の陰より黒き物ぬつと顯はれ、あれと言ふ間もなく提灯引取られし少女は泣出し、素足になりて覆つ轉びつ遁行に眼はくれず、一閃と稻妻を短に光らせ、おのれ佐太夫！と振駢しける時、投棄てたりし提灯焚上りてばツと立つ火影に認めたる男姿、淺黄手拭を眼深に冠り、黒紋附の袴、袴に高く毛脛をむき出したたり。盜賊と聲を懸れば、黙れ！佐藤八郎を忘れしかと、一足切入る踵に食拾の西瓜皮を踏敷けば、ずでんと仰天に打覆りて、土藏の壁際なる小溝の石垣に、したるか弱腰を撃れて遠に起も得上らず、微に身を揺かして呻くのみ。此時と佐太夫遁げむとせしむ、なほ可怖に振向けば、渠が仆れたる傍に短刀の遺ちたるを、竊と拾上げて一目散に遁出せば、浮足亂れて二度躓き、膝と肘、頭を三箇所擦剝き、されど一命を拾うて歸りぬ。

(五十三)

遁歸りたる松が報知に、そりやこそ一大事、と近所の衆を四五人頼み、春米屋の三吉といふ力自慢を先棒に

して唯今遣はしたれど、倉卒として落着ざる幸助は門口に徜徉ひ、其方を闇に透して、憂慮の最中に、花は髪を亂して帯しどけなく、單衣を泥塗にして跣足のまま、奔惱まされたる呼吸急遽くよるめきく辿來たれば、幸助走寄りてその手を握り、やれ無事なる顔を見て嬉しや、何所ぞに怪我はなかりし、かと戸内に引入るれば脆くも土間に俯地に仆れぬ。

松は心得て微温湯を汲みて薦むれば、幸助は門戸を鎖し、奥に入りて藥劑を持來り、少時の介抱に漸く胸の動氣静まりければ、足を濡ひ浴衣を被替へ、床を取らせて横になりたる枕頭に幸助蹲まり、此短刀は何處せしで、と手拭に包みて持歸りたる八郎が短刀を、土間に遺れたるを持來りての訊問に、今夜の子細を白地に物語り、此一品の證據を握みし胸中を談さむかとも思ひしが、なまじひ弱虫に聞さば果然制止すべければと、紅勘横町にて盜賊に出遇ひ、あはや此刀一突になるべかりしを、不動尊の忝けなくも護らせたまふにや、其奴石に躓きて倒れ、急所など毆ちけるにや起上る事協はざるまゝ無念がりて、我遁る後姿を自懸けて手に持たたりしこの短刀を投附けるに、左肩を擦りて二間ばかり前に飛たるを、手懸の種にもと拾取りて歸りたりと欺むけば、まづは無事にてかゝる目出度事なし。女人の夜行は謹むべきもので、と暫時は枕頭に茫然

坐りて煙草を薫らせしが、談話對手もなきに行燈との對坐も面白からずと、其夜は家内は惣早寢にしけり。さしたる事にもあらねば、花が身體の疲勞直ちに消えて、目覺るまゝに念ひけるは、佐藤八郎といへる男は親父に劣らざる馬鹿者かな。かれの親父信介は四十面を提げて浮氣は二十代の若者にゆづらず。其癖十兩不足の無心を五度まで遁げ、紋日物日の前後を厄病神の如く避けて、無難息災の日を滑つて通ひ、二年が間に遣手が三度と笑ふたを見ず。何も知らぬ雛髪までが嫌へば、新造若者茶屋の男女惣懸の隠言彈指も、信介が各箇の鍛錬良に反還りて立筋はなかりけるより、はては眼前にて罵詈惡口を皮一重包みて辱しむれど、眞實解せぬか知らぬ所爲か、華美に遊ぶの、伊達を行るといふは三十代の仕事なり。我等の年齢にして戀の色のといふ氣は微塵もなく、唯藥喰の傾城、氣保養の色遊なれば、假初にも贅澤がましき事ありては、第一子息の手前面目なき事なりと、酔へば之れを題目と唱へて、いと氣障がられし老夫なれば、させる大浪費はなくとも小身代はがらりと傾くが上に、一層可愁は同藩の誹譏と、堅氣なる子息の八郎なれば身も世もあられず之れを憂く思ひて、逆縁の意見を越權なり慮外なりと斥ぞけて取合はざるのみか、なほ亂行の募るを手放に見かねて、一夜八郎我を尋ねて親父に意見を頼むとありしを、折悪く小嶺に障れる事のありて、

自暴酒の醉心に浮かれて散々に罵り、刺さへ親父の棚卸までして辱しめければ、此返報は必らずするぞと腹立てて還りしを覺えたり。

其後間もなく信介は好色の果の病に命を殞しける趣は、我郎を出る前日聞たりしが、扱は八郎奴其時の遺恨を露さむと我を附規ふものとは見えたり。八郎、末世の武人なりとも殺人庖丁をひねくるほどの手技はあるべきに、敵人は蒲柳女人ならずや、其を闇討とは身に請けし些細の恥辱を雪がむと、思立つ根性の武人らしきにも似合ざる舉動なり。人威の惡洒落が可憎に、此方にて返報の茶番の道具にもと、奪取りたる短刀を突付け、眞晝中佐藤一家に冷汗を握らせずば、とても此痞は治まり難し、まづ如此して如彼してと工夫着て、とろりと寝る間に夏夜は短く明けぬ。

食事了めば幸助芝邊まで出懸しを此間と、一際美々しく装立て、かの短刀は紫縮緬の帛紗に巻て所持し、駕籠を飛ばして丸内なる酒井雅樂頭の上屋敷へ急ぎぬ。

(五十四)

佐藤の囑託にや門番の老漢執固き訊問立して、とかく門内に入れじとしけるに、此如時の尊さよ、格子越に

窃と二分金一つ握らせければ、志賀寺の上人が戀にし御息所の御手に觸りたるより嬉しさうなる面して、線鐵入かと思はれし頸を自由に屈め、違に權柄なる言葉を廢めて、佐藤の勝手口、坐敷の間敷、物置場の有所、庭の桃樹に毎年何升の實が生り、何家へ幾個づとの配分といふまで精細に教へるを、心急く折から不用、雜談と悉皆まで聞かず門を入り、一列藩士長家の東方端に、門前の車井戸を目的に着到き、八郎様にお目に懸りたきものと申入るれば、留守なりといふ。様子あつて明日は此地を去るもの、御歸宅は夜に入るとも手細なし、お待申してお目に懸りたき用事あれば、此お支關の隅なりと拜借して暫時休息いたします、と袂より手拭を取出して板間に敷き褌褌して腰を懸け、悠々と扇遣ひして扣ふれば、母親なるべし人品なる老女出來りて、八郎留守なれど我にて用事辨すべきならば聞かせたまへといふに、子細なき由を答へて座敷へ通りぬ。

扱其用事はと訊問も了らざるに、かの紫帛紗を巻返し、抜刀の短刀を其上に載せて、之にお見覺ありやと差出せば、老女見るより駭き、いかにして此品が……いや確とお見覺かござんすか。紛べくもあらぬ此家の重寶。扱はく此方様は露御存じなき事、お出先き遠くもあらぬ所ならば、八郎様へ御迎を上られまして、

眼前お尋遊ばしましたらばといふ。佐太夫が來りし時は疑ひもなく八郎在宅なりしに、留守を遣ひて逐還さむとしけるを、佐太夫それと識りてわざと情剛く、夜更る迄も待むと構へけれど、様子知ぬ母親は是非に會へと云を會はぬといへば、さる事ならば我會へし、と止るも肯かず支關に出けるより、堪らぬと勝手より擦違に奔出ければ、いづれ長屋の何家やらかに遁たるなるべし。老女彼方へ立ちて下女に囁けば、搜索に出でたるにや間もなく八郎と連立て還りぬ。

母親は短刀を八郎に附衝け、什麼せし始末ぞ飾言は肯きませぬぞ、と詰め懸くれど返詞はなく、佐太夫を睨めつけて、おのれ毒婦此八郎までも惱まざむ心か。母上此女が吉原の女郎佐太夫なり、と聞くより老女面色を變へ、汚らばしや士分の家に汝風情は容れ難し。行け、行けと、所天を食殺されし嫉妬ばらしに眼を角立て罵れば、八郎も母親の味方に力を増し、長煙管を杖に張臂して居丈高になり、佐太夫此短刀が何とせしぞ、此短刀が我物ならば何とする氣と鼻頭の冷笑。佐太夫自若として激する色なく、媚めかしき細聲にて、士分の家に女郎風情は汚穢とおほせられるれど、千石二千石の御大身にも添寝しながら、此方から可厭でふるほどの佐太夫、穢多の娘でもござんせぬ。また八郎様此短刀を何とすると、天道様の前にてちと立派過

ました御挨拶。月もなき闇夜の恥辱とはいひながら、お星様のニツや三ツは見て居られましたに、と唇を口にして笑へば、様子有氣なる言葉の端に母親棄置かれず、何はともあれ此始末を語れと八郎に迫れど、左右に言紛らしての果は佐太夫を罵るばかりなれば、佐太夫八郎を流盼に懸け、武士が魂魄を満眸に遺忘れたる御話、餘り名譽過ぎて御自分のお口からはおほせられ悪からむ、佐太夫代りて大概を語るべければ、遺たる箇所は傍から補助ひたまへやと眞綿縷に縊附け、昨夜の紅勘横町にて狼籍の始末を語れば、母親は唯呆惑ひて、驚かせし女人は我も憎きく女郎の佐太夫なれば、小氣味好てならぬのみか、煩桁の三四寸も斬付ざりしがまだ物足らぬ心地すれど、愚鈍の八郎おろかにも證據を押へられ、剩さへ對手がこれほどの悪徒なれば、面倒なる事にも及ばむか、と今ほどの氣色にも似ず凋れて見えければ、八郎不満なる面して、母上何を心に懸たまふぞ、其様に弱味を見せたまふゆゑ彼奴めが増長して、此上恣意ことを言放さむも知れず、いささかも御心配は御無用になされませ。佐太夫今日は何用ありて失しぞ、早く言ふて早く還れど、兩手を膝に載せて眞正面に睨めば、賣色身は粹好みして失禮ながら野暮なお武家は嫌ひ、今商人の女房となりましては、尙以てお武家方に用のあるべき理なし。さるに今日お尋ね申しましたは、参らずともこの事ながら、父御

信介様とは御馴染がひの寸志、これから雅樂様へお恐れながらと訴出で、女の身の力なければお上の手を借り、昨夜の復讐する氣なれば、一寸とその御沙汰に上りまして、まついお邪魔を致しました。欲うはござりませぬと證據の一品なれば、今少時御秘藏を拜借いたします、とかの短刀をまた帛紗に巻いて立上る袂を母親捉へて、先刻の過言は重々親子の過失、お心濟様にいかにもお詫はすべし。先少時くと切に留めけるに餘義なく座に着けば、母親改めて言語を卑くし、子息が若氣の不量見より、此方を害せむとて我知らぬ間に持出せし其短刀は、佐藤家一子相傳此家守護の重寶なれば、先祖よりの遺誠ありて、主君たりとも他人には借す事を禁じたるは、其刀一日此家に在ざれば必然災禍到る例數ありければなり。何卒金五十兩にて持主に戻したまはるまじきやと云へば、八郎母の袂を牽き、無用なりとの意を目語すれば、母親も目語を還すは我に委せよとの心なり。

佐太夫五十兩と聞くより血相變へて、佐太夫を盗人といひたまふか。えと、あられもない！否、否、五十兩にて此品持主に戻せとは、何とおぼし召されてのお言葉ぞや。證據の品なれば少時拜借とこそ申せ、拾ふたれば我が物なり、欲しければ與よと申せし覺えなし。さるを五十兩にて御自身の短刀戻せとは、此身を脅迫騙拐

と見たまひての御挨拶。佐太夫何時までか女郎ならむ、今は甲州の絹商人倭屋の内儀でござんすぞえ。百や二百の目腐金が欲くて此所まで恥辱掻には参りませぬ。町人は心ざま賤しくして、小判一枚出せば鬘髪首の二箇も買ふものやうに、お心得のお武家根性が憎うてならぬ。曲りなりにも非は通させぬ江戸の町人、其心清きは神田上水を見ても知たまへかし。此後はちと嗜まれて黄金の事なら乞食に語りて悦ばしたまへ、と袖を拂つて立起るを母親玄關まで逐懸け、詮證文なりとも望むまゝに書べければ其にて了簡したまへ、此度は八郎まで頭を下てしたるか詫けるを、其には及ばぬ事、たかが人を嚇したるまでの又物三昧、さほど御心配は過たりと、なほ留るを振切り、其足にて此始末を重役人まで訴へければ、八郎呼出されて吟味の上、閉門三十日との宣告を聞き返り、思へば罪な事と語りて幸助を驚かしぬ。

(五十五)

狐疑嫉妬は人間一倍の上盛なれど、對手にしては木偶人の幸助、粹の粹に食飽の佐太夫には、木片を嚼むごとく味なくして有興からぬば、往時世話を受けたる客訪と構言て、一日隔には菓を空けて其所等を狂廻りぬ。

浅草並木に笠屋といへる袋物問屋ありて、その家督の正助は二十六歳といふ豪遊盛。麻遊びに懸ては、他人の眞似もならぬ放業の名取にして、無先見の無頼なり。小倉庵の長次、櫻川善孝を股肱の佐興に引連れ、吉原を出店にして日夜を分ず入浸ける頃、佐太夫に陥られて大分取亂しければ、一手後れて甲州猿に此名木を根こがれけるを、何かの端には言出して悔みけるほど思染たれば、人の女房となりけるものを呼出しては、酒の相手に戯れて垣越の花を樂しむに、此男とて佐太夫氣に染みたるにあらぬぞ、没分曉田舎漢に纏附かれ、色も香もなき茶漬の對膳よりは、藝人まじりの華々しき酒席は、もと其に起臥の故國とかく忘れ難く、しかも氣が腐らすして可笑ければ、月に五六度はこの仲間に入亂れ、飲みながら折入ると正助の依頼を何かと聞けば、今天驚絨の出物ありて代價は相場の半なれば、外へは散らす一手に專買めたまものなれど百五十兩ほどの不足いかにしても工面の着ざるに當惑せり。平素の馴染がひにといふも女々しき口上なれど、幸助殿をその御口頭にて御丸め、今月末までの融通を頼みたしとあれば、此方如き御氣象のしかも男子の口から、私風情に頼むとの一言がしほらしくおいとしければ、手元だにあるものなら今夜にもお間に合せたけれど、知らるゝ通り幸助殿の今の身上、大盡の息子とて唾が黄金になると

いふではなし。我ゆゑに今は勘當の身なれば、國元の母親からあてがひ扶持の月の金額より入路なく、なか／＼余裕の餘の字も覺束なし。もしまたあらば此佐太夫がおめく／＼と虎子にして生しておくものぞといへば、一座顔を見合せけるは案に相違かと氣毒には思へど、假初にも請合ふ可き目的なれば、手持不沙汰の苦しまざれに、佐太夫受て置たる盃の冷たるを飲干しぬ。

其時善孝進出で、御如在もなき此方様には釋迦に説法士佐珠に彩色、ちと憚多き小才覺と御禮責のあらむか知らねど、蕨細川の石室様は何なるものでござります。此方様のお一聲は鴻池の連判より請合といふに佐太夫小膝を拵ち、其よく、思寄らざりしが石室の富四郎様といふ長者おはしましけり！之に口を掛るならば、十に九ツまで纏まらずといふ事はなかるべし。されば何分にも其方にと此場の相談は整ひぬ。

それより二日經て約束の當日は初雪ちらつき、向島を次手ながらの見晴と、吾妻橋際なる河岸通の小奇麗なる饅屋に正助と落ち合ひて、其所より川向なる細川の邸内へ迎手紙を持ち遣けるに、とかく男子はお武家も女には弱く、寒氣は後草を染透す雪路も、君を思へば徒足も厭はず、と來て見れば遂に識らぬ男の一座なるに落膽して希有なる面色にて何用ぞといへば、左太夫巧に其場を繕ひ、相互に紹介はして、いづれも昔

のお客同士、佐太夫も今は所天ある身は色氣を捨ての親類交際。此方様方も此身を縁の棧橋にして、以來はお心易うなつて下され、と跳子の數を更て一坐膝崩れて熱き呼吸を吹く頃、借財の相談を仕懸けて事實の段々を語り、佐太夫が證人に立ちますからは、女ながらも身に引請け、吃度御迷惑は懸ませぬほどに、百五十兩程御都合なされましてと正助相俱只管頼みけるに、今此所に持参なければ我は一足先に歸り、其ほど調へて待てければ、時分を見計ひて我窓下まで來るべし、と目前にて證文を書かせ、之は金子と引替にと立上るを引留め、また數献を勤めて歸際にはわざと佐太夫一人見送り、階子を降ながらそつと合羽の袖口に手を差込み、宮四郎の腕を有情の一握、あら忝けなやとばかり名代の好色者、眼尾を垂れてにたく／＼笑ひに相好を崩し、女の手を占返して、此方も其方の依頼を聞からは、其方もよもや此方の依頼を。おほせらるゝが諄し。少々身に協ぬ事なりとも無理して、吃度お依頼を協へて見すべしと返せば、ぞく／＼と眉を頭ほせ、其や眞實か、眞實かと女の顔を覗き込めば、之が欲さにかと流盼をくれてやれば、涎を噉込みて軽く背後を拵き、空言いふと肯かぬぞ。空言でない證據見せうか、と宮四郎の首筋に手を懸る時下女來合

せければ、其儘お危ないと二三段に足に降て、うちくと下駄を穿く富四郎の後より合羽の襟を正して、只今直にお後からといへば振返りて、お花、正助など……承知せぬぞ。此方様とは違ふぞといふを、例のたたくに聞きて早く参れ、詞よりは思ひを遣して歸りぬ。この石室富四郎は細川家に譜代の金方元締なれば、藩主の財ながら黄金に身内冷えて、持病は疝氣それゆゑか。同じ苦い目をする事ならば、疝氣が一生立續けに病て見たいと、善孝が人を笑はしけり。

または同じ扶持に頭を下ぐるものあらば、一生の内に一月にても此役が勤めたしなぞと藩士の囁語。それだけの役目はいづれか主君の爲に心を竭さむに輕重あるべきにあらざるを、かくまでに此役を人の美む事、全く金銭出入の自由なるより、才覺次第大小の幻術を遣ひ、人血にて身皮造る世上一般の風習。さしたる扶持米、給金にはあらねど、士分町家を論ぜず、總じて大構の家の財布底を握るほどの役を勤むるもの、いづれか内福ならぬはなし。是皆不義不徳のやり繰、富四郎酔うた粉れに往、日佐大夫に語りけるを聞けば、月の末には勘定検査とて、一月の仕拂帳を巡檢の家老に見せ、減殺て預りの金額を曝す家法なれば、千兩箱を積累ねて見分に供ふれど、一々其裏を檢むるといふにあらねば、預金私費の月には下積の箱に石瓦を詰めし事二度までありとかや。さもなくば協ふまじく思はれぬ。

佐大夫に打籠て通ひける頃は、その欺心の得たきばかりに、欲しともいはぬ頭髪飾を買與へし、小間物屋の月の仕拂證五十兩を下らす。これに揚代を第一として色遊の雜費何くれと積らば二百にも上るべく、或は高利を食りて貸金の未納等一切を算用せば、随分一箱空こともあるべし。此度の百五十兩とても此箱の中なる一包半なれば、公然に町人女子などの入込むは、藩士の手前も後護ければ、窓下に呼びて渡さむとの手順なり。

好時分と二人窺に石室が武者密の下を過ながら、佐大夫が咳拂ひを合圖に、富四郎顔を出して四邊を覗ひ、長き紐頭に金包を結着けて往來に投出せば、正助手早く引解き、懐中の證文を出して結付くると、内より手繰込みて雙方も挨拶なしに目禮して立去りけるを、折から筏を流す番夫が不思議さうに見て過けれど、人は知らぬつもり内證く。

(五十六)

前祝儀、珍らしき物の降れるを好機、これから舟で上流と、百五十兩の懐中に寒氣を知ぬ雪見舟、櫓拍子徐

伽羅枕

に巨燵こたつの上の小酒盛こさかもり。なるほゞ女子のいふなりにぞくりと出すほどの男は、如何いかにたどえ？一盃飲ひら盡みて佐夫に侑ましながら、御人相見るから知るとの一言小癪せうしやくに障りて、此罰はつらたり中め、我はむかし随分世話になりたる廉れんもあれば、かく氣を揉みて石室いしむろにまで迷惑めいわくを懸かけさせぬ。いはゞ義理は我より貸主かひぬしにあるものを、白痴たわけと云はぬばかりの口上、自己おのれは情いひひこ人の所存きざりが憎し。一寸舌を見せたまへ、断ちぎれはせざりしか、言へば言はるるとして無法むぼうなつしやり様、此方様にはどれほどの白痴うすのろに見ゆるか知らねど、佐太夫の眼には一知半解いちたんぱんげの美男うつくしきよりも、實意じついある番瓜かぼちやが好もしい姿に見えます。内の幸助殿と二幅對の業平なりひら様、餘り悪わるくいふて下くださんすな。ほう、是れは知しることとて失禮しつれい御免、兎角うづつ當世たうぜの女むんなうけ悦よろこば、非出ひでの玉川山たまがはやま吹ふの色男いろおとことは、酒機嫌さかひの悪わる、諸半もろはん分ぶんか知らねど、さりとて面情めんじやう言草ごんぐさ、その頰骨ほほほねに啣くは着くいてやりたし。其よりなほ痛いたき事ことしてこの鬱念うつねんを露あさんものと、連つかに酒に亂まれたる風ふうして、其往昔しゆひ正助せいすけと首尾しゆびの夜の光景あかりなまを彼此たがひと語かた出だせば、忘わすれぬ思おもひを煽あおられてもや〜と心亂こころまれ、膝ひざを崩たふし、身を振り、箸はしも盃さかずきも捨て夢現むつげんになりける、なほ、思おもふに思おもはれぬが戀こひの通例なうれいとて、我も終はつに家暮やまに根引ねひかれて、かく世話女房せわにやうぼうに張やつて果はつるかと思へば、女子むすめと生なれたる身みが一生いっしやうの無念むねんと、心こころあり氣きに啣くはちぬる粹すいこかしに脆もろくも仆おれて、人の弓ゆみは響ひび

伽羅枕

れぬ世よ 諺ことわざ、我も見過み過すく口惜くちやく事ことと、なほ心あり氣に答へければ、もどかしや、義理ぎりといふものなき世間よならばと、有情なさけの流しりぬ 時ときに正助力せいすけを得て、大丈夫だいじゆう此方物こなたものと無遠慮むえんりょに擦寄すりより——ひたと兩體りやうたいを密着みせつけて、此で義理ぎりも糸瓜いすなもなき世間よと障子しょうじを立切りぬ。

此日このひ暮正助きせいすけ歸宅きたくして酔醒よせいめ、財布さいふの底そこを叩たたけば、ころりと五十兩いそりやう一包いっぱく。ちええ！馬鹿ばかな事を、不了簡ふりょうかんなど噓うそめども噓うそまれぬ臍はら緒お切きての失策しつせき。おのれ、狐きつねめ！ええ夢ゆめであれ〜。

(五十七)

色狂いろまがの果はは紙衣かみえ、その糊のり離はなれの時節ときふせありて、幸助せいすけの母親はは死去しゆくわぬ。原因げんいんはといへば子が可愛あいさ、積たる苦勞くろうに支柱しゆくちゆうの老木らうぼく折おれければ、仕送金ししやくきんの路忽ろこつち絶たぬれど命いのちは惜おしや、さしあたりて饑渴きかくの苦し紛まれに明日あしたの思慮しりょもなく、衣類いり手道具てだうぐあるにまかせて賣沽うりか却かすほどの境界くわいがいに逼おめられながら、むかしの榮華えいがは口くちに目に身に染着せんせきき、朝あから鴨かひを好このむ始末はじめに家内けいだいはだらしなくなり、揚句やうぐは揚ありて喰くはむ疊たたまで失うくなし、高價たかく買かひし家宅けたくを、頭下かぶけて無代むだい同然どうぜんに人手にんてに渡わたし、何なにというても甲府かうふは此方こなたの古里ふるい鬼おにも棲すまじ、まして御父おや様の御息災おんせきさいなが愁しみい中の歡喜えんぎ。まづ此こへ志こころとして二人糊口ふにぎの憂うれにも有附あかむ、と佐太夫さたふの言葉ことばはさる事ことながら、我も俵はたけ

屋の幸助、乞食はづかしき夫婦連にてうそくど、故郷だけに行かれぬ不面目。此身の意氣地なしを披露に罷越す分ならば我慢もなるべきが、俵屋の大事な暖簾に江戸の泥をわざ／＼脊負て行て塗る事は、かくても奇生ならぬ幸助には出来かねる、と道理は至極なる挨拶なれば強てとは勧め難く、さればとて船らむ島はなし。佐太夫一氣象の女人なれど、乞食までに成果てむとは思懸けざりければ、案じて案じぬきたる結極、ふと思出せしは上州松平右京の藩士に、貝原源八郎といふ武人あるはずなり。この士佐太夫が二十三のまる一夏より秋へ懸けて通徹けるが、田舎氣質の實意に附込み、家暮誑の血起請を書きて、此身廓を出し後身の寄邊を失はば、何時なりとも尋ね來次第妾にすべしとの醫紙を取置きたるは、人の行衛は測り難く、もしもの事あらむ時の、役に立むは好もしき仕誼ならねど、一先此士に哀訴き若干の支度金を貰ひ、それを此方様に渡しますほどに、手切と思つて其を握つて志す方に身を寄せ、お一人だけの活計を工夫したまへ。商人の家に生れても算盤など持馴れたまはぬ此方様の事なれば、とても二人一所に暮さむほどの渡世は覺束なし。御縁もあらば重ねて。名残は惜しけれど暫時離縁て下され。何事も此方様のお益と因果を無理合にして、現時は二人ともに江戸が故郷、上野鐘も今宵を聞納めと進まぬ足を引きずり、上州高

時に賣れたる親分顔、荒町の關内惣右衛門といふ旅籠屋を便り、此所を足溜りにしてまづ貝原と尋ねければ、其の人住むと聞くに船を見たる流人の歡喜、幸助は涙を流してやれ嬉れしやと安堵の緩氣より、旅疲れ出て身動き憂く倒るゝほどの初心さ。之を手放しなば百兩持たしても、一月の内に乞食と流石に不便を催しぬ。久しぶりにて懐かしや、ようこそ尋ねたれとは口上ばかり。源八郎の姿を見れば昔と變りて、何所となく影の薄きに胸まづ轟くを推鎮めて、零落の段々を語れば頭を掻きて、なるほどその約束はしかとしたれど、我も浪費過度に首尾悪く、女房子を荷厄介なる身上のしがなさ。空言とも思はゞ恥づかしながら宅へ來て見てもくりやれ。さりとして武士の口より一旦かうと交へたる言葉は背かじ、力の及ばむ限り算段して見むとて立歸りぬ。

其翌々日の早朝十兩を懐にして來り、秘藏の一刀まで買入して、工面の金子が纒如此！思ふ百分の一なれど寸志なり。金子と思はゞ腹も立つべし、寸志を受納くれよと氣毒顔に述べれば、大概源八郎の身元も人に尋ねて、其言葉に相違なきを知れば、取に足らざる十兩も、ある家の千萬兩に越えたり。その實意はなかく

伽羅枕

嬉しく、突進さむは心無やうなれど、これしきにては此所までの路銀にも消ゆべしと推展せば、源八郎海氣味悪く、此上は身を絞りにて血は出もせむ、金子ならば一錢も才覺の方なし、と背汗を流して途方に暮れけり。
(五十八)

此一間の客の所為可怪と覗みたる惣右衛門の鑑識違はず、果してかうした事と、障子の外に立聽せしが見兼て飛入り、及ばずながら雙方の便益に悪からず計らはむ。ともかくも段々の始末を委細聞せたまふとあるに、佐太夫自一至十を語れば、之はいづれも様に一理あり。お宿を致たるも何かの御縁なれば、此場は亭主が貰ひまして、些少ながら持合の五十兩お立替申すべければ、御不足なるべけれど其にて御了簡なし下さるまじまやと言ふ。當の敵は古鍋ほど金氣無きものを、何を目的に此上に怨を張らば、もとより關繫無き宿の主人に手を退かれ、虹蜂取らずにならむも口惜し。了簡の仕所、足手纏ひの幸助だに拂ひなば、世間に男子有む限りは、此身はいかにともなるべしと分別したれど、例の氣象なれば、因縁なき金錢受けむは不愉快と辭するを亭主笑ひて、それしやの果とも思はれず家暮堅い事。金子を無錢請るが可厭とあれば借た分になされ。五十兩は幸助様にお渡し申して、お花様はその抵當に惣右衛門當分預りて、來年三月の晦日ま

でに右金子御持參の上お迎ひにお出なされ。もしまた一日なりとも期限過なば、お渡し申す事成難しとは、世智辛き世中に五十兩、わけもなく借むは神か佛か、慈悲なる心掛と驚きしに、なるほど此所かと佐太夫其意中を見貫きたれど、もとより幸助と離れたき心願なれば、好機會に得心して金子を納むれば、此場はさらりと落着して、源八郎呼吸を吹返しても、來りし時の威勢はなく、店のものによつて挨拶して歸り行くを、亭主見送りて帳場の女房に向ひ、長いものには巻かれよといへど、其長いものを巻くは……。其ゆゑにらとお稼ごなされ。いや、とんだ所でお談義。

伽羅枕

何を其様に鬱々たまふ。圖らず五十兩も手に入り、之を資手に此方様の心懸次第、商賣に大吉利を獲るならば、勘當もゆりて五代の俵屋幸兵衛となり給ふ今日が首途に、今までは一所苦勞せし花にも、ちと嬉しさうな顔見せて喜びせて下され。喜びたくば勝手に喜べ、おれは悲しいと獨るゝ意氣地なし。想ふに離別が可厭の未練と擦寄り、悲しいとは何事か聞かせたまへと言へば、流眄にかけて、薄情女、悲しくはないか。扱は此度の離別か。いや、悲しくはないかといふに。それゆゑに離別かと聞きましたに。知れた事、離別が悲し

くはないか。我男子さへ何となく心細きに平氣なる其方が面。我は知つたぞ、薄情女め！知つたぞは何をい
えと言ふな、知つたぞ！此方は知たか知らねど我はすこしも知らぬ事。えと言ふな、知つたわ！えと此人は
没分曉演、知つたとは何を知たのやら、獨合點せずとも理由いうて聞かせて下され。汝はぬけく、と能く其
様に言はるゝもの哉、五十兩如き小額を推戴き、所天ある身にして我まゝに身體を抵當に置きたるは、元
木に勝る末木なしとや、かの源八郎に戀を焚して貧き我に見替へ、金子も彼奴の手より出たものを宿の亭主
が義氣に見懸け、往生、窘に納得させて、此幸助を手もなく逐拂はむとの義策、江戸にて喰詰め、還るべ
き家はなく、渡世の方はなほ無く、此儘二人密着て居たらば乞食なりといふ。此身は世界に其方に見替ふる
家もなく財寶もなし。たとひ食ふや食はずにあるとも一ツ酒、菰に添腹して、草枕の夜露にぬるゝを無上の
娛樂なれば、乞食とはおろかなる事、死ねとならば——一所に死ねとならば、其さへ可厭とは言はぬ心なれ
ど、身に替へて可愛き其方を乞食にさせむ事の、不便さばかりに引ずられて上州くだりまで來たれるものを、
この眞實の百分一も見えたらば、いかな悪蛇でも害は爲まじきに、馴染なき國にまでおびき出して、怨恨に
死ねとの惡戯か、罪深過たる我を玩弄びの仕儀。腹が立つ、口惜しい、無念だ、と五十兩を疊に打着

け、身を悶へて泣出せば、佐太夫わざと腹立たしく幸助を突遣り、これ喃邪推も節にしたまへ。此家の亭主
が聞かれたら折角の厚意を無にするのみか、無い腹を搜りての遺恨立を立腹して、命の蔓の五十兩を玉なし
にすべし。えと五十兩が何だ、命の蔓とは思、敷言草、おのれまでが我を輕侮るか。不用わ、不用わ。此金
子唯の今還して失せよ。其方にも今から暇を與れた、と狂氣のどとく涙まじりに吼るを、二時間餘に組伏せ
たは、兎角手管は吉原仕込の事。

(五十九)

佐太夫は蚊の喰ふほどにも思はざるを、幸助強合なき離別の涙に手甲を濡しけるに、これも一ツの慈悲罪
障消滅の端にもと、驟外まで見送りければ奮躍して實意を歡び、少時棒鼻の掛茶屋に憩めば、見る
目は老女一人とて幸助憚らす聲を立て泣くを、空言八百に賺宥めてやうく發足せぬ。
後は馴染なき地に同行なきも寂しく、なほ由縁なき家に食客の窮屈は、無錢にて飯喰ふ事を思へば氣儘
に足も投出されず、客分に扱はるゝほどいよく可愁れば、何なりとも相應の役用を授けきたへ。自墮落上
なれば一廉の用には立つまじけれど、客の給仕などは苦もない事、かうして一日所作のなきも切なきものな

ればといへば、吉原の太夫様ともあるものを、此僻境の給仕女につかうたら、諸大名のお部屋方には何か成る、冥加ない事はせぬもの。何程あればとて行水湧かすに伽羅は無益、急かすとも今に好買人の附くを待ちたまへ。食雜用くどとどかく氣毒がりたまへと、江戸と違うて田舎は、あれ、米俵が裏に轉けてあるものを、此方の二人や三人口が殖るたればとて、どれほどの損失が立つものにもあらねば、心置なく何日までも落着きて時節を待ちたまへといふ。其を推してともいひ難く、二月餘それなりに暮しぬ。

亭主に大事がられて奥の一間に起臥の姿は、旅人に見るものはなけれど、二百人といふ子分が出入劇しきに、何時識られて沙汰されて、親分の小指と唱はれける浮名女房の小耳を痒がらせ、家内可笑く素れの様子を見れば、此家も水き臂の据所ならずと覺悟の折から、岩鼻の代官なる松浦權平といふ好色家に見出されて世話さるゝに定まりぬ。何の事もなく此年は暮れて明る正月、三月懸りにてやうやく此の老士を丸め、仙臺といへる大普請の料理店を開きて、庭つゞきの別室に權平が忍びの伽の同衾は内証、帳場に構へて萬端に采を揮り、庖人酌女その外の奴婢二十餘人を女の手一ツに進退して、萬事を江戸前に仕立てけるが人氣に合へば、日増の繁昌に浮かれて此に身を定むるとの心にもあらねど、可厭にもあらうで三月の末とはなり

けり。よもやと思ひたる幸助、薦は被らすむかしの姿になりて尋ね來り、五十兩を佐太夫に手渡して、之を引替に明日にも同道せんといふ。見らるゝごとく此店は惣右衛門殿の出店。金子の恩あれば奉公同様に、我が預りまして是までに出したも、此方といふ所夫ある身は妾手懸となりて色を賣るべきにあらず、さればとて女人の身の外にこれぞどの所業はなし。此商賣を思ひ着かれたを幸ひ假の主人となりて、此方様の迎ひに來たまふを待ちに待ちました。今宵にも連立て行き度は山々なれど、今我が無くては此店明日より立行きかぬるを餘所に見むは、なんぼう借たる金を返すからとて現金過ぎて薄情なる所業。さりながら待焦れたる此方の顔を見れば、一日も此家に居る氣は無ければ、惣右衛門殿と談合して好様に計らはむほどに、今宵は關内に宿を取りて吉左右を待ちたまへ、と一先送還して速に惣右衛門を呼寄せ、權平方に人を走らせ、二人揃へてこの始末を語れば、いづれも當惑の眉を顰めぬ。

大略は識れど此方の了簡をよく聞せたまへ、と惣右衛門が詞を佐太夫笑ひて、誰しも盤の所天は下さらぬに、現時の商賣は不思議に性に合ておもしろければ、幸助とはすつぱり手を切り、仙臺樓の姉御の事と答へけるに權平喜びて、さらば爰に二百兩を離縁金に、怪物を拂へとの依託を惣右衛門が唯諾、五十兩は封のまゝ差

戻し、別に二百金を見せて幸助を談ずれば、去年は江戸を出る時、此様に古郷へは足踏ならぬと、男子らしき口上吐たるものが、生木を裂れし苦惱には何事も替られず、のめくくと甲府に立歸り、甘き親類をたらしめて首尾よく歸參の上、またく二三兩引擡うて連れに來たりしほどの幸助なれば、實家俵屋の相續と、この佐太夫を擇ふたつどり二にいづれといは々、これじやくくと佐太夫の腰にしがみ附くべき大墮落の幸助が、何とししめれて戯言にも得心すべき。女房の賣物は御座なしと加返して、惣右一生の辯を此時と掉へと更に取合はず。相談はなしは中絶いれかけにしてまづ此次第を二人に語りけるに、其儘捨置きたまへと佐太夫のいふに任せぬ。

待てども挨拶なければ、幸助仙壽樓に向向きて逢むとすれば、客衆に連れられて留守などと、幾度行けど絶て對面はされば、怨念うらみの餘り突詰めたる双物三味に驚かされ、馬鹿こけの一心は可怖物こはいものと女人の方より詫入り、手を引れて甲府へ行くとも、直に遣還れよ——おつしやらないでも合點。

(六十)

引かるゝまゝに甲府へ行けば、幸助はまたく勘當の身上とて、なほ財布底に微少の音するを頼みて驛外しゆくはづれに世帯を持ち、二月ばかりの居喰かまのうちに釜中に物盡きぬれば、浮む瀬もあれと甲府こうふの廓くわくに身を賣り、狸しやうぐや々々屋

の女抱となりて此國開國以來の八文字を踏みけり。

江戸新吉原に名代の太夫落とて、色沙汰近國かに陰かくれなく、四月にして信州松本在なる豪農細谷甚左衛門かうのうほそやちんざゑもんに請出されぬ。

賣色の間は幸助に月々貢ぎて、人知れず折々の首尾に悦ばせけるが、此度甚左方に引取らるゝ始末を語りて、長くとはいはず、二三月ほどにて必ず還歸らむを待ちたまへ。其間は不自由せぬやうに彼地より餽饋しゆくらむといへど、幸助いかな肯かす。兄分にして同道せよと理非も分らず通りければ、とてもゆかぬ奴と、甚左は一足前に發足して、後形附に残れる重手代おもてだいに一十を明かし、門出は明日といひ觸せし前夜の五時過、闇に紛れて幸助を遣去おまのりに駕籠を飛ばしぬ。

半里餘を一息に馳けて、この坂道は一骨、さつと汗を拭いて一服と、昇夫等勇みに勇むで來懸る杉並木の蔭より、幸助跳出でゝ理不盡を言懸け、たとひ賣女にもせよ、所天あまあるものを一言の斷りなしに連行は、勾かどわか引よ密夫よ、女房返せ、返さずは出る所へ出て取て見せう、と血相變へて手代に捻懸け、懷ふところ中に白鞘みじかきの短刀を呑みて、挨拶次第恐ろしき事せむ氣色なれば、かく魅み入られては力審ちからさぐにて遁れがたとしと佐太夫曉

りて、手代に相談を着け、甚左へは内密にして幸助を實兄と觸込み、松木へ同道と事極まれば後に可怖ものなし、と其夜は程なき次の驛に宿り、三挺の通し籠にて松本に安着。

手代口を慎みければ、幸助實兄にて通り、甚左にも殿付に呼ばれ、腰で喰ふまで雖有き身分の樂なるに、心の中はもやくと、我物を老夫めが我物顔なるに堪へがたき格氣を、破滅の端緒と佐大夫獨り心を傷め、

人の見ぬ間を覗ひては其不了簡を諭せど、幸助いつも首を掉りて、冷たきものは猫の鼻と傾城の心、吁伊左衛門のいうた通り、おのれ襟元に着て幸助を袖にするな。義理といふものが其では濟まいにと、我耳の聞えぬより内證話の聲高なるを、聞者ありて甚左に告たりけるより、胡散臭と考着れて、幸助が無遠慮に纏綿ふ風情目に餘りければ、睦し過たる同胞も見苦き物、と案の定投出されぬ。

幸助人間に喰でも生らふものとの覺悟か、結句之を歎び、目的もなく佐大夫を引ずりて再び甲州に還り、善立寺といへる門徒寺の奥座敷を借りて、昔の影はなき淺ましひの二人暮。佐大夫今歳二十八とて殘花の時節に及べど、なほ色香深く雜木山の一本櫻と、東郡別田の大酒造家兼澤茂右衛門に湯歸姿を見染められ、妾にとの所望をばや可厭なりと言へば、幸助思入りて手を合せ、干葉の味旨汁澤庵の尻尾に瘦さらば

ひ、なんぼう寺に住めばとて、これ幽霊のやうなるむかしの榮華男を不便と思ひ、慈悲じやく、拜むほどに少しの間なりと辛抱してくれとは、何程好たる女人の傍が好ければとて、ひもじくは協はぬ理。眞實

その心ならば一年が二年なりと、奉公はするに苦もない事。さりながら松本にて懲たれば大概ならば断りたまものと十二分に育を絞り、必ずく格氣はすまじきとの契約にて、茂右衛門方に引取られけるに、二月とは辛抱ならずして、五月蠅ほど兄でござると尋來るに氣取れ、またく永暇といふ所を、此男には露ばかりの未練なく、義理づくの夫婦なれば、二世までの縁切りて幾久しく此家の御厄介になりたま心願。

此方幸助に心残らぬ證據は、つひに一度の不勤せず、また首尾の外出だにせざるにても知りたまへど、是ばかりは佐大夫が口から此までに幾度と數ふるほどの眞實の一つなれば、欺騙さへ實事に聞かする辯舌に律義なる老父は納得して、手離金百五十兩にて此後は他人との證文を取りければ、幸助も大概に断念め、これを資本に連雀町に住ひて小金貸を始めけるに、慣れぬ業とて多數貸倒に弱り、何の思慮ありてか鐵

澤へ引移りたりと聞きしが、翌年の五月十四日、あれまでにして戀を仕途ず、傷しや病死と人の傳聞。茂右衛門五十路を踰えて衰弱の閨房疎遠を識り、養子二代の茂右衛門佐大夫に懸想し、夜々這忍ぶ事のうる

茂右衛門五十路を踰えて衰弱の閨房疎遠を識り、養子二代の茂右衛門佐大夫に懸想し、夜々這忍ぶ事のうる

伽羅枕

さけれど、此心に従はずば春はる 秋あきを隠居かくいしたくなりての後は、替かされて放逐はなはられむも意氣地いきちなしと、此子細こしほを隠居に語りて暇を乞へば、眞實まことなる心を喜び、此身代今は我物われものならねば、手元に有合せたるを心ばかりと涙金を貰うて此家を出けるが、世には女人おんなに廢物すたりなく、また賦かじ 澤さわに豪家ごうかと聞きわたる吳服ごふく荒物あらいもの問屋とみやなる倉田くらた寅造とみぞうとて、六十七歳の老父おやなるが上、へろへろに顔かほの崩くずれれたる癩かじ 病びやう者の召仕めいしにぞなりける。金が欲ほしさにかと聞きければ其心こころにもあらず、心願こころがねありて同衾ひとつねはなり難たがけれど、唯ただ作りける罪つみの無量むりやうなるを消滅しょうめつせしめむ爲ためなれば、及およぶほどはお世話申すべしとて、我われから勤こまめてまづ草津くさづに伴たひ、それより道々みちづかの温泉おんせんを滴たして、旅枕たびまくらの伽がにこれまで聞ききつる其方そのかたが罪業つみごころは、多くもあり深くもあれど、我われへの眞實まことはまた譬たとふべきやうなし。此報恩このほうおんの一念ひとしるべばかりにても地獄じごくへは我が遣やまじきぞ、と夢ゆめにも口走くちをりて歡喜こころこほにいよく張合あはつぎ、それより祖師波そしは 題だい 目めの靈蹟れいせきを拜まがみ、一人は宿世すくせの罪つみ、一人は未來あしたの罰ばちを免まぬがれむと、佐渡さつとまでおし渡わたれる頃ときには、爛たれし病びやう 肉にく 乾かわ 燥はりけるより、引返ひきかして本宅ほんたくまで送おく届とどけぬ。家内けい内は擧ありて神佛かみぶつのごとく恩おんに感じ、長くこの家に留とどまれといふを夜脫よれがして路みちに黒髮くろげを斷き拂はひ、再び男おとこは持

伽羅枕

まじきぞと、二十八歳ふたじゅうはちさいより今年ことし六十二歳むそふたじふさいまで清淨けいじやう無垢むこの寡あがら 居い。今は知音しよんの方に寄食きしよくて薪水しんすいの勞はたらに奔走ほんそうし、車くるまに乗のらず、魚いさなを喰くはず、絹きぬ 物もの着きず、遊山ゆうざんに出いず、かねて谷中たにちゆう長安寺ぢやうあんじに一基ひとこしらの石塔いしだつを建たて、三十四名さんじゆしよんの遊客ゆうかくの亡な 魂たまを祀まつりけるに、月々つきづきの墓かぶを考かんがへた後の勤務きんむにして、其昔そのむかしは千兩せんりやうにも唾つばを吐はけり、身みが二錢にせん三錢さんせんを仇あだ費つひせず、之これを香花かうかの料りやうに回向くわうきやうを願ねがはぬ。大悟道だいごだう、大發心だいはつしん、その種たねには何なにが成なりけむ、聞洩きこらしつれば實事じつじを誤あやらむかどて蛇足へびあしを加くへず。好事士かうじしの尋たずねたまはむとならば、團子坂だんござか大松葉だいまつかの寮れうに老女らうにょなほ住すめり。

(終)

(一) (一寸の間)

娘の香和七



和七 お嬢様、あなた大相變たいさうへんの虫で、どうなさいました。待人たいにん不來ふらいといふやうな姿でござりますね、どうかなさいましたか、あ、と袖を巻けども、お染は知らぬ顔で、とつと考へておる、

和七 分りました、あなたは私とかういふ譯におんななすつたのを、つまらぬ真似をしたと、今更悔むであらうしやるのですね、どうせ左様でござりますやう、私風情のやうなものば、お否いやにおんななされるのも御尤でござります、

和七 え、どうせどうしを譯さるは、と拗うねてくるりと後向になる、

和七 あれさ、そんなに怒らなかつても、とささやなすか、そんな譯さるは、とささやなすか、

和七 そんなら、そんな譯さるは、とささやなすか、

夏小袖

夏小袖

和七 どうも「ね」ばかり多くつて、さつぱり理が分りませんね。

そめ それ御覽、お前だつて「ね」を附けるぢやないか、

和七 此「ね」は入用の「ね」で、貴嬢のやうな不用の「ね」では違ふのでござります、

そめ お前の「ね」はえらうござります、

和七 まあそんな事をおつちやらずと、後をお話なさいます、

そめ あのね、お前とかういふ譯になつたのは嬉しいけれどね、いくらお迷ひに思合つても、とてふ夫婦にはなれまいと思つてね、それが私は苦勞でならぬ、

和七 へえ、それは一體どういふ譯でござります、

そめ 父様はあの通りだし、力に成て口をきいてくれる親類は無し、それよりまだ苦勞になるのは、お前の變心……。

和七 變心？誰が、私が？私が何日變心をいたしました、いゝえ、何時の何日に變心をいたしましたよ、お嬢様それを聞かまじやう、はい、其譯を聞かまじやうかい、私はそんな事があらうとも、貴嬢の事はかりは

夏小袖

死でも忘れません、生れかほつても忘れはいたしません、七生までも忘れません、その位にまで念つてゐるものを、何を證據に變心なんて、多度そんな事をおつちやらず、

そめ 口ぢやいくら立派な事をおいひでも、

和七 どういたしました、

そめ ちやあんど知れるよ、

和七 どうして知れます、

そめ ちやあんど知れるよ、

和七 唯「ちやあんど知れる」では通りません、かういふ仕打があつたとか、こんな素振があつたとか、唯な處をおつちやつて下さる、

そめ さうさ、あんな仕打もあつたし、あんな素振もあつたし、あんな事だの、あんなことだの、あるとも、あるとも、

和七 獨で承知してばかりおつちやらずと、はつきりと分るやうにおつちやらず、

夏小袖

そめ いはなくつても私には分つてゐるよ。

和七 おつしやれますまい、おつしやれる理がない、まあそんな事をおつしやつて、多度私をおいぢめな
るのが宜しいのでございませう、嗜好いお慰みになりませう、私は馬鹿でございませうから、

そめ 和七、和七つてば、

和七 私は馬鹿といふ名でございませう、

そめ そんな事をいはないで、和七い、

和七 和七は今朝ほど出まして、留守でございませう、

そめ もうそんな事をいはずに、返事をしておくれよう、

和七 和七は昨夜から出て未だ歸りません、何だかお嬢様に嫌はれたとかいつて、それを苦に病でをりま
したが、あゝいふ氣の小さい男のことではございませうから、悪くすると、身でも投げたかも知れませう、可哀
さうな事をしましたよ、

そめ 縁起の悪い、もうそんな事をいひひでなうよ、

夏小袖

和七 いはせる人があるから申します、

と慥けんじん食にいふ、お染はづくと寄て、和七の中なか指ゆびと食い指ゆびを握て、

そめ 私が悪かつたから堪忍しておくれ と曳たり、振たり、

和七 私は何も貴嬢に、堪忍してくれと、あやまられます覺はございません、私は奉公人、あなたは御主人
様、その御主人の貴嬢が踢けやうと撲たかうと、どうしやうと御勝手次第、何もそんなにお話をなされることは
ございません、

そめ そんな事をいはないで、眞箇に堪忍しておくれつてば、今私のいつた事は皆虚言で、お前が變心
をしないのは、よく知てゐるよ、冗談にいつたのだから、どうぞ堪忍しておくれつてば、よう和七、

和七 夫ぢやあ、今おつしやつたのは御冗談でございませうか、

そめ あゝ、 と氣毒さうな顔、

和七 あなたも……、

とお染の膝をぐつと抓る、

夏小袖

そめ あいたよ、

和七 好加減になさいまし、悪い洒落をなされる、私は真に受けました、

そめ 覚えがあるからさ、

和七 ここらで口説はやめにして、ちと身に染みたお話をしやうぢやございませんか、

そめ それぢやね、身に染みた話をするが、お前私が可愛とおもふなら、辛からうけれど、後生だから父様の御機嫌を取て、何でも彼でも和七くといはれるやうに、御氣入になつておくれでなくつちやいけな

和七 へえ、それはもう萬々呑込むで、お氣に悖はないやうに、御意に入るやうにと、精々働いてやつてをる積りでございませす、

そめ それから又、兄様にも取入てね、可愛がられるやうにしておくれよ、父様は老年の事だから、お前との譯なんぞに氣の附く氣遣ひは無いけれど、あつていふ兄様の事だからね、お前がお氣入でさへあれば、私達の味方になつておくれに違ひないから、兄様にも父様にも、双方へも甘く取入て……、

夏小袖

和七 それは困ますね、旦那様と若旦那様とは、まるで氣性が違つておらしつしやるのですから、片方のお氣に入れば、方片の御氣に入らず、彼方立てれば此方が立たぬで、兩方立てる譯には参りませんね、ですから、銘々に請持を極めて、私は父様掛を勤めますから貴嬢は一つ兄様掛といふのをお引請なすつて下さ

和七のやうな男を、といつたやうな調子に、
そめ そんな事を私が……、
(二)内證話 若旦那 徳之助
妹 おそめ

徳之助 お染少しお前に話したい事があるのだ、
そめ 何でございませす、

徳之助 極りが悪いな、今度にしようか、
そめ おつしやいなね、人ぢらしな、

徳之助 思切つていはうかな、何だか極りが悪い、私のいふ間お前目を瞑つておいで、

夏小袖

そめ 否いやな、

徳之助 後生だからよ、

そめ かうですか、 と眼を瞑る、

徳之助 否いやだぜ、薄目で見たりなんぞして、次手に下をお向き、

そめ かうですか、

徳之助 今度は上視をつかふね、それぢや目を瞑つて下を向いて、後面うしろをお向き、

そめ かうですか、

徳之助 さうだく、今日は巻たまがよく出たが、根がちつと下つたやうだ、

そめ お世話を焼かないで早くおつしやいな、

徳之助 何なにといふきたない足袋だらう、

そめ ようございませすよ、

徳之助 お前は飛はだ坊主頭ぼうずかぶりだ、

夏小袖

そめ もう私は否、 と立懸ける、

徳之助 あやまつたく、これからは眞面目まじめだよ、さあ眞面目まじめになると極まりが悪い、

そめ 兄様も男らしくもない、さつさとおつしやいな、

徳之助 賢も不肖もおこなべて、愚痴になるのが此道の常だよ、野暮めが、

そめ 話わといふのはそんな事なの、

徳之助 これは冒頭まへだ、實はお染、私は惚れた女ものがある、

そめ ええ、

徳之助 吃驚おどろしたか、

そめ いえ、

徳之助 感心だ、頼もしい奴だ、話せるわね、

そめ そうして、惚れたがどうしたのでございませす、

徳之助 どうもかうもするものかな、其先はお定まりの、女房に持ちたいといふ寸法だが、就ては、父様

が承知をしてくれなければ、どうすることも出来ないけれど、御存じおかると通りのわからずやだから、私がかういふ女を女房に持ちたい、なんぞをいほうもんなら、途方もねえ、ぐらゐで逐拂はれるのは知れてゐる、處でお前も同胞といふのは私一人、其一人の大事の兄様を助けると思つて、どうかね、父様を旨くゝるめて、私の願ひの成ふやうにね、お染様々々この通り拜むよ、後生だからね、おい、其代り又お前が、かういふ人といふ男があつた時には、この恩報に、私が結ぶの神になつてあげるから、

徳之助 おや！

そめ 兄様、まつと、あなた、なつて下さるか、

徳之助 おや！お前心當りがあるのか、

そめ 少しばかり、

徳之助 あるへえ、さうだらう、どうも私が惚れた女があるといつた時に、びくともしなかつたのは、ちつと度胸がよすぎると思つたよ、誰だい、合手は、

そめ いゝ人、

徳之助 のろけなさんな、誰だよ眞箇に、

そめ 私はまあ後から申しますから、兄様先へおつしやい、誰様とぞ可愛らしい方でしやうね、

徳之助 難有い、

と顔をびしゃくたして、

徳之助 羞かしながら、ちよびと物語らうかね、裏通りの、それ寫眞屋の横町の、角から三間目に、餘り奇麗でない格子子造の、二階家があると思召せ、家内二人で、二人とも女子だと思召せ、若いのと老年と思召せ、老年が母様で、若いのが娘だ、其娘の美しさといつたら、憚り多いけれどお前のやうな……、

そめ はい、私はお多福、

徳之助 いゝええ、お前のやうな譯にはいかないけれど、随分美しいのだ、これを機嫌を直して聞てくれといふのに、

そめ 私はどうせお多福、

夏小袖

徳之助 どう勘ねずにさ、それはお前も容色は好のぞ、

そめ もの字附で、まことに難有うございます、

徳之助 困るなあ、どうも、ちやあ、お前は言ふまでも無いが、

そめ 今度は「ちやあ」になりましたね、

徳之助 好加減にしねわか、そんな事をいふなら頼まねえ、その代り我も頼まれます、

そめ あれ御免なさい、兄様その娘はどんなに美しいのですよう、

徳之助 へん、急に胡麻を磨りやがる、もう美しい處は、端折つて、其母様といふのが人仕事をして、

親子細々と暮してゐるのだが、其女がさ、母様を優しくするの、深切にするのつて、難有涙かこぼれて見
ちやおられやしない、先此通孝行でよ、閑雅です、容色が好つてよ、針は利く、手は書く、書は讀む、茶
さやる、花を活ける、三味線がいけて、按摩が巧者で、香物漬けるのが上手で、ちよいと料理の眞似もす
る、どうだい、申分の無い女もあつたものぢやないか、ええ、お染さうだい、我は其深切に惚れたね、其情
合の遅い處に惚れましたね、男と生れた効にも古い臺詞だが、あといふ女子を女房に持てさ、あゝ難有い、

持たたいく、

と變な聲をする、

そめ そりやあ一體誰の事?

徳之助 裁縫の師匠の家の八重様よ、

そめ まあさう、

徳之助 好容だらう、

そめ お目出たう、

徳之助 まだ早え、所が聞いてくれ、二人の間に、約束はちやあんと、もう出来てるのだから嬉しいぢやないか、

そめ お目出たう、

徳之助 は、お染、その八重様の曰くさ、あなた様の方と夫婦になるなら本望です、とはいふものごと、私

は其日暮しの貧乏人、あなたは大家の若旦那、とても、此縁は纏まらない、てね、お染、八重様がね、お染、涙ぐ
むでね、お染、おれの膝へ顔をこすりつけて、ソ、其涙をおれの衣類で拭いてくれた、稍ありてやうく

夏小袖

夏小袖

面をおびて、さうは念つてゐるもの、もしも添はれなかつたらと、じつと思入が多分あつて、私は生きてはゐません、どうかいふぢやないか、それは私だつて其通り……、

そめ もう澤山、頭痛がして来た、

徳之助 でもさうぢやまじやうが、もう少々、

そめ 否々、私はもう参りますよ、

徳之助 待ちなよ、それぢや簡単に後を話すから、これから先が肝心の用なんだね、今いふ通り、二人の間は話が着てゐるし、母親だつて、二つ返事は知れてゐる、先方は萬々善のだけれど、悪いのは此方の親父だ、あゝいふ強慾の代物だから、私の嫁には、跛者でも隻眼でも、癩病の血統でも、轆轤首でも、そんな事に文句はいひつゝ無しの、唯それの次第で、當人は少々足りないかほりに、持参が二萬圓なんていふのを心懸けてゐるのだから、八重様は駄目な話だ、なるほど私は大家の若旦那には相違ない、けれど、父親が我張て弗函の番をしてゐる間は、月々少額の小使の外は、五錢の白銅一つだつて自由にはならない身の上だから、今ここで親父に、ならぬと威張られて見ると、金銭がなければ先方だつてもくれはせず、さうかと

いつて、これほど思つて居る女を、他人に奪られるのは残念だ、また八重様だつて、私と添はれない事なら、生きてゐる効がないから死でしまふといふ、まあこれほどの中なんだ、さうだいお前の了簡で、父様が承知しようか、

そめ さうですね、私も其事で兄様を頼まうとおもつてゐるのですけれど、

徳之助 お染、度胸をすゑて驅落と洒落やうか、

そめ 驅落ですか、

徳之助 お前も思ふ男があるといふなら、一所の驅落、二組の道行、こいつは新しくつて、さつと好ぜ、第一お互ひに道中が心丈夫だ、それから一つ長屋の隣同士か何かで、大中好で暮さうぢやないか、

そめ さうねね、

徳之助 それにつけても、先立つものは金子だが、こいつ又一苦勞だ、

そめ 母様が生きてゐたらと、思はない日はありませんよ、

徳之助 父親の聲がする、来た、それぢやお染晩にゆつくり、ねんく、

夏小袖

(三) 無理暇 主人 五郎右衛門 店もの 佐助

五郎衛 出て行け、おのれのやうな奴は一刻も家に置く事はならねえ、

佐助 出て行けなら出ても参りますが、何苦あつて出されるのでございませぬ、

五郎衛 口巧者なことをいふな、氣に食はねえから出すのだ、

佐助 それぢや私に咎は無いのでございませぬ、咎が無けりや出される因縁はございませぬ、長い年月

には、お互ひに氣に食はないぐらゐな事の、ちつとやそつとは有内でございませぬ、どうぞも、此度の處

は御勘辨なすつて、

五郎衛 ならねえ、

佐助 それは旦那因業といふものでございませぬ、

五郎衛 因業だ、因業いふのさ、不味もの食ふのは、先祖からの家風だ、

佐助 御家風とあれば仕方はございませぬ、出て参りますが、若旦那に御用を頼まれて参りますから、一

寸お目に懸かつてからお暇を戴きます、

五郎衛 徳之助に用があるなら戸外で待がい、家に置くことはならねえ、一體おのれは虫の好かねに奴だ、否やな眼色をして我の顔を見たり、其處等を見廻はしたり、物でも遣らておたら引摺つて行かうと思やがつて、

佐助 へ、遺しておく風かい、

五郎衛 何だぞ、

佐助 あなたが人に何を取らせるものでございませぬ、大根葉を土蔵の中へ干して、鍵は腰へぶらさげて、夜晝不寝番ぢやございませぬか、

五郎衛 おのれ其まで知ておやがる、だから眼色に否な處があるといふのだ、人相でいふと、おのれの眼は

盗眼といふのだ、

佐助 雖有ては、旦那の頭は南瓜か、

五郎衛 盗眼といふのはな……、

佐助 葛かけに限るか、相手は芝海老ぞ、

夏小袖

五郎衛 血ちほどほし 迸りて筋あり、神ひかりさだ 定まらず、盗ぬすみ を好み、不實の商賣又は博奕ばくちの類に心を迷はせ、果は非期ひまの死を遂げるとしてある、

佐助 さうなつた日にや泣くものがありやす、

五郎衛 手を見せろ、長くはねにや、

佐助 爪を見せろ、長くはねえかといつてもらひてえ、

五郎衛 何んだと、おのれのやうな奴は、おれが庭へ金を埋けておくまで知つて風ふいちやう 聽する奴だ、油断のならねえ、

佐助 へえ、旦那は庭へお金を藏かくしてお置なさるのだからいいますか、不用心な事でもいいますね、

五郎衛 何も金なんぞを藏した覚えはないけれど、そんな事でもあるやうに、しやへり散らすのは、おのれのやうな奴だといつたばかりなんだ、白痴たばひめが、

佐助 へえ左様でございますか、

五郎衛 ええ、もう文句をいふにや及ばねえ、さつさと出て行け、

佐助 出るなどおつしやつても出て参ります、

五郎衛 これ待て、

佐助 待てとおつしやつても出て参ります、

五郎衛 用があるから待てといふのに、

佐助 用があるなら戸外へお出なさいか、

五郎衛 この業わざ突張つっぱりめ、待たねえか、

佐助 何をなさるんです、

五郎衛 用があるから待て、おのれは何か持て出やこねえか、

佐助 何を持て出ました、

五郎衛 手を見せろ、

佐助 へえ御覽なさい、

五郎衛 汚きたねえ手だ、

夏小袖

夏小袖

佐助 上を見做ふ下で、先月の初湯に入つたばかりだ、
五郎衛 懐中を見せろ、

佐助 御念の入た事だ、それ御覽じろ、ええ、擦つてえ、其は臍たく、

五郎衛 大きな臍だ、臍も大きいが、馬鹿に張た硬え腹だ、どうも此頃飯が入るとおもつたら、皆おのれの
仕業だな、腹八分目といつて、少し空加減が體の爲だといふのに、命知らずの馬鹿めが、啖やつたことわ、
これ、まるで張立の大鼓のやうだ、

と下腹をいゝく指頭で壓せば、佐助は好心地さうに、げえいと大きな嘔氣を出して、

佐助 挽切麥だから直に減ります、

五郎衛 體の爲をおもへばこそ、消化のいゝものを喰はせてやるのだ、主人の情を仇におもふ、おのれは餘
程削あたりだ、

佐助 罰はあつてもいゝから、鰻飯とピフテキを煩ふほど食て見たい、

五郎衛 其喰て見たいが高じて人の物が欲しくなるのだ、袂を見せろ、

佐助 あい袂、

五郎衛 それ在つたぞ、いはねえ事ぢやねえ、ええ、こりやあ南京豆の殻だ、

佐助 實なら一つくれだらう、

五郎衛 何だぞ、

佐助 吝嗇爺め、好加減に瘧るがいゝ、

五郎衛 何だ、何といつた、

佐助 へえ、吝嗇爺は好加減に瘧るがいゝぞ、

五郎衛 いつたか、そりや誰の事だ、

佐助 吝嗇爺の事で、

五郎衛 吝嗇爺とは誰の事だ、

佐助 吝嗇爺の事でございませう、

五郎衛 分らねえ奴だ、その吝嗇爺とは、誰を指したのだと聞くのだ、

夏小袖

佐助 別段誰を指したといふ事もございませぬ、唯かう漠然と、
五郎衛 嘘をつけ、我の事だ、

佐助 おや、あなたは吝嗇爺であらうつじやいましてか、それはどうも、つひくお見外れ申しまして、
五郎衛 黙れ、此奴が彼いへばかういふ、仕様のねえ悪たれ野郎だ、用はねえからさつさと、出て失せやが
れ、

佐助 何だ、用は無にから出て失せろだ、

と張臂で詰寄る、五郎右衛門氣味悪く退歩する處を、

佐助 この老、違め、

と横面を撲はせると、五郎右衛門も奮然となりて佐助に組付き、採合ふ中に黄楊木の義齒を落す、慌てと拾
はむとするを、佐助うんと踏碎いて遁出す、

(四) 縁談 (上)

五郎右衛門
徳之助
おそ

五郎衛 やれく、あの佐助めをやうくの思ひで逐拂つたが、どうも好かねえ野郎だつた、まことに此
金持といふ奴は、片時も安心のならぬ、氣骨の折れる役だぞ、之を思ふと、世中に金の無い奴は氣樂なもの
であらうて、いや其處で昨日請取た三千圓は、裏庭の桐木の根に埋けておいたが、どうも氣になつてなら
ぬ、
と獨語をいひく來ると、土藏前に徳之助とお染がこそく話をしてゐる、

五郎衛 や仕舞うた、誰も居ぬと思つたら、二人め、こりや聞いたかも知れぬわい、
こら、其處で何をしてゐるのだ、

徳之助 おや父様、

五郎衛 お前達は遠から其所に居たのか、

そめ いえ、唯今、

五郎衛 何か私のいつて居た言を聞いたか、

そめ いえ、

夏小袖

徳之助 何も、

五郎衛 いや聞いたに違ひない、

徳之助 いえ決して、

そめ 何も聞きはいたしません、

五郎衛 否いや聞いたく、聞いたなら聞いたでいゝが、我の今獨言をいつておたのは、あれは餘所の人の事だ、ある人が三千圓ほど金を拵へて、置場に窮こまつておるさうだが、羨ましい身分だといつておたのだ、我の事だとは思ふまいぞ、

徳之助 はい、

五郎衛 お染もさうだぞ、

そめ はい、

五郎衛 一體お前達は、我が千圓も持つておると思ふか、

徳之助 一向存じません、

夏小袖

五郎衛 千圓も持つていたらさぞ好からうの、

徳之助 同と持つなら最少し欲しうございますな、

五郎衛 怒張つた事をいふな、金といふ奴は怖こはいもので、餘り持つておると、金かね崇たかまつての、身にみぎつて祟まじが来るものだ、さう澤山怒しいとは思はぬが、

徳之助 此上に不足はあるまいと、世間では我家の事をさう申してをります、

五郎衛 馬鹿をいへ、不足は無いなどは滅めつ相あひな事だ、誰がそんな事をいつた、皆みな迹あと形かたもない嘘だ、子

とはいふものとお前達は、おれの警敵かたきも同然なものだ、

徳之助 そりや何故なげでござります、

五郎衛 お前途が無暗と錢を遣ひ散らすものだから、何でも五郎右衛門の家には金がうんと在るに違ひないといふわ、それをまた悪わる漢かんが聞ききつけて我の體からだは黄金きんでも出来ておる事と想つて、忍しのび込こむで殺し

に來ないともいへない、して見りやお前達はおれの警敵ぢやないか、

徳之助 でも私は人目に附くほど費つひました覚えはございません、

夏小袖

五郎衛 白痴め、手前の衣物きものを見ろ、一圓か二圓で出来たものぢやあるまい、衣物といふものは、寒暑を凌しのげば、それで事は足りたものだ、物の本を見ると、上代じやうだいには木葉きのはを綴つつて身を蔽おほふとしてある、之が貴人うへがかうしたものだ、それから末々は赤はなもあれば、少し身分のあるものが草くさを結むんで、襦じゆにした、染は何を笑ふのだ、眞まことの事だ、其を考へると、我々がかうして織オリた衣服きものを身に着けるといふのは、分に過ぎた、勿體も無い事だ、上代なれば我々は赤あか、襦じゆの仲間だ、年に三枚も四枚も拵こしらへてどうしやうといふ氣だ、少しは冥利みやうりといふことも考へて見ろ、染もさうだが、何一つ働はたらきも無い癖くせに、人間尋常じんぐんじんじゆうの贅澤ぜいさくばかりしたがつて、上代は皆木葉の衣だ、

徳之助 もう分りました、

五郎衛 分つたら以來は氣を着ける、それから外にちつと二人に談はなしたい事がある、此時同胞きよどうたいめくばせ目語めごをする、

五郎衛 何だ、目語なんぞをして、さうする了簡だ、

徳之助 ちつとお願ねがひ申まをしたい事がございまして、お互ひに先へ話せと、その合圖あひあひをいたしたのでござい

ます、

五郎衛 うむ、話したい事といふのは何だ、

徳之助 縁談ゆんだんで、

五郎衛 いや不思議だ、我の方も縁談だが、

そめ ええ！

五郎衛 ええとは何だ、ええといふのは驚おどろいた時か、呆あはれた時か、より外には出ない言葉だ、何故なぜええだ？と苦にがい顔かほをしてお染をじろり、

五郎衛 まづ徳之助から話をするが、お前はあの末松すえまつのお八重といふ娘を知つてゐるか、

徳之助 よく存じてをります、

五郎衛 さうか、お前はあの娘をどう思おもは、

徳之助 可愛らしい、子こぶとこなりすますな、

五郎衛 氣質きしつはどうだ、

夏小袖

夏小袖

徳之助 内氣な、おとなしい、

五郎衛 うむ、あゝいふ子は悪くないのう、

徳之助 結構ですな、

五郎衛 あゝいふ娘を女房に持つたら仕合だな、

徳之助 それは、もう、

五郎衛 第一約しくつて、賢くつて、

徳之助 大人しくつて、行渉つて、

五郎衛 亭主になるものは大仕合せだ、

徳之助 それは、もう、

五郎衛 けれどもな、此所に一つ難といふのは、彼所の家には金といふものが無いからの、女房よりは其方が、實は望みくらゐのものだけにと、

徳之助 金々とおつしやるけれど、常人が氣質がよくつて、顔色が申分ないといふのですから、其で

つ辛抱をするのでございませぬ、

五郎衛 そんなやうなもの、又此女房をもらふといふ奴は、誠に持參金が樂みでの、

徳之助 そんな事をおつしらすと、彼にお極めなさいまし、

五郎衛 お前に異存がなければ、彼に極めやうかの、

徳之助 難有い、

と小さい聲でいふと、後からお染が 跣を擦る、

五郎衛 もらばうかの、徳之助、

徳之助 至極結構でございませぬ、

五郎衛 ちつと年齢が不釣合だからの、

徳之助 どういたしまして、丁度似合はしい水の出花同士で、

五郎衛 さういはれると我は羞しい、

と五郎右衛門顔を横にして頭を撫でる、徳之助は合點のゆか顔をして、

夏小袖

夏小袖

徳之助 でも、あなた、先方が十八で此方が二十四、

五郎衛 當事もない世事をいふな、我は今年もう六十三になるのだ、

徳之助 それはあなた、男は六十が七十、百でも百六も、構つた事はございません、

そめ それぢや、あのお八重をもらはうとおつしやるのは、

五郎衛 誰だとおもふ、

徳之助 あの私では無いのでございませぬか、

五郎衛 我だよ、我の事だよ、

徳之助 ひえと、

そめ あの父親が、

五郎衛 おいよ、

徳之助 あとお染、

そめ 兄様、

徳之助 情ない事になつたなあ、

五郎衛 何だ、情無いとは？不吉な事をいやるが、

(五)縁談 (中) 五郎右衛門 和七

五郎衛 徳之助には、心當りの寡婦があるから、其をもらつてやることに極めたが、お前には瀧造様が似合はしいと思ふが、どうだ、

そめ あの瀧造様、

五郎衛 さうよ、金満家だぜ、子供はなし、年齢だつてまだ五十にはならず、ま彼位な器量人も寡ないもんだ、信州から出て来る時には、財布の底に二百しきや無かつたのが、土方から取附いて、今ぢや五萬の懸る身代だ、仕上げたものさ、

そめ 父様、私はお嫁なんぞにゆくのは否でございませぬ、

五郎衛 お染や、私はお嫁にやるのが大好でございませぬ、

夏小袖

夏小袖

そめ どうぞ父様、あの人の所へ嫁くのは堪忍して下さい、

五郎衛 どうぞお染や、あの人の所へ嫁くのは今晚にして下さい、

そめ 今晚？

五郎衛 今晚！

そめ 私は否でございませう、

五郎衛 それは否でございませう、

そめ 否、

五郎衛 否、

そめ そんな無理難事むじがたな事をなさらすとも、宜しいぢやございませんか、

五郎衛 そんな無理難事むじがたな事をしても、宜しいぢやございませんか、

そめ 断たつて嫁けとおつしやるなら、私は、死でしみます、

五郎衛 死ぬには及ばない、嫁けばそれで事が済むのだ、一體子たるものが親人おやひとに對して、そんな我

儘をいへたものか考へて見ろ、

そめ 親たるものが子に對して、そんな無理難事をいへたものか考へてござんませう、

五郎衛 馬鹿が、こんないふ口を否といふ奴があるものか、誰たれに聞きかせたつて、皆みなそれは結構な縁ゆかりだといふわ、

そめ そんな事をいふものは、皆みな没分曉むつぶんきやくでございませう、

五郎衛 おと和七が来る、彼に聴かせて、何方いづちが是か、裁判さいばんさして見よう、

そめ それが宜よろしうございませう、

五郎衛 もし和七が是これといつたら、承知おぼするか、

そめ 和七さへ是と申したら、さつと承知をいたします、和七のいふことなら私は何でも聞きかきます、

五郎衛 面白い、和七や、今我と染と少し言合いひあつてゐるのだが、お前はまる何いづち方が正ただと念ねんふ、

和七 それはもう旦那様が正ただしいのに極きまつてをります、

五郎衛 お前は此處で何を言合いひあつてゐたか、知してゐるか、

和七 それは一向存ぞんじませせんが、旦那様が正ただしいには極きまつてをります、

夏小袖

夏小袖

五郎衛 む、實はな、今晚染をめの瀧造様のところへ嫁にやらうといふのに、否だといつて我意を握ねるのだ、なるほど染のいふのが道理か、但しは我が道理か、どうだ何と思ふ、

和七 どうも……其は……まことに……成程、

五郎衛 我が道理か、

和七 さやうでございますな、

五郎衛 染の方が理があるか、

和七 なるほど、

五郎衛 成程では分らぬ、何方が是とか、非とか、駈とした所をいへ、駈とした所を、

和七 万々飲込むでをります、

五郎衛 どうだ、和七、

和七 へい、其は何でございますな、あなたのおつしやいます所もお道理なり、またお嬢様のおつしやる

所も御無理ではないやうに考へられます、

五郎衛 何故兩方が道理だ、瀧造様なら此上もない結構な婿ぢやないか、考へて見やつしやれ、第一、紳士

だ、金持だ、器量人だ、子供は無し、年齢は更けてはゐず、何と結構ぢやあるまいか、

和七 なるほど一々御尤で、どういたして、そんな結構な口が又とあるものではございませぬ、これを申

すも旦那様の御交際がよろしくつておらつしやるから、かういふ御縁談もあるといふものでございします、

五郎衛 お前は理窟が分つてゐるよ、若いの頼もしい、

和七 (~~~~~) どうも恐入ります、えいお言葉ではございしますが、今お話で今お返事といふのは餘り

速急で、それではお嬢様の御分別をあそばす間が無いといふやうな譯で、何か御無理のやうに聞かまじ

て可笑くございませぬから、どうも少しの間御猶豫を、

五郎衛 否々、それはなるまい、少しの間でも猶豫をして、破談にでもなつたら大事だ、實は瀧造様と支

度金千圓といふ約束をしたのだから、御意の變らぬ内に、早く返事をしなければならぬ、

和七 あの支度金を千圓せとりなされるので、

夏小袖

夏小袖

五郎衛 左様さ、こんな結構な口は又とはあるまいがな、

和七 へえ、何御不足も無い御身上でおらつしやりながら、支度金とは、
五郎衛 どうしたと。

和七 結構な事でござります、今晚まで御猶豫をなぞりますなら、お嬢様の御得心をばす方もござりますけれど、唯今とおつしやつては、

五郎衛 何方がある？

和七 御坐いますと申しまするのは、お嬢様の思召には、嫁入といふのは、人間一生涯の大事で、一度添てからは、否になつたからと申して、つひ一寸別れるといふやうな譯には参らぬものでござりますから、念には念を入れて、それはもう此上は無結構な御縁談ではござりますけれど、末の末まで十分に御考へあそばして……、

五郎衛 支度金の千圓は奮むだよ、

和七 御身の御運定めといふ、曠の仕事でござりますから、随分よく御思案を遊ばしませんと、後々に

紛擾が持あがつて、どうもかうも成らないやうな始末になるものでござります、
五郎衛 千圓とは奮むだよ、

和七 え、もう是非がござりませんか、唯一粒のお嬢様より、金錢の方が愛しいといふ親御様だから、私は何も申しませぬ、

五郎衛 千圓とは馬鹿に奮むだよ、
和七はお染の顔を見て、

和七 まあ、御心配なぞりますな、

そめ 和七、私は死でじまふ、
と泣聲になる、

五郎衛 おや裏で犬が吠ねる、こりや誰か桐の……、一寸見て來にやなるまい、
と五郎右衛門はきよとく出て行く、

(六) 縁談 (下) 和七
おそめ

夏小袖

夏小袖

そめ 和七お前は實が無いよ、なぜもつと一生懸命になつて、彼所へ嫁かないやうに、さういつておくれでないのだい、お前は實がないよ、

和七 あなたはさうおつしやるけれど、實があるの無いのつて、あの父様ですもの、和七の手に乗ることちやございませぬ、此通り顔から油汗をたらして、一心不乱で辯じたのですけれど、萬事支度金の千圓で立切つて、私のいふ事なんぞは少しも耳へ入れないので、どうにも仕様が有りやしません、さうかといつて、熱ひ反對へ廻つて、氣に障るやうな事でもいつて御覽なさい、尙さら仕様がございませぬ、少し方寸に在る事がございませぬから、あなたも、父様のいふ事を唯と聞いておきなさいよ、方寸にありませぬから、

そめ ほんとに方寸にあるのかい、

和七 ありますから大丈夫、

そめ 屹度かい、方寸に無いとさかないよ、

和七 在りますよ、

夏小袖

そめ でもお前今晚嫁けといふのだよ、いかかい、そんな方寸だか、安心するやうに聞かしておくれな、
和七 今晚いさといふ眞際に、あなた卒倒しておしまひなさい、

そめ 卒倒つて、あの目を眩すのかい、否だね、

和七 否だねつたつて、あなた一大事の場合でさあね、思入目をお眩しなさい、

そめ 私は未だ一度も眩した事がないから、もし眩はしそくなつて、父様に見附かつたら大變だね、

和七 眩はした事が無いつて誰が平常稽古をしておくものがあるものですか、うんとか何とかいつて、引くりかへつて手足を突張つて、齒を切じめて、何となく死た眞似をなさいな、

そめ そんな風に、

和七 そんな風につて、困りますね、

そめ 一寸して見せておくれなね、

和七 一寸たつて、絶息の振附は困りますね、

そめ 爲で見せておくれよ、形だけはいから、

夏小袖

和七 困りましたねえ、ぢやまあ一寸形をしてお目にかけますから、一度ですつかり覚えて下さい、度々
は私もあやまります、

そめ あゝ一度で覚えるから、よく見ておるよ、

和七 よう御座いますか、卒はつかに撞ぶつと、かう仆たふれて、あ、痛！
と顔を擡しかめる、

そめ そこで顔を擡めるのだね、

和七 えゝお洒落なさんな、あゝ痛、ほんとに脊骨せほねを打うちました、
傷いためはしないかい、

和七 まあよう御坐いますから、先を御覽なさい、かう仆たふれてから、手足を硬かたく突つ張はつて、うゝんと、此
呻うなり聲こゑが身み上あがりです、さあ苦しうに齒はをくひじばつて、眼を白黒かういふ鹽梅あんばいに、

そめ あゝ否だ、氣味が悪い、和七もういゝよ、

和七 もういゝよぢや御坐いません、これが一番難むづかしいのですから、もう一度、それかういふ鹽梅あんばいだ、

そめ その眼色めつきだけは堪忍しておくれな、

和七 あなた、死ぬのみに外見みも色氣もあるものぢやございけません、

そめ そうしてお醫師様いしやが来たら、直ただに虚死そらじといふ事が分つて、しまふだらうね、

和七 それは此方こなたにちやんと仕掛しかかしてあるのですから大夫だいふ才さいなものです、それぢやもう直ただに、胸むねが痛い
といふやうな、絶息ひきつけの徴しるし候まへに取懸とからなくちやいけませんよ、

五郎衛 やれく難有むづかい、例れいの處ところへ人でも来たかと思つたら、誰も来たのではなかつた、

和七 旦那様だんなさまお嬢様おぢやうさまは今晚こんばんいらつちやるやうに御得心ごとくしんをなさいまして、子ことして親おやの目鏡めがねで持もてといふ夫おとこ
に好すき悪いらひをするのは勿體むたいない事で、まして千圓せんげんの持參金もちさんぎんとは、此上こゝも無い結構けいこうな事だ、と大層たいじやうお喜びでござ
います、

五郎衛 うむ、利口りこうものだ、賢さといい奴やつだ、お前まへにも色々いろく御苦勞ごくろうだつたの、

和七 どう仕つりまして、然しかしまあ御目出ごめだたうございませす、
とわざとお染あに中ちゆうてゝいふ、

夏小袖

そめ そんな事をいひなら、私は……

和七 まあ〜お目出たい〜

とお染を宥める、

五郎衛 いや目出たいとも〜

和七 あなたもこれで御安心でございます

(七) 工面 徳之助

徳之助 佐助、お前何處をうろついでるのだ、先刻からそんなに探したか知れやしない、

佐助 うろついでるとは情無い、若旦那、私は酷い目に遇ひました、突、然、目的が暇を出すといふぢや

ありませんか、何も落度の無いものが、暇を出される譯は御坐いませんやね、然し、そんな理屈をいつたか
らつて、分かる奴ぢやありませんから、少々悪體をついで出て参りましたが、どうも窮りました、

徳之助 それは窮つたな、然しお前の身は我がどうともするから、心配をするな、其はさうと、一件はどんな
鹽梅だ、私の方にも大事が持上がつて、恐入つたよ、

佐助 何でございます

徳之助 驚くなよ、彼女に惚れてるものが亦一人現はれたのだ、

佐助 何の事です、美女なら愛人のあるのは知れた話ぢやございませんか、何百人が何千人あつたつて、
びくともする事ぢやございません、佐助といふものが附いておます、

徳之助 何だ宿無しの癖に、佐助といふものが、ちつと尋常ならぬものが惚れておる
のだ、

佐助 化物ですか、

徳之助 まあ其に似たものだ、

佐助 はてね、誰でしやう?

徳之助 驚くまいぜ、親父だ!

佐助 何處の親仁?

徳之助 我家の親父よ、

夏小袖

佐助 我家の、あの、若旦那御冗談をおつしやう、

徳之助 冗談でないから我も驚くのだ、

佐助 眞實ですか、

徳之助 情無いことには眞實だ、

佐助 呆れたもんだ、彼くたびり損ひが、一體どういふ了簡でしよう、色狂だぞ、

徳之助 大方そんな事でもあらうよ、我を呼附けて、彼を女房に持たうとおもふが、どうだと来た時には、ざやふんとして気が遠くなつたよ、

佐助 其處で、私が先口だ、とあなた一本参らしておやんなすつたか、

徳之助 いゝえ、

佐助 いけませんね、何故です、

徳之助 其處でそんな事をいつた日には、なほ此方の大望の障礙になると思つたから、何も知らない顔で、それは結構な事だと出し抜いて、一策回らうといふ肚だが、あの様子はどんなだつた、

夏小袖

佐助

金兵衛といふものが中へ入つて周旋するのですが、話しました所が承知をしたと、

徳之助

ぢやあ、三千圓はいよく借りられるね、

佐助

其はもう造に借りられます、ですがね、借主は誰だか、其を聞かなければ、先方も安心をしませんで、

徳之助

これは左様だらう、その貸主は何といふ男だ、

佐助

其は未だ話していませんでしたが、出来る事は請合だと申します、所で其貸方に、あなたがお會ひなすつて、此方の身分を聞いた上で、金を渡さうといふのですが、あなたが一言父様の名をおつしやれば、話はずくに纏まります、

徳之助

それは難有い、いろく御苦勞だつた、

佐助

それから、金兵衛が、かういふ振合だからと申して、利の所を話しました、

徳之助

な、

佐助

利は一割五分でございますが、

夏小袖

徳之助 な、

佐助 實は其貸方も今手許に三千圓は無いので、ちと高うございしますが、二割の利で他から借りるのだから、うでございしますから、其利は此方で持ってもらひたいと申します、

徳之助 そんな金貸があるかい、

佐助 餘り類はございせん、

徳之助 そりやまあ、そんな高利を借りた所が、どうせ親父に尻を拭かせるのだから、可やうなもの、餘り酷いな、

佐助 さすがに親子の情だな、

徳之助 洒落なさんな、

佐助 酷いやうではございしますが、あゝいふ因業ですから、懲罰の爲にいかも知れせん、

徳之助 懲罰ならぬで済めばいいが、五錢の白銅が一つ見えなくつても、血眼で暴れまはるのだから、これぢや氣でも違つて首を締めるかも知れない、

佐助

どう行まやお話へ、あの身上は若旦那の所有、一番番頭が佐助様、

徳之助 馬鹿なことをいふな、

佐助 と行きや豪的だが、あの慾深なもの、

思切てお借りなさいませ、未練があつて死ねるものか、御心配はいりません、若旦那、

徳之助

そうして、貸方の手許にあるといふ金は若干ばかりだ、

佐助 千五百圓は手許にありますが、あと千五百圓は二割の口でございします、

徳之助 それぢや千五百圓が一割五分で、半分は二割此方持の又一割五分か、

佐助 左様く其外にもう少々文句がございします、五分の口の千五百圓の中、五百圓は品物で取ってくれどいふのや、

徳之助 何だぞ、

佐助 其品は此に認めてございします、

と書付を出して見せる、

夏小袖

徳之助 何々、ええ、一ポンプ一臺、一專賣特許精米器械一臺、一二人乗人力車三輛、一上等櫻炭五十俵、一蒔繪重箱一組、一刺身皿十人前、一鮎屋床、店道具一式附、何の事だ、馬鹿くしい、何處まで行ても、こんな瓦落多ばかりぢやないか、驅落するものが、こんな、物をどうしようといふのだ、まるで判じものだ、

と齊付をたたくつける、

佐助 へて百三十七品、これで五百圓は高うございませうか、

徳之助 高うたつて、安くたつて、古道具屋を始めるのぢやない、驅落をするのだ、無代もちつたつて、こんな物がどうなるものか、誰が道具を借りようといつた、金子が欲しいのだ、金子を借りようといふのだ、いかに人の弱身につつけこむといつても、冥利といふものがあつたものだ、一割五分の利なら過ぎてゐるのに、半分は三割五分だといやあがる、其上に抵當流れの瓦落多なんぞを推附けやつて、それで又五分の利を取る氣が凄まじい、不法な事をしやがる、其貸方は何處の何といふ奴だ、盗人め、畜生め、さあ我が敵手だ、刺違へて死ぬ、

佐助 若旦那、どういふものでございませう、そんな事を此處でおつしやつたつて仕様はございませぬ、

徳之助 仕様が無くつても、餘り太い事をしやがる、

佐助 太い事をするとおつしやつても、まだ金を借りた譯ではないのですから、そんなに御立腹なつてございませぬ、

徳之助 借りなくても太い奴だ、

佐助 それは太くつても細くつても、先方の勝手でございませう、

徳之助 勝手とは何だ、

佐助 そんなにおつしやつたつて、私の知た事ではございませぬ、今此所で御不承をなさいませんと、外に都合をする所はございませぬが宜しうございませうか、

徳之助 金も何も入るものか、

佐助 金が無ければ、お八重様と夫婦にはなれませぬよ、

徳之助 お八重も何も、

夏小袖

佐助 入りませんか、若旦那、
徳之助 それは入るよ、

(八) 高利
五郎右衛門
徳之助 金兵衛

金兵衛 旦那様、一つ口があるのですが、これはさる大家の若旦那で、急に入用だといつて、大變急いで来るのでございいますから、例の話を持ちかけました所が、どうやら唯といひさうな様子でございませぬ、

五郎衛 ふうむ、確かい、身分の所はそんなもので、何處の何といふものだ、

金兵衛 何處の誰とまでは未だ名乗りませんが、其番頭から言込むで参つたので、その者の申すには、いづれ主人が直にお目にかまつてお話を申します、名前を申せば、屹度二ツ返事で承諾をなさるに相違ない、と大相えらがつてをりましたが、實際餘程しつかりした身代ださうで、母親は疾に亡なつて、今の親父も、半年も経てばお目出度なるのださうでございませぬ、

五郎衛 確實なものなら貸しても好い、

佐助 おや、金兵衛が旦那様と話をしておる、

徳之助 あれかい、金兵衛といふのは、奸悪い面をしてゐるな、

佐助 旦那と比べると、いづれ劣らぬ鬼閻魔、凄いのが揃ひましたね、

金兵衛 おやこれは、どうして此處へ、旦那、あれが借主の番頭様で、

五郎衛 番頭様がお出だ、

金兵衛 あなた此方へ、此方が彼件の……、

五郎衛 何だ、うぬは佐助ぢやねえか、

徳之助 父様—あなたは太い事をなさる、
此中金兵衛と佐助は廻げる、
五郎衛 何だ手前か、三千圓なんぞといふ大枚の金を借りようといふのは、

夏小袖

夏小袖

徳之助 あなたですか、五百圓は古道具で渡して、三割五分といふ高利を取らうといふのは、

五郎衛 高利だ、その高利を借りて、さ何處から返さうといふのだ、今金兵衛から聞けば、半年も経てば親父

が死ぬと、途方もねえ事を待つておやがる、誰が死ぬものか、

徳之助 死なういなら死なういでもようございしますが、

五郎衛 此奴がく、そりや誰にいふ言葉だ、

徳之助 あなた、父様、高利貸とは何事です、

五郎衛 これ徳之助、高利借とは何事だ、

徳之助 實はあなたが、こんな非道な事を成さると知たから、わざと借主となつて、手證を提まらて意見

をしようとおもつたので、

五郎衛 何の生意氣な、我も手前が金を借りたがつておると聞いたから、懲惡の爲に……、

徳之助 いけません、あなたの高利貸は誰でも知てをります、

五郎衛 おのれの高利借こそ誰でも知てる、

(九) お饒舌

店もの 佐助
口入婆お 助
五郎右衛門

佐助 いやはや飛でもねえお茶番だつた、高利貸出會て見れば親父なりか、若旦那もあれには一番面くらつたらうが、流石の親仁が魂消たらう、

おかん おや佐助様、久しぶりだね、

佐助 いやお婆様、いつも逢者だね、おめえ何しに此處へ來たのだ、

おかん 何ちつと頼まれた事があつてね、旦那にお目にかゝりに來たのだ、

佐助 へえ、どんな事を、

おかん 少し儲かる話さ、お禮がもらへるといふやうな筋だね、

佐助 禮が、此家の旦那からか、

おかん さうさ、

夏小袖

佐助 へえ、さういふやうな話を、骨折損だ、おめえの黒人にも似合はねえ、野暮なものだ、この旦那が何

夏小袖

をしたからつて、禮の眞似もする風かい、赤本の話じやねえが、鉄くはを入りや馬うまのくそ糞の出るばかりだ、
おかん さうでないで事さ、お前なんではまだ若いからいかねえ、そんな握にぎりや屋やでも、其は又相應に、仕向しむけ
次第しだいでさうともなるものだ、切き放はなれのいと人ひとでも、團とん合ごうのをかしくないのは、いびり効がひが無いが、い
くらしまり屋まりやでも、此處こゝのさうに性しやうめい目めの確たしかなのは樂たのしみみといふものだ、

佐助 口のやうな譯わけに行いきやお慰なぐさみだが、雷かみなり様が鳴なても放はなさねえといふのは、ほんに此處こゝの旦だんの事ことだ、さう
いふ事ことならやつて見るも好ちいが、後あとで馬鹿ばかを見みなさんな、

おかん 御意ごい見みは難たがひ有あてえが、此方こゝにも少し山やまがあるのだから、何でもかでも一つ遣やつて見る氣きさ、首尾しゆび好ちい
くいつたら一盃いちばい奢おごらうよ、

佐助 いや御免ごめんだ、そんな酒さけからは得えて火ひが焚もるものだ、もし旨ちいく行いつたら、我われの方かたから一盃いちばい振ふる舞まはう、請こ
合あしくじることだ、

おかん けちを附つけなさんな、縁起ゆきぎでもねえ、まだ口開くちあけ前まへだわな、

佐助 口開くちあけ前で樂たのしみみなものよ、蓋かへるを開あけたら蛙かへるぢやねえか、

おかん まだそれほど勝かつてはねえよ、

佐助 さうだか知しれたもんぢやねえ、近日きんじ借かりにいいくぜ、

おかん うめえ口くちだ、はははははははは、

佐助 そんなら、ああはあはあはあ、

おかん はい左様さやうなら、

おかん おや、これは旦那様だんなさま、御機嫌ごきげんよろこ、いつもまあ〜お達者たつしやな事ことで、ほんとお目に懸かりますた
んびに、お若わくおなり遊あそびしますよ、

五郎衛ごろうゑ さうでもあゝるやう、

おかん いゝは、あなた、ほんの事ことささりますよ、さう申ましては懸かいやうささりますよ、さうお見み上げ申ま
しても、四十しじゅう、左様さやうさな、二三にさんでもおらつしやいますか、

五郎衛ごろうゑ もういかねえ、六十一むそいちだよ、

おかん お六十一むそいち、結構けいこうぢやないか、殿方どのがたは六十むそじゅうを越こしてからが花はなだと申まします、これからが、あ

夏小袖

夏小袖

なた盛でござります。

五郎衛 とうでないます、せめてもう二十年若けりやのう、

おかん あなた、飛でもない事を、何が二十年若けりやあでござりますよ、旦那様は確に百歳まで請合といふ、御格服でおあんなさいますから、お樂みでござります。

五郎衛 さう見えるかの、

おかん 見えるばかりではござりませんか、争はれないものぢやござりませんか、御相にぢやあんと表はれてをりますよ、

五郎衛 相に表はれておる。

おかん 其お顔の太い文の間に、ちよいくと縦に微かい文のあるのが、長命の相なのでござりますよ、

五郎衛 これが何かい、長命の相だぞ。

おかん 左様でござりますよ、滅多にかういふ御相の方はないのでござりますよ、お手を一寸それ、あな

夏小袖

た、まあくどうも、これが百まで御長命の文で、此文が拇指の脇から、それ、如此づうつと、かう引い

て、此處へ繋がつて、かう又づうつとそれ、おやくく、之は百と二十生る相でござりますよ、

五郎衛 眞箇かい、そりや難有い、百二十まで生さりや十分だ、時に彼話はどういふ騒梅だ、

おかん 御心配は御無用にござりますよ、從來何十年私が口をききました事に、纏まらなかつた例は、

あなた、唯の一度もありはいたしません、人様が遣て纏まらなかつたお縁談でも、此婆が中へ入りさへい

たせば、あなた、不思議に纏まるぢやあでござりませんか、

五郎衛 なるほどの、

おかん 先方は大承知で、此方の御都合次第で、何日でも宜しと申すのでござりますよ、

五郎衛 而して荷物はどれほどあるえ、

おかん 荷物よりも、あなた、持参金がござりますよ、

五郎衛 持参金がある？耳よりの事だ、

と眼色を變へて乗出す、

夏小袖

おかん 年五百圓の利がね、あなた、入るんださうでござりますよ、

五郎衛 其持参金がな、すると、一割の利と見て五千圓、五分と見て一萬圓、なるほどな、

おかん それがね、あなたどういふ譯で五百圓だと申しますのに、年で其でござりますから、月割にいたしますと、四十圓餘でござります、なげ月四十圓餘だと申しますのに、其娘と申すのが、親の躰が殿しいものでござりますから、誠に音ちがよろしうござりますしてね、三度の食事はお菜といふもの入らずで、おまけに少食でござりますから、これが月に致せば二圓から違ひます、芝居が嫌ひで、これが二三圓は違ひますよ、それから髪は獨り結ひまして、入湯が嫌ひで、これで五十錢は違ひます、まことに儉しい干で、衣類は好まず、頭飾はねだらず、これが月に割て四五圓は違ひます、御酒は飲かず煙草は香まず、お菓子嫌ひ、お茶は嫌ひ、物見遊山は嫌ひ、これがどんな事を致しても、五六圓違ひます、其に御化粧が嫌ひでござりますから、胭脂、白粉、白粉下、香水、油、石鹼の類が入りませんから、これで一圓は違ひます、其に粗手帕の縁縫を上手にいたして、月に五圓は稼いでござります、それから、臺所の用をいたして御膳炊をしますから、これで四圓は違ひますし、お妾の代用をいたしますから、之れが十圓の違ひ、お子供衆が出来れば乳母もいたしますから、之が五圓の違ひで、何やかや合切勘定を遊ばしたら、月五十圓は大丈夫でござりますよ、でござりますから、年にいたして五百圓の利でおほせの通り、原金に致しましたら、一割と見て五千圓、

五郎衛 何だ、現金の話かとおもつたら、馬鹿くさい、夢で金を拾つたやうなものだ、まあ其は五百圓

でいゝとして、外にちつと心配なのは、どうも我とは餘り年齢が違ひ過ぎるからの、若い奴は兎角年寄を嫌つて、未始終納まらぬやうな事はあるまいかと、其がどうも苦勞でなう、

おかん 其所で、まだ申上げる事があるのでござりますよ、その娘は至つて若いものが嫌ひで、年寄は行届いて、深切で、よいと常住申して、大の年寄好なのでござりますよ、

五郎衛 はてね、
おかん 其にまだ申上げたいのは、どういふものか、若い奇麗な男を見ますと、胸がむか／＼として、頭痛がいたして悪寒がして来るほど、蟲が好かないのださうで、品の好い年寄の可成年齡を取つたほど好きで、六十歳以下では、どうもまだ十分に好かないのださうで、此間も縁談があつたのださうでござりましたが、

夏小袖

夏小袖

其方は五十六とやらで、見合の時目鏡を掛けておなかつたのが、氣に入らないといふので、とう／＼破談に
したさうでございませうよ、

五郎衛 はてね、年寄が好まとは殊勝な、

おかん それにあなた、此間も行って見ますと、あなた、下着でも、襦袢の半襟でも、羽織の裏でも、皆翁の
面の模様のあるものばかりで、戸外へ出るのに杖を撞いて見たいなんてね、そんな事を申して、母親に呵ら
れてさるのでございませうよ、

五郎衛 はてね、變つた、面白い、我なども老人が大好だから、女であつたら、亭主には老人を持つさ、
年寄の事だ、

おかん さうでございませうともね、あなた、そりやあもう人間は年寄の事でございませうよ、矢張この菓物
のやうなものでも、十分實が入らなければ、味といふものは出るものではございませうよ、

五郎衛 その理窟だて、若い奴らが盛りだの血氣だのといつても、我の眼から見ると、いやはや多愛の
ないものだ、

おかん さうでございませうともね、

五郎衛 扱それで、格別話す事もなくして、それから日を取極める一條だが、其は私の方にも都合がある
から、いづれお前までいほうから、其節はまた頼むよ、どうも御苦勞だつた、ゆつくり相談をしたいけれど、
今日はこれから寄合があるので、出掛けなければならぬから、これで御免を蒙るよ、色々どうも御苦勞だ
つたね、いづれ又、

おかん 旦那様あの何でございませうが、

五郎衛 今日は忙しいから、此次に又、

おかん それでは私が誠に、

五郎衛 此次に／＼、

と奥へ立て行く、お勘は注然置去を食つて、

おかん えと笑かしやあがらあ、助兵衛爺の癖に、

夏小袖

夏小袖

(十) 結納

花嫁お八重
徳之助
お八重
お八重
五郎右衛門

お八重 お勘さん私はそんな老 人は否ですよ、

おかん あなたは慾をお知なさらないから困りますよ、六十一といふ老翁ですもの、此先何時迄生るものですか、長くて精々一年か二年、うまうま行きやや半年経つか経たない内に、ぼつくり往生をしてさへしまへば、形が附くのぢやういませんか、さうすれば一萬とか二萬とかいふ金を握て彼家を出て、何様にも若い、好きな婿様をお貰ひなさいませぬね、ほんの少しの辛抱ですから、夢を見るのだと思て、我慢をなさいませぬ、お八重 それだつて、人の死ぬのを待つといふのは、餘りな話ぢやありませんか、私はそんな思ひをして、お金持になりたくはありませんから、此縁談は破談にして下さる、おかん 今更そんな事をおつこやつちや困りますよ、おや、それ、車が来ましたよ、あれ、はい入らつしやいまし、さあ、もういけませんよ、お出でなすつた、

お八重 あれ、私はどうしようねえ、

五郎衛 お勘様や、これが何かい、御縁女ははい、さうかい、はい、私は灰吹屋の五郎右衛門で、此度は不思議な御縁で、はい、さうぞ幾久敷、はあ、さうもお美しい、私には過なものだ、お勘さんや、御縁女は先刻から下ばかり向いて、気分でも悪いのではなからう、

おかん いゝ何、お若いお方でござりますから、お羞しので、おほ~~~~~

五郎衛 徳之助とお染が来たやうだ、

おかん おや入らつしやいましたよ、

徳之助 父様 太 屏遅くなりました、

五郎衛 おう悴、此方が御縁女だ、御挨拶を申しな、

徳之助 これは始めまして……………、

お八重 始めまして……………おや、あなたは！

夏小袖

夏小袖

と吃驚、徳之助は目で制して、

徳之助 お目には悪かりましたが、しみぐ御挨拶もいたしませんで、私は五郎右衛門悻徳之助と申すもので、此度は不思議な御縁で、何分幾久敷、

お染も同じやうに挨拶する、縁女はついでと坐を立て、お勘を小陸に招き、

お八重 お勘さん、大變な事になりましたよ、今来た息子さんは、私は疾から識てる方なの、

おかん 識ておいでなら、なほいさちやあさしませんか、

お八重 あら、識ておるのですよ、少し事情があつて、

おかん 出来てるのですか、

と圓い眼をしてお八重の顔を見れば、櫻色になつて下を向く、

おかん おやまあ、困りましたねえ、

お八重 私は歸りますよ、

おかん まあ貴嬢、今あなたの姿が消えてしまつちや、私が中へ入つて當惑してまはるね、後生ですから、

もう一度お坐敷へ行てお坐になすつて下さいますよ、私がおまどうともしますから、

お八重 私は面、目無くつて………歸りますよ、
と泣顔になるのを、無理に坐敷へ推込む、

徳之助 あなた、親父の指環の金剛石のやうな、大きいのを御覽になつた事がございしますか、

五郎衛 此れ、べらくと餘計な事をしやべるな、

お八重 いさえ未だ、大相結構なのでございしますこと、

徳之助 父様一寸其を御覽にお入れなさい、と無理に取て御覽なさいませ、

お八重 まあお見事な、

徳之助 一寸はめて御覽なさいませ、おや丁度宜しうございしますね、貴嬢がおはめなると、一層引立て見えます、

お八重 飛んだ事を、

夏小袖

夏小袖

徳之助 それは甚だ輕少ではございますが、親父からあなたへ御結納の願までに進上いたしました。

五郎衛 これく何だ、
徳之助 幾久しく御受納下さいますやうに、

五郎衛 飛でもない、

お八重 どういたしまして、

と返さうとする。

徳之助 どうぞお納め下さいませ、どうぞ御遠慮なく、

五郎衛 途方も無い、

徳之助 あなたがお受け下さいませんといつて、あの通り親父が不機嫌でござりますから、

五郎衛 飛でもない、おのれは、

徳之助 どうぞ其はお納め下さいませ、

と眼で知らせる。

夏小袖

お八重 それではお預り申しておきます。

五郎衛 いづれどうぞお返し下さいませ、
徳之助 返へすなごいふことは、此席で、
五郎衛 黙つておろ、

久藏 へい、旦那様は此方でございますか、久藏でございます。

五郎衛 久藏か、何ぞ用か、

久藏 唯今お客様がお出になりまして、

五郎衛 問拔め、今我の取込でるのを知ておるぢやねえか、何故断らねえのだ、

久藏 何だか金談があるとおつしやいますから、

五郎衛 左様かく、そんならどうと、早くいへばいいに、小言を食ふのが好きな奴だ、急用で人が参りまして、
と縁女に會釋して、

夏小袖

五郎衛 徳之助行て来る、いや貴嬢や、お見送には及ばない、と門に出てからお染を呼び、

五郎衛 指環を氣を着けてくんよ、

徳之助 八重様餘りだね、

ぼんと煙草の吹殻をばたく、

おかん それほね若旦那、全く物の行違ひで、

徳之助 お前に何も聞かうとはいはねえ、おい、八重様、我を踏附にするにも節があつたもんだ、あれほど堅く約束をしておきながら、否になつたなら離れるのもいや、新出来の好た男の所へ嫁くのも、悪

言草はいふめえ、其代り今までの約束は、唯だて反古にやせねえよ、離れるなら離れるやうに、奇麗に形をつけてもらはうか、さあ、どうして呉るんだ、

おそめ 兄様まあ、そんなに暴々しい事をおつしやんなよ、お八重様どういふ事情なのでござります、

お八重は手巾で涙を拭きながら、

お八重 決して變心なんぞをいたした譯では無いのでござります、母が、貴嬢、私へ相談もせずに、お約束をいたしてしまつたものですから、今更否とも申されず、此家までは参りましたもの、いよくと事が極まれば、私は生きてはをりません覺悟で、

おかん 若旦那お聞きなさいませ、お可哀なうぢやござんせんか、眞にまあ、おいとしい、おうく、死ぬといふ覺悟で、若旦那へ申譯に、おや左様でござんしたかい、でもまあ、此處るかうちつて、お逢ひなすつたのが、盡きない御縁と申すのでござります、

お八重 さういふ私の心も知らずに、今のやうにおつしやると、私は口惜てく、

おかん おうく、さうで御坐いましやうとも、事が分りなへしたら、若旦那だつて、いつまでお腹を立てておらつしやるもんですか、ねえ若旦那、お互ひ惚過るから喧嘩も起る、又つひ其なりに解易く、さあさあ仲直りといたしましやう、

おそめ あなた、どうぞ御機嫌を直して、兄様も機嫌を直して下さるよ、

夏小袖

夏小袖

徳之助 何だか知れたもんぢやありやしねえ、
お八重 まだあんな事を……

おかん おや又ですかい、好加減になさうございませぬ、此處には氣持ばかりでございませぬ、
おそめ 兄様何ですぬ、貴嬢もう御了簡なさいませぬ、

お八重 どうも貴嬢には面目もございませぬ、
おそめ いえ私も兄から貴嬢のお噂を聞きまして、よく存じてござるのぞございませぬ、此間愚父が貴嬢を

といふ話を致したので、兄も私も吃驚致してしまひまして、毎日氣ばかり揉みまじりましたのでございませぬ、
お八重 維有う存じます、色々御心配を懸けまして、此後とも何卒お力におなりませぬと申して下さうございませぬ、
勘さん、何とか好智恵を出して下さいな、

おかん 好智恵だつて、私も呆れてしまつて、智恵も工夫も急には出やあしませぬわね、若旦那がかう、と
いふ事を存じてござりましたら、旦那様へお世話なんぞを申すのでなかつたのでございませぬと申したけれど、ほんに
一向存じませぬものでしたから、つひくこんな事になつてしまひまして、何ともかとも申譯がございませぬ

ん、若旦那、どうぞまあ、何事も年齢に免じて御勘辨下さいませ、お八重様、まことにどうも濟まない事
をいたしました、何も悪氣があつて、いたしました、わけでは無いのでございませぬから、
徳之助 いややな過ぎた事は仕方がない、それよりは、此處を一つ振替へて、八重様を此方の物にする工夫
はあるまいかな、

おかん さうでございませぬ、かうつと、おと有りますよ、私の近所のものに、四十ばかりの後家がござ
います、土族の零落でね、真に上品な女でございませぬから、これを大商人の後家様に仕立て、旦那
様に惚れて、是非一所になりたひ、持参金が二萬圓で、地所が七ヶ所、家作が何軒といふやうな事を吹いて、
お話をいたしましたら、あつたふ愁の、おや御免さいませぬ、いひ附けてござるものでございませぬから、つひ口が
迂りまして、あつたふお方ですから、此方の話は否になつて、其をとおつしやるに違ひございませぬ、其内
に此方を急いで、お取極め遊ばして、萬々好い遊ばす、其後家様の口を釣てござりますから、これはどうぞ
ござります、可なり面白うございませぬか、ねえ貴下、

徳之助 なるほど此奴は妙だ、あの親父なら一盃食ひなうた、

夏小袖

おそめ きつと食べますよ、

お八重 それぢや、母の方は貴下の父様がお談じなすつたのですから、貴下どうか旨くおつちやつて、破談になすつて下さいましな、

徳之助 おつと、それは心得てるよ、

(十一) 鞆 當 (上) 五郎右衛門 徳之助

五郎衛 徳之助どうだ、彼女は人柄な、飛だ様子の好い娘ぢやないか、

徳之助 左様でございますかね、

五郎衛 何だ、左様でございますかねとは、此間は好といつて大層譽めたぢやないか、

徳之助 此間は好と思ひましたが、今日よく見ましたら、一向好い事はございませんな、あんなものはよしなすつた方が宜しいかと思ひます、父様は御存じでございますまいが、彼女は疵物でございますよ、

五郎衛 疵物だ？ そりやどうも以ての外な、

徳之助 留にお氣が着きませんか、あの高島田は附留で、地は赤瓦の丸薬罐、そいつを黒油で塗か

くしの、それが又馬鹿に巧く粧へてあるから、一寸分らないので、之を見付けたのがお染でございます、さういはれて見ると、なるほど、胡乱な頭髮でした、

五郎衛 疵はそれだけか、

徳之助 まだ御入用ですか、あとは左様さ、左の脚が一寸五分ばかり短かい處に、お氣は着かれますまい、

五郎衛 それだけか、

徳之助 未だ許多でもあります、薬罐も跛者も我慢が出来るとして、こゝに一つ、どうでも辛抱の出来かねる大疵がございます、喉の左側に、これ位な梅干を貼ておますから、はて變つた處で頭痛のする女だ、

の渴かないお呪、か知らんとおもつて、よく見ると、これが大疵だ、引釣！ 梅の吹出した痕です、

彼女は私高子をやるに違ひありません、如何でございます、流石のあなたも私高子は驚きましたらう、

灰吹屋の五郎右衛門が私高子を内へ入れたとあつては先祖のお位牌へ濟みますまい、私も私高子の母様はあやま

ります、渡邊 綱は鬼を叔母様に持たことがあるが、鬼の母様は類無しで、餘り珍し過ぎます、

五郎衛 いや、其處までは氣が着かなかつたが、そんな事實であつて、見れば、灰吹屋の家名に關る事だか

夏小袖

ら、
徳之助 御尤、

五郎衛 破談にして、

徳之助 御尤、

五郎衛 折角約束もしたものでから、お前の嫁にもらふのは、どうだ。
徳之助 私だつて嬉しい事はございせんが、父様が下なるをいふものさ、否だなんぞと申しては不孝にも
たりますから、

五郎衛

いや然し、お前の嫁にしても勝簾を汚すに異は無いから、之はいつそ破談にしよう、なんぼ親だと
いつて、我子の嫁に鬼を持たせては、義理が濟まなう、さつぱりと破談にしよう、

徳之助

いえ何、父様結構で、私のやうな不肖なものには、私高子の嫁が相当してをります、

五郎衛

いや、そんな女を持たせては、親の義理が濟まなう、

徳之助

今日に限つて親の義理を、そんなに振廻はさなくとも、團子買つたら串やらうの平素の格で、

そ私の嫁におもらひなすつ下さし、

五郎衛

お前は知るまいけれど、彼女は疵物だ、高島田は義鬘で、地は全薬鐘だ、

徳之助

存じてをります、

五郎衛

左 脚が一寸五分短かい、

徳之助

存じてをります、

五郎衛

それから未だ、梅干が頭痛をする、

徳之助

吭で頭痛をするのでしよう、

五郎衛

さうだく、それから梅干が引釣になつた、

徳之助

毛虫が蝶になつて、親父が高利貸になつた、

五郎衛

黙らつしやい、知るまいとおもつても、皆知つておるぞ、

徳之助

何でございませう、

五郎衛

何も糸瓜もあるものか、手前は彼女に惚れておやめがるのだ、

夏小袖

徳之助 さう知れましたら、何もかも打明けて申してしまひます、なるほど私は彼女に惚れてゐるので、彼女も亦私に惚れてゐるので、所謂相惚れの中でございます、懼りながら、父様より私の方が先口でございます、虚だと思召すなら、先方の女にお聞きなすつて御覽なさいませ、

五郎衛 黙らつしやい、親の前で怪しからぬ言を吐す奴だ、惚れてゐるものなにも、入つた話ぢやねえ、我が女房に極めたものに、指でもさすと承知しねばぞ、

徳之助 父様が何とおつしやつても、私が先口でございますし、當人も亦命を賭けて私の女房にならうといふくらゐな中ではございませぬから、彼はもう私の女房も同様で、其を設ひ親であらうが、鬼であらうが、横取をするといへば唯は含ませせんから、さう思つて下さい、

五郎衛 これ何だ、好加減にしやべれ、親を鬼と同一にする奴があるか、

徳之助 息子の嫁を横取するやうな丁簡の親なら、鬼と大して相違はありませぬ、

五郎衛 横取くゝと他聞の悪い言をいふな、何も横取をした覚えはないぞ、おのれこそ誰に断つて、彼を嫁にしたのだ、

徳之助 御本尊様の當人が承知で、

五郎衛 當人の體ぢや無いぞよ、親掛りの中は親の持物だ、其親の承知がなければ、断り無しに人の物を盗むも同然だ、横取とはおのれの事だ、

徳之助 親ばかりが承知したつて、さうなるものですか、何より肝心なのは、當人の心で、親がくゝと御大相におつしやるけれど、あなたは親をおもらひなされるのですか、

五郎衛 口の減らねえ事を吐かしやあがる、何が何といつてもな、親には勝ねらものに極つてゐる、彼女が、親にいはれたからこそ得心して、我の所へ来る氣があるから、昨日も見會ひに来たのぢやねえか、否なものなら昨日来る事は無い筈だ、それでぢやあんと譯が解つてゐる、彼女は親孝行な者だ、親の言葉を背かずに、あややつて、なう、彼所へ嫁に行け、唯といつて、孝行なものだ、子たるものは、あつたものが、當然だのに、おのれの様に、何かといふと面白半分親の反對、廻る奴が、此世の中に亦とあるものか、徳之助 あなたの様な父親も亦多度は無いものですか、似たもの親子で、丁度好のでございます、

夏小袖

捷徑でも聴くやうに心掛けるが、いゝやな、馬鹿くしい、おへねえ助兵衛親仁だ、
権平 御尤でございます。

権平

旦那様、只今若旦那様の御丁簡をお聞きまじりました所が、貴下の思召しておらつしやるほど、無理な言をまつしやつてはおらつしやしませんで、色々口答をしたのは悪かつた、あれは全く蟲の居所が悪かつた爲に、つひ心にもないことをいつて、今更誠に面目ない、これからは父親を大事にして、どんな事でも、おほせは背きませんから、どうか今までの事は水に流して、可愛がつて下さい、年寄つた親に苦勞を懸けては濟ない、な、こんなにおつしやるものでござりますから、どうぞまも御勘辨をなさいまして、今日の所は何分にも、

五郎衛

それはな、あれがどう下手に、おどなく出れば、何も敵同士とらふやない、親子の睦まじいのは、何より結構な事だから、我だつて何をいつまで腹に念つておるものか、彼女を念切つて、我が家内にする事に就て、故障をいはないといふことなら、我も勘辨して、此後とも可愛がつてやらうから、よくぞ

ういひ聞かしてくれ、

権平 御尤で、

権平

若旦那様、只今色々旦那様の御丁簡を伺ひました處が貴下の思召しておらつしやるほど、父様だつて何も譯の解らない事をおつしやつておらつしやるのはございしません、どんな事でも、お前の願ふ通り聞いてやらうから、以來はどうか優しくして、親子睦まじくしたい、とこんなにおつしやるのでござりますから、貴下もそれで御勘辨なすつて、父様は父様のやうに、大事に遊ばさなくつちやいけません、

徳之助 そりやあ、父様が彼女を私の嫁にしてくれといふことなら、其上の願ひは無いのですから、以來は生れ替つたやうに孝行な人間になつて、夫婦して大事にするわな、権平、親父は眞箇に我の願ひは何れも聞いてやるといつたか、

権平 ええ、おつしやいましたとも、

夏小袖

夏小袖

権平 旦那様、それぢや御機嫌をお直しなさいまして、若旦那様、此方へお出なすつて、謝罪をなさいまし、

五郎衛 どうも権平いろく世話になつたのう、待たな、と懐中へ手を入れる、権平は若干金いくばくに有り付事と手をむしり、待ておると古手拭の薄布はなすけを出して、ちんとかみ、

五郎衛 之を一つ洗つてくれ、

徳之助 父様、どうぞ御勘辨なすつて下さいませ、

五郎衛 何の謝る事はない、おれも悪かつた、

徳之助 どういたしまして、皆私の不心得からなさいませ、

五郎衛 どういはれて見ると面目が無い、柳の枝に雪折ゆきまがは無、何と思ふものかな、

徳之助 それぢや御勘辨なすつて下さいませるか、

夏小袖

五郎衛 勘辨ともく、大勘辨だ、

徳之助 それはどうも早速に難有うございませす、やれく、こんな嬉しいことは無い、すんでの事に命をも捨てる所であつた、

五郎衛 どうしたと、

徳之助 あの女と添そへなすものなら、私は命をも捨てるを申したのございませす、

五郎衛 ふうむ、

徳之助 所をお陰様で、まあ彼女を女房に持てますので、

五郎衛 ふうむ、

徳之助 私はこんな嬉しい事はございませせん、

五郎衛 その彼女といふのは誰の事だ、

徳之助 父親元談ばかりおつしやいまし、魚とがれぬいたお八重の事でございます、

五郎衛 何だ、お八重？あの我の見會をしたお八重か、

夏小袖

徳之助 そのお八重で、

五郎衛 ぶさけた事をいふな、誰があのお八重をやるというた、

徳之助 これはどうも、只今思切て、私の嫁に下るるをおつちやしたぢやないか、

五郎衛 途方も無い、誰がそんな事をいつた、

徳之助 おや、可笑いな、でも今添はしてやると、

五郎衛 手前こそ思切つて、父様に譲るといつたぢやないか、

徳之助 途方も無い、誰がそんな事を、

五郎衛 おや變だわな、

徳之助 全く變だよ、

五郎衛 變も何も無に、お八重はおとなく父様に譲つてしまへ、

徳之助 あなたこそ奇麗に息子へお譲りなさいまし、その年齢で女房の沙汰でもござりますますぢやないか、

五郎衛 そんな指圖を手前に受けるほど證據はしねえ、

夏小袖

徳之助 證據しな過ぎて、息子がえらい迷惑をする、

五郎衛 何だと、おのれの様な不孝ものは、我家には置かれねえ、子とは思はねえから、さうおもへ、

徳之助 親とも思はないから、合事あひこでよいとの、

と拳けんを打つ眞似をして、五郎右衛門の鼻頭はなをへ鐵砲てつぱうを出す、

五郎衛 何をしやがる、

徳之助 よう色いろをど 男やつちやんの八重様泣かせ、にう、

と妙な手摸てつきをして遁けて行く、

(十三)掘出し 一同惣出

佐助 若旦那、

徳之助 佐助かい、何處まづくらにあるのだ、眞闇まづくらな晩ぢやないか、

遠寺とんじの鐘かねがボーンと鳴る、

徳之助 ええ薄氣味うすつきみが悪い、

夏小袖

佐助 かういふ晩でなけりやあ、仕事は出来ません、

徳之助 泥坊じみた事をいふなよ、

佐助 でも泥坊ぢやあぢやいませんか、

徳之助 なるほど左様だつた、どうした、在つたか、

佐助 一寸お手をお出しなさい、

徳之助の手を執て、曳すつてゐる麻風呂敷の中へ突込ませる、

徳之助 いや、あるわ〜、

とむやみに攪旋はして、

徳之助 音生一好音がしやあがる、

佐助 銅貨の音とは又格別ですね、

徳之助 天子様と平民ほど遠ふからな、

佐助 私にもちつと弄らして下さる、

夏小袖

徳之助 弄るのは好が、指の膝なんぞへ挟みつこなしたよ、

佐助 聞 夜だから知れやしませんね、

徳之助 怪しい事をいふなよ、おい、三千圓あるかい、

佐助 勘定はして見ませんが、ありまじよう、

徳之助 ありまじようで濁して、指の膝の手品は否だぜ、

佐助 大丈夫ですよ、

徳之助 やつぱり彼桐の根方にあつたかい、

佐助 五尺ばかり下に、水瓶が埋けてありまじしてね、其中にすつしり、

徳之助 底にまだ遺つてはしないか、お前はいつでも茶碗に二粒ぐらゐ飯粒を遺すの疾だから、

佐助 麥飯と金貨とは、大分氣の持方が違ひます、

徳之助 は〜と〜と〜と〜と、御苦勞だつた、褒美はしつかりするぜ、

佐助 何分お願ひ申します、

夏小袖

垣の外にて犬が頼りに吠える、

徳之助 馬鹿に吠えやがる、畜生め、泥坊なみに扱やがるな、

佐助 小石を拾つて二つ三つ打着ける、

佐助 親指が目を覚ますといけませんから、早く参りませう、少し手をおかしますつて、

徳之助 争はれないものだ、麥飯はかういふ時にいけねえ、

佐助 それは、御同様です、何と無く下腹に應が無いから恐れる、大變く、提灯が見えます、

徳之助 親父だく、見巡に來たのだ、

佐助 親父？大變だ、若旦那、其方は下水です、

五郎衛 奪られたく、泥坊、大泥坊、桐の根が掘てある！瓶が虚になつてる、徳之助！和七！権平！あ、奪られたく、

とじだんだを踏むで泣出す物置の陰から徳之助ぬつと出て、

徳之助 父様、何でございます、

五郎衛 奪られてしまった、

徳之助 何を奪られたのでございます、

五郎衛 大事のく、三千圓、

徳之助 三千圓！大層澤山にどうも、そんなに持ておらしたのですか、

五郎衛 まあ持ておたのだ、

徳之助 はてな、此間は千圓も無いとおつしやつた癖に、

五郎衛 二三日前に、ふいと出來たのだ、實は人の預物だ、預物だから大事だと、此桐の根に埋けて

おいたのを、奪られてしまつちやあ、我はもう生きてはおられない、徳之助、我は死んでしまふ、

徳之助 その三千圓は命にも換へられないとおつしやいますか、

五郎衛 あゝ命にも換へられない、大事のく、金だ、我はもう死んでしまふ、

徳之助 もし其金があなたの手へ還りましたら、どうなさいます、

夏小袖

夏小袖

あれが改心したと申しますから、どうか勘辨をして、おちんなさいますして、
五郎衛 三千圓さへ出れば、何でも好てござら、

徳之助 それぢや、その様にお認め下さい、

證

一此方大事の三千圓、裏庭の桐の根方四尺下に埋置候事實正也、然る所、今晚盜難にあひ、一方ならず力を落し、既に命をも捨むと存候所貴殿明日中に右金子別條無く、此方の手に戻可申約束致候に於ては、萬一約束通りの首尾に相成候はと、右禮として、八重事は其方の嫁につかはし、娘染事は和七に添はせ、且又佐助の歸參許しつかはすべく、

権平

其處へ一寸、権平の給金倍に致しとらすべく、とお書き入れ下さるやうに願ひます、

五郎衛

いともく、且又権平の給金倍に致しつかはすべく、爲後日一札如件、

徳之助 宜しうござります、
と證文を懐に入れて、外面の方を向いて、大聲に、

徳之助 佐助く、

佐助 へい、皆様お目度たう存じます、

と彼風呂敷包を解いて、金貨を山のやうに積上げる、

五郎衛 やあ、あつたく、無事であたか、

と飛蒐つて、金貨を播込む、

徳之助 目出たい、

そめ 目出たい、

和七 目出たい、

佐助 目出たい、

権平 目出たい、

と一同喚き出せば、五郎右衛門も釣りこまれ、金貨の上は腹這になつて、白髪頭を振立てく、
五郎衛 目出たいく、

夏小袖

(一) 錢の富士

紅葉集



前編

あるやうで無いもの金銭とて、天下の人寐言にまで言うて欲しがらざるはなし、
信に此金銭の獲難きことの不思議は、鐵を吸ふには奇妙、磁石といふ神通力ある
に、是は又何したものと、金時計買ふ人の後に過難に立てる納豆賣の獨語、尤
也。此物美みの男とて、母の胎内を苞入にて洩出し、臍の緒に絲を牽きしにもあ
らざるべく、二十四五の頃には随分百兩包の顔も見て、其重寶なる味をも知り
けらし。羨まるゝ男とて身内に金脈のあるにはあらず、由來を聞けば執か願

の汗の滴れて、粒々金色の御光を放つにあらざるべき。
失ひ易しと思ふ方の金銭は、皆獲難しと念ふ人の手に落ちて、あるやうで無いものとは謂ひながら、在る所
には又腐るほど在るもの哉、今此日本に葛城餘五郎といふ名を知らざるものなし。これの持てる資産を、盡
く一錢銅貨に換へて聯ぬる時は、恐るべし日本國を五巻半捲きて、其餘れる分を積重ねて見れば、富士山
の高さの六層倍、と要らざる事を統計家の傳へ侍る。

これが一人の寶なり。惟へば裏借家の奥に家内五人暮し、夕方になれば文久四ツ残る日を、一年中の安樂

三人妻

三人妻

日として、朝は芋の尾を粥に吸り、餠午は大方抜にして、晩が南京米の雑炊といへる輩の、天から授けられたる配當を、優勝劣敗の理にやられて、かゝる人の弗箱に吸取られ、旨くした男は神か國王かの如く振舞ふに、下根弱肉の大勢動物館の山犬ほども食うた例無くて世を送るなりけり。

萬國何方にも無愁の人といふは無ければ、金錢の置場に當惑して、竹箒に懸け、箕に入れて、之を大道に捨つるものゝあるべきやうはなきに、何處いかなる所に餘五郎はさほどの憂を見出して儲けたるぞ、手を三つ鳴せば忽然として千圓札の降來る奇術を得たるものならむ、と餘りの訝しさに素生を糺せば、加州金澤在談義所といふ村に、鳴るは瀧の水、日は照れども絶えず陰のごとく微き土百姓の次男に生れけるが、天性の惻發士なふりを憂き事に思ひ、十七の年國元を逐電して江月にさまよひ、一二年は便る方なきに乞食の眞似もして、それからの出世の小口、湯屋の木拾に成りて、人の中なる濁鼠、之もおもむろからず。頓て蕎麥屋の擔夫に入込みて、暫く働さける中に、始めて眼孔の木眼ならぬ人に見出されぬ。それは大原富五郎とて流聲の鐵山師なり。

餘五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も舌を巻きて手足の如く頼めば、餘五郎も此奴骨あり

三人妻

と服して勤めける程に、立身衆に越えて、一年の間に世智賢さもののばかり聚めたる二三十人の上席にすわり、大原組の一番々頭餘五郎の下に様の字を附けられ、會ふものゝ頭は先方から下りぬ。其中には四五年前には、附くなくと袂を振りし且那樣もあるべし。

餘五郎二十八の年、大富一生に唯一度の見込違ひより、見事に身代を叩き、借財忽ち山のごとく、之に心挫けて勇しき了簡の失せけるを、芥子の膽と餘五郎心に可頼しからず、言を盡して勵せども背かず。此墜跌病の源となりて、間も無く大富は亡くなりけり。

其後は餘五郎鐵山に限らず、ごかりと儲かるほどの事には、先鞭に首を入れて逸す事なかりしに、折々の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出しける上、明治維新の擾亂に紛れ、爲たい三味の旨い事して、一網に五六萬の利益は、其折わづか十五兩で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千圓になりけるなご、さる類の多かりき。

明治の世となりて萬事に歐羅巴を寫す氣運に伴れ、前來の儲口潮のごとく、滔々と寄せ來るを此時と、世間は成らぬ事に念へる三千里の荒海を押渡り、日本にては一錢に十個するほどのものを、珍らじがる毛鹿人に

五弗十弗に賣りて、又其國の下らぬ物を買集め、持運りて都人の心を動かし、之にても亦算盤の外の利益、唯奪つたも同じ様なる手易さに、金錢が金錢を招ふとは此事なり。

それより類異れる商社を四つまで立て、股旅の才物に預け、其外抜目なく八方に手を擴げて、四天王に應を取らせ、自家は風流無愁の顔して、都外の閑靜なる處に、華族かど人はいはるゝ居宅を構へ、其四邊の地面は、目の及ぶ限り我垣の内にして、庭に追刻の出でしとも噂されけるなり。

利の事は一切手代委せにして、我は有金を我が一代に費ふべき工夫に屈托してある事と誰も想ひけるに、此身代になりても更に満足する事なく、著の上下にも錢儲に肝膽を砕き、之はと思ふ計遣浮べば、酒盃を投捨て、馬車を急がせ、腹心の手代に計を含め、唯二三日の内に、人間一匹二匹は懐手しても樂に暮しのなるほどの商ひすれば、如何様尤と、世間は餘五郎が大抵の贅澤に驚かず、東京間近の名所々々には葛城が別宅の瓦屋根を見ざる事なし。

ある夜の醉紛れに、泉水の月を觀めて、此景色の好き、我は未だ須磨の秋といふものを知らず、人の話に詐なくば、いつぞは見たいものといへば、御相伴に跟りたる男、此御庭先より鐵道を布き、風呂場、料理場、

お寢間、お坐敷附の汽車を造らせ、お浴衣のまゝついでと御出は如何。餘人は知らず御前の力なれば、譯も無い事といひしは、追従なれども其ほどの金力は確にある身分にて、其もをかしからぬにあらねど、今といふても今の間には合ひ難し。早い所は須磨の寫真を買はせ、此月の前にて見たらば、興は薄かるべきも亦變りて巧い分別ではあるまいかと笑ひぬ。かの男聞きて、あの心懸にては此身代當分は傾き難しと陰言いひことぞ。

其昔蕎麥屋の擔夫せし折は、容貌何處か狸のごとく、人は狸餘と言難して、此行末を思ひ懸くるものは無かりしが、今は二頭立の馬車を軋らせ、獵虎の皮の膝懸、白鶴の羽織の敷物に、悠然として漸らす葉卷の灰の、風に飛ぶ一片が何錢といふ身にならば、狸のやうなる御顔も可笑氣無くなりて、頭髻、八字髭、尙又縮れたる頭髮までが威儀の飾となりて、那は葛城といはるれば、知らぬ人も畏しがりて、いかさま尋常ならぬ面魂と皆見送りぬ。同車は束髪あひのりの白鬚紋服しろひげもんじゅばの女なり。年の頃四十約なるが、瘦乾びたる容貌の中に、剛としたる處と凄まじき氣色のあるは、柳の大木の秋に遇ひて、葉を振ひたらむ風情なり。而も下司なる處ありて、奥様の胸に遺手の首などすげかへたらば、かくやと想はれぬ。此女麻子とて餘五郎の妻なり。おぼろ氣に昔

三人妻

を知らぬもの、語るを聞かざりて、湯島天神の境内に、其頃名代なりし矢場女のよし。
 今は焼消して矢の痕のみなるが、始は左の腕に蜘蛛の肉縮まりて、蜘蛛のお重と異名とりし手練もの、網にかゝる男は羽翼縛になりて血を吸はれざるはなかりけり。今の葛城大盡、その頃の狸の餘五郎、尻切牛纏に馬のやうなる驢を露して、逢はで戻ればと通ひけるに、噛みさしの小楊枝も吐懸けまじき、素寒貧に先方から熱くなりて、行きたびごとに小使を拵り、上に引張るものから下帯までも仕送りぬ。
 漂母の一飯立身の種となりて、今も餘五郎に捨てられず、奥様と崇められて協はざる望も無く、千兩役者の三四人も内に呼びて、地聲で世事いはるゝやうになりては、世の中もをかじからずと、悟りすまして浮きたる事を憤み、無法の華美を好まず、人に昔を知られぬやうに、夫の名を潰さぬやうにと殊勝の志を起して、何處までも生れからの奥様に振舞ひ、萬般を大様にじて、情を深く下を慰めば、誰もこころいとやられて、此奥様なくては葛城の家は闇夜に月、光る目玉も怕がられず、出入の男女生神のごとく敬ひ奉るなりけり。
 (一一) 天邊の樂
 衣食住は人の心を苦めて、此中一つの不足も煩ひの種となりて、三者具足の願ばかりに、大方の不性者も

三人妻

否ながら手足を動かさし、少し勉なるは身を粉に砕くぞかし。頓て此三者の足れるといふにあらでも、縁に餘裕のつく頃よりは、又外の慾出で、骨休といふ事を念出し、無理なる工面もして折々は命の洗濯。世の男心の天邊の樂、女色の外にあらざるごとし。連添ふ女天邊の苦勞も、亦我男の浮氣なるべし。
 然々 惟るに、建國の初には民尙武の氣に富み、刀鎗を野邊の白茅ほどに思ひ做し、生首を見ること西瓜のごとく、女までが人の血汐を唇に塗りて化粧せしほどのあらくれたる國も、數百年の間に驚くべく進化して、髯ある奴が白粉傅けて姿に氣を採み、華車なる事の穿鑿を第一にして、千萬の遊戯に精を竭し、骨を休め氣を養ふ事のみを考へ、今世界に開化せるといふ國々の有様を見るに、どうやら大きな玩具箱のごとし。その代りには太古より數百段賢くなりて、勤むる所は吃度勤めて、錢儲もおろかならず、おのれの一は立てての後の洒落なれば、之を嗤ふものはあらざれど、可成は此性根にて祖先建國の始末をおもひ、黒木の柱、木葉衣、泉に飲み、獸を屠りて、神の則に順ふの無爲を忘れざらば、一段と好かるべきに、さうは行かぬ理のありてや、萬國何方も開化の國の贅澤、言語に盡し難く、我邦の人々曾て夢にも見ざる事多し。

三人妻

一人の身の上も一國に異ならず。壯年刻苦の善根より、美果榮々と實りて、衣食住に事欲かず、裏には土蔵三
 十月前、日本橋から眺めたやうな景色、他の物と見てさへ胸の清くほど快い氣持なるを、悉皆貴下の物と耳
 端に囁く聲して、之ばかりにても十分なるに、まだ外に鑽山幾箇、地面何百箇所、繁昌なる商社を數持ち
 て、招かざるに來る金利ばかりが月々何萬圓。出來も出來たる長者の心には、おのづから食の昔忘れて、
 分相應の榮耀は我からせずとも世間が許さず。爲て見るほど面白くなりて、金でなるほどの歡樂の數々、一
 順仕盡して見れば、兎角自由の利くは無理なる處ありて、興の薄きが本意無く、金力ではどうもならぬや
 うな遊はあるまいか、と聲を燃りて、麻子の横顔に新橋の酒の氣を吹懸ければ、打笑ひて、何事も苦さ中の
 おもしろさ。湯島に在し頃、正月三日の雪の夜に、此方は地廻六七人に打撃かれ、命も危かりし中へ蜘蛛の
 事、此後またとはあるまじといへば、餘五郎額を撫で、過去りし昔はいふなくと寢床へ遁入りぬ。山瀬
 といふ手代は聞ゆる粹者、之に思はくを話せば、當時柳橋に柳屋の才藏といふものあり。姿色萬人に秀で、
 心慧く、諸藝に堪能にして、應待の上手此上無し。年齢は二十四の由なれども、打見は二十歳を越えず。

三人妻

之を雜段の上に置くならば、誰も「者」とは思ふまじき上品さ。水を向けて口を開かせなば、いやはや辯舌滔
 滔として前なる河も逆に流るべし。此女を聘んでのおもしろさ、肉も骨も有つたものにあらず、大佛様
 も溶けて流れて柳屋の貨の泉、晝夜を捨てぬ座敷のせはしさ。美人品切れの當節柄、客はいづれも餓鬼の
 とく、目色を變へて影隨ひ、我手に入れむと、金鏡を奪まず、名を惜まず、顔を潰し、命を捨てゝ懸かれど、
 木像の普賢菩薩か、繪にかける小野の小町よりも、口頭の甘いだけ面憎く言ふ事聞かず。何の某といふ待合
 の女將軍も塵を投げて、此子帶留の金具に珊瑚の瓢箪を附けたる間は、とても惚ばじと洒落たりな。
 まことに浮氣ならぬ深間ありて、さる會社の卑き所を勤むる、菊住何とやらいふ男に情立て、古風の警文
 お前一人の中と聞き及ぶ。人の噂に違はず、此女の手剛さ、我等も見事に彈かれたる一人なれど、委細を申
 さば色男の名折、概略はかくの通り。左にも右にも一鞍御試しあるべし。先は金替にては行かぬ代物、
 近頃御徒然の折から變りたる御慰みと語る。葛城大盡勇み立ちて、これより直に案内せよと急かれ、用ある
 身なれど何も主命と是非なく、荒氣の大將一戦に仕損じて、同席に耽擱くも辛じ、手際を見るもをかしかる
 べし、と後に尾さして立出づれば、白拍子などへ通はむに馬車は勿體臭くて風流ならず、綱引で中有を飛ば

三人妻

(三) 沈香亭

萬端山瀬が取計らひ、大盡は白檀の床柱に靠れて、大様に願聲掻撫する指の金剛石、座敷の前後十二畳を照らすを、番の婢が噪きて一同に注進すれば、板前の傳吉まで飛出して後學の爲、と隙見する人數隣座敷の襖の陰に山を成し、偷めども足音人聲の聞ゆるを、何かあるかと大盡に告められて、御前に侍へる婢挨拶に困り、唯今彼方に参りし役者の歸る所と紛らせば、其方も見て來いとの仰せになほ困りぬ。一時間ばかり待てども才藏は見えず。長いので大盡酒の旨うなさうな顔色。今一度見て参れの御意なき内、婢は心得て、他のお座敷を貰うて参るやう申遣はしましたれば、少々暇取れまする理、おつとけ見えませうほどに、暫く御辛抱遊ばしまし。なほ迎を遣はしましよ、と銚子を持ちて立ちけるが、頓て還りて、やうく只今見えましました。強い勿體の待たせた罰には、座にも着かせず一朝弄して、其舌戰の模様を御前の御着に、と山瀬は酒に舌を濡して待つ所へ、才藏晝間からの無理酒に傷みて、歩行ふらくと次第なき態度。海棠したるか雨を帯びて、

三人妻

春色今を開なる姿、沈香亭の圖を歌麿が讀いたらばこんなものなるべし。袖を牽かれて拂ひし人のありとは心着かず、二人を一樣に初對面の時誼して、風俗一目に位あるべき御方と、三指懸りに挨拶するを、山瀬は心に可笑く、才藏が面を擧ぐるを候ひ、其方は見忘れんも、此方は恨ありて忘れぬ御方へと盃させば、これはく忘れては濟ざる御方を、此通りの體裁、何事も酒の上と御勘忍遊ばざるべしを發端に座敷浮出して、馴染無き大盡も頗る興に入りて、てんと堪らず、長十二時近くなれども歸るとは御意遊ばされず、折々目顔にての合圖、山瀬は確に其事を合點はしたれど、連も成らぬ談と知れば、左右なくは打つて出です。打つて出づれば取つて投げらるゝは目に見えても、頼まれた因果には否もいへず。さらぬ氣色して冗談口を吐きてありけるが、折を見合せ下座敷へ呼出せば、山瀬様離様への御傳言か。柳橋中に知らぬものなき戀中を、罪深くも際立して、薄闇い處へ我を招込までも、天下晴れてかうくと立派に傳言を頼んだがようござんす、とはや一義を言出させぬ仕掛なり。山瀬もさるもの、こんな古手には少しも騒がず。山瀬といふ男自分の戀に人を頼むは大嫌ひ。さればいつそやも其ゆるにこそ振られたれ。坐敷にござるは此方の主人といへば、其で承知の理の葛城餘五郎。格別冗い

三人妻

事をいはずとも、此方に用とは知れきつた譯、と半分聞きて其だけはと早立ちかゝる、引留めて、下に居やれど、何處かの三味線を合方にして染々口説けば、立聞く女もあらば其が第一靡くべき上手に、才藏も持餘して、遁るゝ路なく、申は家暮なれど、男には一切肌觸れぬ心願ありてと、爲やう事なさに秘したき事を句はすれば、其も知らぬにあらねど、心からの浮氣にあらぬ、勤めの餘義などに其人も定めてゆるさるべし。今まで轉ばぬを看板に賣出したる名の、唯一夜にて折れむことを口惜く思はゞ、其回復のなるほどの事は、屹度山瀬が命に懸けてもすべし、と第一金第二金第三金第四金の奥の手で行けど、喉も鳴らさず。冥加に餘る御志は嬉しけれど、私に彼人あるを御存じなれば猶の事、貴下にも覺のある御身に、他の戀ならば嘆しとも苦しからぬやうなお言は、近頃粹にも似合はぬお心意氣。一言唯といへば今の間に徳の行く話、私とて然を知らぬではなけれど、其に背中向けて思ふ人に心中立てるが、ちと當世に向かぬかは知らねど、張とやら意氣地とやら、那樣真似して何になると、若い了簡を啜うて下さんすな。對手は流聲の葛城様、紅襟の然氣少い子達でも、此方から強賣する氣になるほどのお方を、酔興らしう振るといふも、申す通りの譯なれば、何卒お心に障られず、御前よしなに貴下から、と酒を醒ましての言譯に、此上はとて鷄を殺るやうな手暴も

ならず、請買無しで澤山聞され、用も足りず此まゝ手を退く器量の悪さ、と山瀬は苦笑して立上りぬ。取り残されたる葛城大盡婢の酌に寂しき小飲して、相談の暇取るは事の難かしきか、但は聞ゆる悍強を山瀬が乗鎮めに懸れる故か、と然までは退屈もせず、半分は樂みにして待ちけるに、裏階子より足音して山瀬はぬつと入來り、案の如くといふ冒頭に力落して、不成かと顔を差寄せれば、とともくと首を掉りて、不肖の力には及ばず。此次には自身に御出馬ありて、一攻攻めて御覽あるべし。今宵は兎も角も此儘御歸りと勸むれば、大盡梓弓の張つめたる弦断れて、くるりと燃れて復りたるやうに味に氣が抜けながら未練残りて、才藏はいかゞせし。唯今参りますといへば、然かと落着拂ひて、更に御腰は動かさず、今一目御覽いたさ風情なり。

山瀬は羽織の紐を結び懸け、はや御歸あるべし。此處でまた酒にしては、此方も照れとば女も照れ、殊の外場合の宜しからぬものなり。女の急に参らぬも、其邊を計らうての事なれば、此處はいざと御立と急かれ、大盡いよく本意なく、さればとて一騎残りても功名の成難きを見極め、しづく歸支度する所へ、素知らぬ顔して才藏出來り、小取廻しに大盡の後より外套着せ懸け、帽子手袋を持ちて、離れがたなきやうに

三人妻

跡追ひまはし、近日に是非、今夜は飲過にて失禮のみ、と今方振つた顔もせぬ挨拶。愛嬌満るるばかりの目元を大盡吃と視て、近日口説に來るぞ、と戯れの中に執念あるやうな言ひへば、彈器仕掛の胴懸して屹度お待ち申しまする、と之は眞實の中に嘘あるやうな口上を、憎しと山瀬が側から、胴懸よりは此方の心が彈器仕掛、好具合に出來た藝妓めと肩をたたくけば、才藏も一言なくて、とんと山瀬を式臺へ突落しぬ。

茶屋の女房始め七八人の婢ども見送りに居並びたるが、此體に嘈くを木の頭、御客様車に乗移れば、綱引提灯を振立て、からくと引出す後に、御機嫌ようの聲々も鎮まりて、門の燈火の幽なるを、車小橋を渡る時、大飛過に眺め遣りて、思ひなほ殘る顔に川風吹きて、醉心涼しくなるまゝ交睫むと思ひける間に、我門近き道端の小石に車揺れて目は覺めけり。

後を見れば續く車無し、如何せしと車夫に問へば、明朝用事あれば此所にて御別れ申すと申上げよとて、途中より曲られましたと言ふ。

(四) 火上の氷

大盡臥戸に入る頃酒醒際にて、水二三盃に胸清き、匪氣は洗ふごとく滅れば、才藏の姿心に浮びて此儘

に捨難く、幾度の反側に思案しかへて、手に入る工夫せしに、屈めし足を思はず踏伸し、扱あるわ。之を山瀬に聞かせなば、それぞ上策と雀躍すべき。とかく韓信は彼の事、此謀を授けて働かさば、萬に一つも仕損じはあるまじ、と獨り悦に入りて、安心からやうく匪氣さし、枕頭に喚ぶ聲に驚されて、何ぞと半眼に四邊を胸せば、窓掛の紅色に日影麗々と、軒なる音呼の羽搏手に取るごとく、何時と大喚すれば、必りて、十一時でござりまする。唯今山瀬様が見えられました。お風呂が沸きましたれば直にお召し遊ばしませし。

さて一風呂浴びて表座敷に出づれば、山瀬は睡さうにもなき顔色にて、今朝二件許用足して参りたりとは、有難き心懸に對して、言ふも可愧しき次第なれど、昨夜は寝ずに妙計を案じたり。就いては又一働頼まねばならぬといへば、山瀬は何々と高笑して、二度有る事は三度有る例。また失敗でござるかな。昨夜は随分死物狂になりて力めたる苦戦の模様。御笑草までに御聽き下されたし。なるほど其を肴に一杯と、必を呼びて用意申付くれれば、大盡日頃の大短氣、何事も速くならては御不機嫌に懲りたる家内が技倆の凄まじ、松江の鱧魚を鉢から釣上げたほどと、始めての客は誰も驚入る酒肴の支度、珍膳五十人前も咄嗟の中

此家一の名物なりとや。美しき姦二人膳を運びて、一人は御酌に控へ、一人は通ひを勤めぬ。用あらば呼ぶべしと大盡人拂ひして、扱山瀬さうであつた。

聴きて興あるやう嘘も少々は加味して、下坐敷の薄間うすくまに才子佳人を説くの條を逐一辯ずれば、大盡膝の進むを覺えず。そんな事を知りせば立聽してくれたものと切に無念がりて、其につけても才藏といふ女は謂はうやうなき怪物哉。我從來千百度も女に出會うて、曾て不覺を取りとといふ事無し。これ我威光か、金力か知らねど、兎に角目指せし女の自由にならざるは、主ある女か、人の娘か、是は然もあるべき理なれども、賣物ならば男嫌ひであれ、振自慢ふるじまんであれ、葛城餘五郎と名乗りかけてぐつと睨めば、ばたりくと將某しやう某倒しにして、花柳の街を行くこと、鐵の草鞋穿きて草原を驅廻るがごとし。いかな粹でも、通でも、濡事師ぬれごとしでも、我と聞く時は、黄金無垢の業平が來たわ、堪らぬ、と帶引緊めて遁ぐるほどの男なるに、小敵せうてきと侮りて此度の不覺。これ一代の名折なり。

されども此強がりば表向にて、内實あれば心に稱へる女は、今に一人もあらず。一昨年京都めぐりせしに、彼地はいかさま美婦多く、いづれを見ても絹漉の肌、鴨河上水の寒晒、玉の如しとは蓋し彼等をいふなるべし。その藝子といふ奴、美の美天人の妹分かと想ふほどのにても、金次第にて踏んでも踢ても可い事に定りたれば、餘り正札過ぎては、勤工場の買物同然にて趣無く、かくては天人でも菩薩でも心意氣が知れて、移香うつりかもどうやら錢の臭がするやうにて、嬉しからぬと念ひし所爲か、どれ見ても護謨製の女人形、腹を押せばびいと啼くだけの器械にて、色が白うて目鼻立ばらりとして、姿と聲が優しいだけの沙汰にて、外に何もあるにはあらず。

其とは事異りて江戸の女の好き。しげく顔を視れば、面道具の揃うて、給に畫きたしと思ふはなく、目の好きは鼻ひしやげ、眉が好ければ口狀くちじやうしをらしからず。干濁ひびたの髮際あれば亂杭らんかうの齒行あり。第一色の黒さは我見ても氣の毒なるに、肌理あめの疎あたらきことは袖の皮を張りたるごとく、鼻翼はなの邊あたりに面飽めんあの跡あとに埋れて黒きなど、故障こぼれあらざる顔とてはなけれど、出額でがくは出額にて可愛く、垂眼めだれは垂眼なりに愛嬌ありて、萬更捨てたものゝあらざるは、心意氣に名物の旨い處があればなり。

かの才藏といふ奴、氣合に一筋ひとよしありて容顔かほだちも凡ならず。見るほどの男の思ひ惜むべき骨格こつがら。柳橋の藝者でござる、と日本中引廻しても鼻の曲らぬ女なり。かほどの珍品を名も知れぬ瘦男やせをとこの玩弄あそびに爲せ置かむは、言

三人妻

効無しの限りといふべし。かくいふ餘五郎が土蔵には、世界に又と無き寶の數は在りながら、此品一箇欲けて寢覺の心懸りとなりては、不自由せぬ爲の此富も所爲無き事なり、と管を逆手に膳を拍ちて、執心面色に見はれたり。

山瀬もこれどの奮み方に驚きて、さほどの御志ならば、高の知れたる猫一匹如何にもなるべし。まづ其妙計を御聞かせあれと言へば、大盃聲を潜め、頗る反問苦肉の謀なるが、足下の隠妓に難助と云ふものあるよし、と眞顔に出られて山瀬は頭を掻き、隠妓といふにはあらねど、ちとばかり。些ばかりにては計大に妙ならず。遠慮なくいはれよ。其女に大事を頼みて氣遣あらざるほどの御中か、と念をおされて挨拶に當惑せしが、まづ此方の考量にては、いかなる大事か知らねど、大方の事は引請け申すべきかと答ふれば、なほ種々に念を推して、山瀬が言葉の中に、腕と深き中に相違なき處を見届けたる上にて、詭計の段々を語り出せば、一々聞きてなるほどの頷き、或ひは首尾好く参るか知らねど、格別新手にもあらざれば、十全の上策とは申難し。相手は金氣無き奴なれば、此方を片附むに何の事はなかるべきも、本尊の女が那の代物ゆゑ、と類に首を捻れど、大體は通れ爲濟まし顔にて、才藏いかなる情知といへども、一方には男に送かれ、一方には金と義

理とに逼られて、厚き氷も火上に解くべし。古來より此手にて行かぬ女なしと、獨断にして勇立ち、手函の中より軍用金攫出して、當座の入費、之れ持つて早く。

大盃の計どうやら妙ならず思へど、いかに成行か我も面白さに、然らばと請込みて直様車を飛し、柳橋なる難助方に来て見れば、昨夜の徹夜、酒と疲勞に慮まれ、朝湯に入りければ身は綿のごとくなりて、小坐敷に火燵して正體なく寝入りたるを、旦那様の御入來と母親の驅込みて、抱起せども現にて又手枕に仆るゝを、持餘して此始末といへば、構ふなくと山瀬は其座敷に入りて、やうく目を覺ますれば、夢ではないか、珍しやと、嬉々手水つかひに行きしが、頓て着更へて入來り、火燵に蹲まる男の帽子を引取り、半座を分けたるやうに寄添ひて、此頃の遠々しさを怨むかくれば、まづ此方から言ひたき事あり、と葛城が才藏に執心の次第を語りて、此念は何ありとも尋らさではおかじとの決心にて、此方結ぶの神に頼まれたるが、爰に一つの詭計ありて、其には其方を味方に附けたさに來れる男なり。

詭計といふは究竟菊住との中を裂きて、金と義理との板挿みにせむとの殺生なるが、かの中を裂かむは容易のことにあらずれど、一人腕ある妓を見立て、萬事を明かして宜しく之に含め、やいのくで菊住へ持懸け

三人妻

それから大熱々に上せて見せて、くはへやうじ 柳楊枝で酔あかい顔して暮らせるほど男に仕送らせる寸方。此金は萬城の手許より仕拂ふべし。

菊住今も才藏の情には預かれど、あの氣性の女なれば金には縁無く、不自由勝は知れたる事なり。其處に直入り、陽に實意を見せて金銭で隙なく裏打せば、男心の動き易く、鼻に着きたる才藏を捨て、新出來の重寶なるに乗換ふる氣になるは目に見えたり。其時才藏の事なれば、心に男の不實を恨むとも、女々敷事はよも爲じ。面當の意地を張りて、男めに草履取らせて此仕返せむ事を念ふべし。所を大盡横鎗に仕留めむ手筈甘く行けばお慰みなり。扱此狂言の立お山には、菊住の色になる奴なるが、相應の心當りは無いかと問はれて、難助は進まぬ顔色。あるには詠向あつらへむきの女あれど、此狂言は殺生過せつしやうたれば、外に最少し手柔かなる思附てやばらのありさうなもの。いふは可笑けれど、何處の誰が貴方と何屋にて睡ましさうに話して居たなどと聞く時は、しゃくりと知りながら胸むね穩やすからず、顔見ると悔しくなるは惚れた中の情なるを、いかに御主人の頼なればとて、其様な酷たらしい事はせぬものでござんす。別けて佛性ほとけしやうのこの難助、話を聞いたばかりでも癪しゃくが起る。今にも才藏さいざう様に會うて此事を注進して、喜ぶ顔が見たいといへば、山瀬は冷笑あはぢらひ、言ふなく。于

まである身の山瀬を墜落たらくして、我女房には罪とも殺生とも思はぬか。これしきの事が酷たらしうては、鱈汁も食へぬ理はす。随分牛も豚も参る口から、しをらしい言を承まはるものかな。其方も聞留きりかじりに、錢に驚きて、氣味の悪い蟲が二百文ばかりと笑ひ草になる玉なり。一度や二度は人の男をも横取して、腕があるといはれし覺るの身に、これほどの事は朝飯前あさめしと見て取つての囁ささなり。首尾好くゆけば褒美の品でも現物でも望み次第。且は我の手柄てがらにもなる事なれば、義理と思つてやつてくれ、と洒落らしからぬ様子に女もやうく納得なつとくして、肝心の立者に詭向かんじんたてものとは誰と聞けば、此地に人の知れる升屋ますやの小こめ、菊住には疾はやからホの字、此女ならば身み纏まとを切りても働はたらくべし。

(五) 心配筋

萬城大盡は何も知らぬ顔にて才藏を揚詰たかづに、あつさりあつさりと飲みて可厭いひな眼色もせず。山瀬に口説かせし事は一時の酒興と見せければ、かうした座敷の勤めよく、第一爲になる客筋と才藏も疎おろそならず遇なせば、いよいよ御意に召して御側を離さず、願はざる品々まで纏物かじけものの多おほく、今晚はと十年來何萬人といふ客に會ひしに、これほどの旦那はなかりけり。

三人妻

但憂きことは、此座敷に囚はれの身は、菊住に逢瀬の儘ならず、二つ好き事は無きもの、と酒の中にも思出
 して、逢はむとならば何時でも首尾はなるべき自墮落の家業でありながら、苦界とは此處ぞ、と胸の有耶無
 耶は絶えざるに、一夜大盡話の中に、不圖熱海の湯治の事を言出して、此頃の閒を幸ひに四五日遊びに、明
 日から行て見る氣は無いかとあるに、湯治場は轉ばぬ藝者の伴れられ所、うるさき事を言はれて可厭なる思
 して、御機嫌を損ふが極と見えてあれど、並ならぬ蟲負の旦那とおもへば、これほどの樂さは無いやうに勇
 みて、是非にお供を願へば、大盡主極の満足。翌朝供二人に才藏を加へ、四人の同勢新橋の停車場に入
 れば、見る物無さに倦飽ゆる待合の人々、これはと目の覺めたる心地して、瞬きもせず眺め入りけるとよ。
 此湯治二週間餘、其間に計略圖に中りて、小メはもとが菊住に岡惚の下地あれば、頼まれてする事ながら頼
 みてもしてみなき役目、と先此方から熱くなりて謂ふにいはれぬ仕向に、菊住も才藏は才藏として小メは小
 メ。彼も飽いたではなければ此も捨て難く、傳聞く昔唐琴屋に丹次郎といふものありけり、と願を撫でよ之
 をさへ悦びけるに、氣味悪きほど仕送らるる金員は、我月給の二倍と計算して見れば、さうやら女で食へる
 氣になり、此帯まで買うてくれた小メを龜末にしては、冥利に堪ふことを畏れて大事がるほど、女は上の

三人妻

空になりて世間を構はぬ大浮れ。誰るが面白しと菊住がどうのかうのと、座敷にて客が噂すれば、もう逢ひ
 たくて耐らず、卒に腹痛み出して歸るなどの悪業高じて、今は家業も餘所に菊住との陰遊びにのみ念入り、
 あれほどの贅澤して、よくも兵糧の續く事を人の怪みけり。
 小メの分別には、一月にても二月にても才藏が彼の人の所有になるまでは、弗函に集れたる氣の高を括りて、
 此方から思入れ夢中になりて男の心を蕩かし、才藏との中を遠ざくるほど手柄になる事と思へば、少時の間
 でも好いた男と好きな真似して遊ぶだけが徳、と度胸を据ゑ、浮氣するに金主ある事一世一代の法樂と、夜
 も晝もなくして思ふままに浮るゝ面白さ。かういふ事ならば明日が日死なうとも遺憾なし、と互ひに打込み
 て、どうもかうも成らぬ始末に、誰も手も着けかねて、沖の舟火事を見るやうに、あれよくと呆れて見物
 する人の噂となりて、今にも才藏の歸來らば、三日續きの新聞種、珍事持上るは定なれど、那惻いものゝ才
 藏ならば、思ひも寄らぬ手を出して二人は泡を噴くべし。女も男も餘りの義理知らず、不便なは何も知らぬ
 才藏、といづれも此戀を心に憎めり。
 才藏と大中善の金太郎といふ女見るに見兼ねて、この概略を讀り書の文して熱海へ知らせければ、讀むに

三人妻

一々虚のごとく、飛んでも歸りたさの胸躍り、卒に母の病氣と申立て、獨り先に立たむことを願へば、明日は俱にとあるに其夜は寐ずに明けて、一日がりの道中、身を撈らるゝほどの可悶さに、氣はいらくと浮かぬ顔を、大盡横目に見遣りて、その事と心可笑しき外面を裝りて、あの達者なる母親の急病とは、いかさま頼み難きは老の身なり。随分油断なく看病せよ。二三日中には我も見舞に行かむ、と迷惑がる言をわざといへば、才藏は身を横に胸をおさへて、瘴氣と物いはず。やうく夜に入りて新橋に着きたる時の嬉しさを。大盡を振放して心も空に車を走らせ、内へは寄らず金太郎の門に入れば、今お歸りか。待兼ねたく、と驅出づる金太郎は、座敷衣脱ぎかけて帯せぬ袴を掴み、足首に扱帯を懸けて引きすりながら、才藏の手を執りて奥の間に伴ひ、様子は文にて知らせました通り、何ともかとも謂ふやうなき始末。腹が立つてくんと胸を掌れば、才藏は頭巾に亂れし鬢の毛の頬にかゝるを拂ひて、夢やら何やら眞とは今に思はれぬ文の様子。餘りの事に吃驚して氣が脱けたやうなといへば、虚も實も要らぬ、此處でくどくど話さうより確實な所を見せう、と支度するを何處へといへば、何も言はずにと獨合點して慌忙しく連出し「磯馴」の奥に今夜もお定例の對坐、と聞くに胸轟き、足早に小路二つばかり過ぎて、地理屈覚なる裏町の新道に、九尺の千本格子、

三人妻

磨硝子の軒燈籠の御待合に入りて、客を待つものと帳場に挨拶して奥を望めば、一間は塞りたりといふこそ例物の穴、と其座敷を一間置きたる鄰房を見立て、酒は餘所に耳引立てる様子を窺へば、話聲幽かに物の音無く、忍びの首尾に紛れなき氣勢。誰とも知るよしあらねば、那かと才藏の叫くを、金太郎は目授に應へて、前を庭なる障子を細目に啓れば、此處と續きの廊下を折廻したる行當りの軒に、數竿の竹の蔭になりて、微闇き鐵燈籠の懸かれるは手水場なり。出て來らばと目を放たで待ちけるに、繫糸織の羽織着たる男、此方に氣を置きつゝ野鼠々々と現はれて行くを透し見れば、帯から小袖まで我贈りしとは異なる風俗。これ皆小メが仕着を悦びて、我見よがしに着飾れる菊住なり。滌ぎし手を拭ひ、空を仰ぎて、帯の間より取出でたる時計は、燈籠の火影に耀めく金皮に、才藏も驚きて、小メといふ女が然ほどの内證にてはあらざる理。さりとて菊住があればその品を持つべき力にあらず。左に右小メが旦那筋から奪取りたる物を物したるなどにやあらむ。今更飽かれた義理にはあるまじき我を棄て、慾に目が眩れ、小メに見換へたる腹の陋さ。見下げ果てた男め、と此から其面へ唾吐懸けたさ心を鎮め、神妙にしてなほ窺へば、男と入替りに、何やら言捨てて出でた

三人妻

るは、紛れも無き升屋の小女なり。男よりは一倍酔うて亂したる態度。裾はほら〜と腰帯緩みて、あふなき足元長襦袢を踏へがちに、椽の曲角なる段を迂りて、淺まじくも小氣味よき轉倒さま。見るに可笑さき。あふなきけぬゆる負ぶ〜と舌怠い聲を出せば、此物音に菊住の走出で、抱起すき、見る人のあらじとや、女は甘えて、行男は蛙のごとく潰れ、片手は柱に縋りつゝ、せり出しのやうに持上げ、ひよろ〜と歩めど風にも介るべき腰状。腹も立つやら愛相も盡まるやら、此馬鹿もの、人に愧ぢぬか、と障子をどさ〜と才藏の打鳴せば、此音に驚きて、通入らむと、慌て〜躓けば、椽も抜けむばかりに轟かして、澤庵壓に倒れてげり。

(六) 天の邪鬼

菊住の小女に乗換へたるは慾に極れり。彼女と我とを較ぶるに數段の相違はあるものを。當時柳橋といへば藝者は才藏といふ人こそあれ、小女といふものはあらじ。品の高下を一々いうて見れば、容色は淺雲間の百美人に我は二番の女、藝にかけては禪りながら宇治の名取、これだけにても座敷は勤まるべき腕を持てるに、彼は清元の地といへ〜と、搔廻してお茶を濁し、得手は大方甚句なるべし。第一座持拙くして大客にうろ

三人妻

つぎ、小勢に照れ、但空騒に騒ぐを藝にして其外を知らず。調子外れて、品格といふものなき、旅藝者の骨格と誰やらの穿たれき。とかういふにも及ばず、其位は客種を見て知るゝぞかし。卑しきいひ分なれど、我は十年來曾て土器色の紅裏に肌膚れし事無く、小紋の置直しを引張りしこと無く、新しく染むる時は薄色にして、後を濃くして、二度の勤の顔ねを身に着けしこともあらず。此等は圓助應來の雪見藝者の苦し紛れの内證なり。些細の事なれど、雀の羽色は鶯に似るべくもあらず、鷹は徳を啄まざる理にして、彼等と一様にはならぬ柳屋の才藏様は、心から外親まで自然と柳橋藝妓に出來た正銘物。かかる御方を色に持つこそ、男と生れたるものゝ此上無き冥加と三拜して、寝るにも此方へ足を向けず、我尊像を掛地にして、朝夕御酒に玉千酒、供物には鱒鱒の清焼を供へ、逢はぬ日も在ますがごとく事ふべきに、本戀といふ事知らぬ男め、我を日本に幾人も散亂にある女か何ぞのやうに想ひ、鯛くひつけたる口に鰻の飯の摘喰して旨がる天の邪鬼、冥利を知らぬ奴に才藏さまの難有味を知らせて遣るべし。鴈橋に手足附けたやうなものに未練を残し、取るに足らざる幼藝者を對手にして、外に男でも無いやうに騒ぎ立つるは、大人氣無きのみか、恥辱の上塗。あれしきの男に棄てられ、あれしきの女に奪られたと念へば腹も立て

三人妻

ど、牛は牛侶、似合しき取組なり。あの男一匹懸に渴えたる乞食女に與れた念はば、善功徳したりと心清しく、更に遺恨も未練も殘らず。但悔しきは、藝者の中の藝者と人はいはるゝ才藏が鑑違ひして、あのやうなる無能漢に熱せて、よしなき情立て、濫槽の下の骨を見よと突放されしを、思ふほどにも無かりし女、と世間の胡笑にならむは、鉛の熱湯飲まざるゝより一倍の辛さ。其とても今となりて他を恨むべきにあらず、身の不束ゆると諦むる外はなけれど、衆に負ける嫌ひの氣性には、我爲るほどの事は皆是と念ふ意地に、假にも不束と我を制むる事の無念さ。今までの情を捨て、義理を缺き、我を凝にしたる菊住の返すゝも情さは、骨が舍利になるまでも思ひ知らせでは措かじ。

と思ひ定めて、金太郎の手前焦慮を見せて肚を洞察されむは淺まし、と隠せど有緊苛立つを酒に紛らじ、彼外にまだ餘所行の情夫が二個ある、と平氣の顔で洒落のめせば、金太郎は獨り誇洋がりて、あれば不斷の色か知らねど、どうする了簡か、捨て置いては顔が立つまじ。外の座敷に人の無きこそ幸ひなれ、二人して彼房へ飛込み、小べの髻を取りて引まはし、泣顔を撲りつけて、詮證文の代りには、地黒を隠す厚化粧の頬に、こいつ助平と筆太に記し、三日が間其面にて座敷へ出させるやうに屹と談じ、男はこれから家へ件還り

三人妻

散々音を推りて一間へ押籠め、三日の間斷食させてから、七日が間箱屋につかうて放してやりたし。畜生男めと切齒をするを、才藏は徐かに制して、畜生と想うたら腹の立つことはあるまじ。其様な働ない事して、いよく衆に喧はれな。外に思はくもあれば、何も知らぬ顔して胸を塗り、此場は温しく濟して、近い内になるほど言はるゝ事して見せう。十郎の毒辭ならねど、じつと辛抱しやいのと立花屋の假聲。金太郎もこの暢氣に呆れて力を落し、いかなる仕返しと思はくか知らねど、餘りといへば張合なきお前の膽効なさ。長年兄弟同様のお前の恥は私の耻。お前が構はねどならば強つてと言はねばに、私には私だけの一存あれば、必ず構うて下さるな、と立たむとする袂を捉へ、顔を背けて涙を飲み、關係なき他人でさへ、それほど思ふものを、虫の無きにもあらぬ我身が無念でなからうか。お前の腹の癒ゆるほどの仕返しは、吃として見せうほどに、此場は私に任せて、これから何處ぞへ行て一口、飲んだらば氣も霽れやう。

(七) 濡事師

才藏になほ心残れるや測り難けれども、十が十まで菊住は手に入れたり、と小べより難助への報告を、山瀬が取次ぎて大盡まで言上すれば、妙くも爲たりとて、この褒美には寶石入の純金の指環を小べへ遣はされ、

三人妻

此後こそ容易ならざる危所にして、才藏といふ強敵を敵手に持てば、聊かも油断はなるべからず、必ず噴るま
いぞの聲がまりに、小メは双手に鼻脂を引きて、「磯馴」の奥に才藏が此方の始終を見たりと知るほど、花
が咲きかけたと勇み立ち、いつかは出會ふ所が曠の勝負、目に物見せうと心待ちに待ちかけて、先方の女に
蹴らせ、枝ある角を出させむには、菊住を片時も我側を離さざるが何よりと、はや喧嘩買ふ氣になりて、此
時を大事、と出所ある金錢に糸目を付けず、散るまゝに散らして、色と慾との二重繩に、男の體をぐるぐ
巻にすれば、才藏の歸りたりと聞くに、菊住も素が飽きて棄てたる譯ならねば、逢ひたさも逢ひたせ、かの
待合にて見られし浮氣から、格氣の口説もして見たさに、隙を候ひ脱出して、才藏の格子に聲も懸けたしとは
思へど、小メの切なる心にも絆され、且は常浸りに引着けられて、身は網中の魚とは嬉しくもあり、心は二
つ身は一つ、と屈托顔を小メに咎められ、それほど才藏様が悪しくば、三十分ばかり此體を貸して進ませます
れば、逢うて積る話して、私の悪口を多度いうてござんせ。さりとて一人手放して遣りはせぬ。此方の帯に
私の扱帯を結着け、彼所の格子の外から持つて居て、攫はれぬやうに番をする。其でも可くば行てござんせ。
さあ〜と帯際取つて小突かれて、手暴な事をしましで、我一人の體ではないものを、と事古りなる言草は、

三人妻

柔かき手でとんと一ツ撲かれたさの下地。色男に成りすまして、さうもならぬと女の膝を枕に、夕飯の酒の酔
にうと〜となれば、小メは枕を爲替へさせ、小搔巻打懸けて様子を見ふに、舩の聲微かに聞えて揺れども覺
めず。此間に一風呂、と番は母親に頼みて横町の伊香保へ走る。
菊住はふと目覺めて四邊を見れば、次の間には下女が坐睡の舩、母親は何地へ行きけむ見えざるに、小メ
さへ在らざるは折好し。竊と起上りて衣類は其儘に、有合ふ襟引懸け、障子襖の開閉靜に、忍足して戸口
まで出でたるに、我下駄の見えざれば、小メの吾妻下駄を突懸け、格子を啓る音に、奥より母親驅來れば、
飛ぶがごとく窺れて才藏方へ闇を辿り行けば、前面より來る提灯に覺えの紋所、やう〜近づくと火影に見れ
ば、才藏が座敷への途なり。聲を懸けむとせしが、おのづから心怯れて息を呑めば、女は心着かで箱屋と談
しつゝ行くに摩違ひながら、我見よがしに女の顔を見込めば、才藏も菊住よと吃と一目見しのみにて、其儘
背後向けて行くを、箱屋が其と識りて耳語せし體なりしが、又とは振向きもせず、前のごとく談し行く。
菊住は愕然と後影を見送りて呆れたる口狀。一目顔を見るならば、菊住様と飛着き、座敷は斷りて直さま
へこまれの道行、と想ひの外とも其の又外とも、謂はうやうなき大不出來に、才藏にはあらざりしか、我は

三人妻

又菊住にてはあらざるか。才藏と菊住との中は、かういふ約束ではない理なるに、今の様子は、小メに心通はするを腹立つの餘り、一鐵の氣性より我を見限りたるか。それこそ一大事、ことが思案と拱手して、四辻をぶらりと往きつ還りつ、なるほど一旦は腹も立つべき。擗喰の浮氣は、重々我に罪あるれど、かゝる社會には幾多もあり内の事とて、粹は寛大に見て、さまでに何を念ふべき。一時の出来心にして、胸づくしの一つも捉れば、其にてせらりと事の濟むべきに、合點の行かぬ仕打をしたものかな。讀めたわ。才藏ほどの女なれば、自家を高くし、假令餘所にどれほどの浮氣するとも、石と玉との差別はおのづから辨きて、遂には我に復ると見込み、わざと難面く爲かくる中に敵の心を捻返へす、これぞ色道四十八手に在りと聞く、風折といふ奥の手よな。面白しく。

小メは湯に入れども心急かれて、常は二人前の湯錢出して、留桶の湯の二十四五杯も用ひ、七道具を取揚げ、手足の指を二十分に琢く念入は今宵の事にあらず。鳥の行水ほどにぞつと濟まして、足袋穿く間も可闕く、歸途に迎への婢に出會へば、菊住様が何方へかお出掛けになりました、と聞くよりはッ、と一散に驅出し、石に蹴り小指を傷めて、其には換へられぬ大事と、趁跛引さく還れば、母親はうろく娘を見るに

面目なき顔色。小メは眼色を變へて呼吸暴かに、菊住様が出掛けたとは、誰が許して、と頭聲になりて覗めつければ、母親は火鉢の側に寝みて、誰も許しはせねど、何時の間やらと皆まで言はせず。其爲の番しながら又持病の坐睡か。あれほど堅く頼みした、さりとては言効無い、と足摩して無念がる氣色の尋常ならず可憐さに、母親は茶棚の陰に首を差入れ、心には仕妙法と念じても、なほ恐怖との息まざるに、お宗旨の南無妙法蓮華經を念ずる間に、小メは手拭包を紙門に打着け、簞笥より頭巾取出し、恐入りたる母親を尻目にかけて、倉皇と出でて行く。

先方が其手ならば、心得たり、色男の賢なるはこの柳流しに懸けてくれむ。これから才藏の留守へ押入り、例の棚の上に陣取りて歸來るを待ち、おやと謂はせる、こいつ妙、と獨り領きつと下向になりて行けば、曲角の出遇がしらに、此方はと女の聲して袂を取られぬ。

誰かと思れば、追手に來たる小メなり。百年目一飛んだ處で捕まりの一言なれと思へど、ぬけくとして、どうしたといへば、どうしたとは此方からいふ詞。此案に夜行は體の害、近頃は悪い感胃が行るぞいな、

三人妻

三人妻

と男の手をむづと捉りて、四の五のいばせす引きずり行く一念の力の強さ。脈が止りて指が痺れる。免せ、
 放せ、と色男の苦しむを物の數ともせず、瘦腕を左の小腋に引抱き、逃げむ氣色も見えたらば、囁きても
 放すまじき身構へに、男も詮無く牽れゆく状の見苦しさ。夜を幸ひと頭掻き、元來し道を返せば、道ふ
 士女は皆立止りて見送くるに閉口し、必ず逃げはせぬほどに此を放して、手を繋ぐにて堪忍してくれと只管
 頼めば、物はいはで脈所をぐつと締められ、其も御開居は無いと御意か、あゝ是非も無い。見た人
 は御覽あれ。抑是は柳橋での濡事師、菊住といふは某事と、曝し物になりて歸れば、出し抜きし母親は
 傲然として、婢までが取合はぬ家内中の不興にまじくとして、手近に睡れる猫の頭を撫づれば、畜生まで
 が嫌ひて産所へ立つ。

寒い〜と奥の間へ飛込めば、小メは格子に鎖して入来り、火の無き火燵を婢に罵り、わざと菊住に背後向
 けて、續けのみの煙草四五服、壁に煙の墨畫の龍を吐懸けて物思はしき顔を、菊住は手枕に轉けて横から瞻
 れば、眞白き額額の邊に柳癩筋うね〜と地圖の河の流るゝに、御心解かむと起きかへりて、一服くれぬ
 かといへば、見向きもせず、持つたる煙管を菊住の目の前へ投出しぬ。大人しく其を拾ひて、吸付けてもらひ

たいと、小メの胸前へ差付くれば、それは人違ひ、と後は鼻が物言ふフ、ン。
 (八) いつも端麗

總じて婦女は物に動じ易く、喜怒哀樂の情念にして、箸が轉けても笑へば、髪が整れても泣くに出来て、男
 も及ばぬほど剛い所ある代りは、また弱い所ありて、其急所を行けば何の手も無く猿の一打、ころりと參る
 と常々菊住の廣言。それは才藏など口説して經驗のあるより、女は誰もさういふものと侮りたるが憎
 し。此小メは其手で行かぬ氣性もの、意地のある處を見せて其口を窘ませむ、と様々に仕懸けて來るを皆撥
 付けて、此通りと力んで見れど少しも臆せず。成程これこそ白金と人にいはると才藏を溶したる腕の好き、
 と我を張りし小メもへたく〜となりて、結極はさうやら此方から詰びてかゝらねばならぬやうな巧い所爲に、
 ぼんと遣られて中直りの小酒盛。夜更けぬれば好みの肴核も無し、蠅帳の小蓋物二つ三つ取出し、炙海苔
 鷄子に事を足して、雜物を火燵の上に推列べ、嬉しがらせ、戲言、怨言の相擲して、いつよりも酒の旨さ
 に飲過ぎ、喋過ぎて朝寢の種とはなりぬ。

火の出るほど憤りても、水を注ぐればかくの通り、と菊住は此手際に小メの腹を議りて、餘熱の冷むるにも

三人妻

三人妻

及ばず、隙を見次第またも才藏へ押懸け、御釋迦が圓子捏ねたる此手にて、彼をも雖無く丸め、而るが上に、如何ともして双方を談じ、以後は此男を共和醫夫となして、送ひに妬まず怨まず、君子のごとく譲りあひて、途中に夜が明けたりといへる古への貞女に愧ぢざる二人を、此男め果報にも兩の手に桃と櫻や梅見にも雪見舟にも鼎足の倍樂。二人の髪毛夢中に巻上り、諸預と鯉鱈のごとくなりて戯るべし。あら樂しきの浮世やな、と事業に成就ほどの悦に入りて、折あれかしと待てども、其後は用心殿しく、真に幽囚の身に異らず。極樂に牢もあらば怨やらむと想はれて、人の羨むほどにもなくて其身に切なかりき。

敷ふれば明後日にて四週間、役所へ病氣届の期限切るとなり、此上の追願は、醫者と長官の印なくては協はじと詐れば、小へは心元なく念へど、此事の虚にあらざれば、出るなとは言はねど好まじからず。然りとて代人にて事の辨すべしにあらねば、いよく明日は出懸けるといふ前夜、睡いといふを寝かさず、襦袢を正し危座して煙管を笏に把り、先度の手際を念へば、いかほど確をいうても明日の危さ、此身は泥船に乗せらるる理なるべし。才藏様に去練の段か、心の大在りは、誰が何といはうと此目で睨んで識つてゐる、と半分は廻氣から放す空銃なれど、現は外れず其に相違なければ、菊住の耳には皮厚のいるほど聴かされる、いつも

三人妻

の談義と半睡に聞流し、之で濟むかとおもへば、本文は其からにて、先私がこれほどまでに實を端すを、何とも思うてはくれぬといふ事を口説き、中座には此間の脱出して逢ひに行きし事に就きて、其夜言遣せし所見及び愚痴を陳述し、明日行くは可けれども、役所の用は假托にて、内證は例の處へではあるまいか、それが苦勞でくならぬ。知る通の病身なれば、かならずく氣を揉まして下さるな。いつその事死んで執着いて彼世へ連行き、此苦勞をなくなしたい、と真心の溢れてや、涙は襦袢の袖に初時雨ほどの濡。わつと泣かれては興が覺める、これ位の所が心細げに哀が見えて可笑い、と泣く心は酌まず、狂言に見ておらることも知らず、胸に在るほどのこと大方は言盡して、菊住様忘れて下さるなど詞切れば、十分膽に徹へてどうも耐らぬ顔色にて、一々尤なる言分。武士ならば金打、誓紙書く世なら血判して、此胸を見する處なれど、見せやうにも見せられぬ胸の中、誠を明す便は語なれど、何をいうても我言は皆疑はるゝ今なれば、悶ふるほどに思うても詮無い話。唯どうするか目を開きて能く我仕打を見るべし。一度の氣紛に脱出したとて、其を根に持ち、毎日の愚痴責は、仕置が重過ぎていかい迷惑。何事もおほせの通り仕つれば、向後、はちと拷問をゆるめられ、寛大の御沙汰に預らば雖有き仕合といへば、屹と此後を悔め、と膝にふつくり紫の入墨、

齒痕を戀の極印と近松は洒落たりけり。

白縮緬の頸巻から縞羅紗の外套まで、ぞつくり小メ仕着の身の皮を飾りて、今日は長官の邸へと、巧く詐りて家を出たれど、附けらるゝ車夫は小メが恩顧の六といふ奴、この犬に嗅がれては何事も露顯すべし。さりて金幣にては逆も行くまじければ、途にて還すは拙し、役所まで挽かせて、馬を捲く手の裏門から直進を吃はせむ、と其通り仕了せて柳橋へ取つて回し、才藏の格子先に佇めば、半玉の頼子が木綿布子のどろつきたるに寝衣帯して、白粉の疵に残れる頸首を突出し、袖の下に何やら忍ばせて出来にけるが、菊住を見るより、呀といひ捨てゝ奥へ驅入る。之を機會に格子を入れれば、光といふ婢走出で、今日は少々加減悪ければ、お目に懸かることはお断り申します、と此間まで前垂の一つも遣れば、ちやほや吐せし奴が不知不識しき詞を、菊住は鼻頭に遇ひて、病氣と聞きたればわざと見舞に來れるものを、他人がましき言いふな、と推して行かむとすれば立塞がり、お通し申すなどは主人からの吩咐。今日はお歸り下さいと空嘯く。此奴小才など菊住は怫然として、己れの知つた事ではない、と拂ひ退けて通らむとすれば、成りませぬと袂を捉つて引戻し、お歸りなさいと菊住の胸を撞けば、此匹婦と頼楯一つ撲られて、這畜生、と昔取りける

鉄柄の田舎力に突飛ばせば、菊住はよろくと土間に墜され、おのれと起上らむとするを、はたと障子を立切り、中より無圖と仰へて、歸れくと喚かれ、此上はと菊住も了簡して立出でしが、さりとは餘りなる才藏の爲方、と隣の露地を入りて柳屋の裏窓の下に立寄れば、あのやうに手暴な事はせぬもの、と才藏の聲聞ゆるは、流石に心には我を可愛と思ふなるべし。窓の障子をほとくと指頭に音づれ、雖面き人の心かな。一目は逢ひたまへ、話したき事あるに、と小聲に言入れば、家内は遽に鎮るなりけり。

菊住は切りに憤れて、答のなきは不得心か。逢うてやると唯一言いうてくれ。これくと忙しく障子を敲けば、中より才藏の聲にて、何處のお方か知れねど、用がござんすなら表からお出なされまし。此處は裏口、豆腐買ふ窓でござんす。逢ひたいとおほせらるゝ貴方は、今表に見えられたお方ならば、お出は御無用に願ひます。お客様ならば茶屋からでも待合からでも、口を懸けてお招き下されまし。此處は藝者の家にて、高貴のお方の御足を入れさせらるゝやうな處ではござりませぬ。それとも切て私に、逢ひたいと思召ならば、茶屋から立派にお招き下されまし。お座敷とならば藝者は呼ばれてお酌を致しまするが商賣なれば、お客様は乞食でも穢多でも、人非人でも義理知らずでも、薄情ものでも、畜生でも、其には厭ひなくお對手を致しま

三人妻

しよ。お話をやらがあるならば、何なりとも承まはりましたよ。人の裏口からこそ〜と物言ふは、錢貫か、紙屑買か、空瓶買か。そんな真似をなされは御人體に拘はる事。但しはお門違ひか、升屋の小々様のお宅ならば、此から東へ三つ先の横町、此は柳屋の才藏といふ未練のない藝者の住居。用無き門にうろくして巡査様に咎められぬ内、早く此處をお出でなされまし、と散々に辱しめられ、向ふ近き長屋の人の覗くに耐りかね、足早に表に出で、腹立紛れと言ひながら、此雜言男の辛抱なるべきにあらず。第一我を錢貫か紙屑買かと言過ぎたり、乞食でも様多でもとは何ぞ。

座敷ならば逢ふといふからは、例のから口を掛け、存分に言草いうて此仕返をせでは、今宵が寝られぬ、腹が立つ、と馴染の待合に飛入れば、女房罷出で、此頃のきついお見限りは、世界を變へて新出来と菓籠の御愉快ゆゑとかや。餘り然うなされたものでもござりますませう。旦那のやうに女縁とやらのあらつしつやる殿方は、彼方からも此方からもやいの〜で、愚痴や怨言に慣れまつて、おのづと萬に心強く、私どものやうなるの〜怨言などは、蠅が甜めたほどにも思召すまい、其が善いのでござりますのぞ。

晴しき女房の喃々を懐懐がりて、「左も右も」に後を抑へ、我と言はずに才藏を呼べとあれば、不審立て

つゝ畏まりて退りぬ。

彼奴來ればどうしてくれうと思案する内に、待て〜と大いに感ずる所ありて、いかにも我を散々に置りけれど、此悪口の元を糺せば、我浮氣を恨む餘の爵憤を露さむ爲なり。我浮氣を恨むといふは、畢竟我を身に替へていとしく思へばなるに、我過を棚に上げて、他を恨むは大きな了簡違ひ、是は此方から憚りかへす所にあらず。兩の手に桃と櫻の醜福を享けむには、此處等が辛抱大事の脈所なり。言うて見れば此方よりも、才藏の胸の中は幾許ぞや。長年世話せし男の恩を忘れて、心を外へ移したるは、泥を塗りし顔をなほ踏付けの仕打、と男ならば出双を押舞して、其命を貰はむ、と阿修羅王とやらが暴れまはるほどの始末にも及ぶべきを、才藏なればこそ常談にて事は済ましたれ。何も言はぬ、全く以つて菊住の不了簡なれば、才藏が此處に見え次第、桃井若狭介に遇うて、何事も御唯々で直もの詫びなば、いかに氣丈の女でも、好いた男の一言は、十言に向ふ嬉しさに、どうするものか、角も根から脱けて、火焰も忽ち消えぬべし。

此處で此方から強き言をいばば、先も意地になりて強き言を言募り、ト、女房の仲裁から相睨で別れ、其より全く脈あがりて、此戀は死物なるべし。死なしてなるものか、大事の〜、それ御入來と見れた。女房へ

三人妻

三人妻

御挨拶の御聲、いつも初音の心地こそすれ、と手爐の傍に待受けの袖を正して、来たならば矢庭に叩頭の十もする氣で、待兼山の杜鵑、雲間を出づる御姿、見るより聲を懸けて、いつも端麗々々。先此へといへば、才藏は入口にしゃんと坐りて初見のやうなる挨拶。是は難有し、此方の思ふほどにも無く、疾より御心解けての御常談か。堅いく、いつものやうに直と此へ来て、一措願ひたきものと片膝突出せば、餘所に見て、今日の寒さはと話無氣に呟さぬ。

菊住恠えかねて飛蒐かり、好うも先には耻を掻かせしよな、と執る手を拂ひ、屹となりて、恥掻かされし覺えはあれど、掻かせし事は覚えませぬ。此方のやうな人非人の畜生には、物言うたとて解るまじければ、言はぬことに極めたれど、來られた義理ではなき家へ、のめくくと面出して逢ひに來たとは、小メに言付けられて、わざく縁切に來られたか。但しは自惚から此才藏に未練ありと見て、丸めに失せたか、愚なこと！縁は此方から疾に断つた。未練は疾に捨ててのけた。最早此方に逢ふ用なけれども、座敷でならば逢うてやるといひしは、あれほど散々に苛みければ、愧ぢて又逢はむとは思ふまじとの丁簡なりして、さりとば馬鹿正直のお方もあるものかな。逢ふもなかく汚らばしや。來るではなけれど、かくまでにして逢はむとい

三人妻

ふは、久米平内といふ士我親を石に刻み、不善事せし罪滅の爲に「ふみつけ」よとの心に同じく、不實不義理を後悔して、何とでも叱つてくれとのしをらしき了簡から、呼びに來せしと思つたれば、可厭ながら逢ひに來たは、今敵同士とはいふものゝ、廿日昔の淺からざりし馴染効ゆると有難く思ふべし。今更女々しく抒へずとも、此方の胸に聞かば皆知る事と何も言はねど、此方は見下げ果てたる根性かな。思へば思ふほど胸通り、悔し涙の一滴に、千萬無量の怨言も愚言もありぞと見よ。此仕返には菊住様、十日と経たぬ中に此才藏が………否々其を言うたなら又未練が出て、小メ様の捨てらるゝが不便ゆる、此處ではいはねど、噂に聞きて様子知れば、女で食ふ氣が女で食はれ、今日を食ひかぬる身とならむ折、薦着てなりと遠慮無く尋ねてござんせ。損じ札の四五束は、面桶へ投げて進ませまじよ。この恥知らずの野良猫めと撞倒して、轉けかゝる菊住の横面を、三味線逆手にしたゝか撲てば、棹は半より折れて胸は摧けぬ。おのれ！無禮な、と立たせも遣らず、才藏は襖を蹴開き、飛ぶがごとく遁行くを、通さじと逐懸くれば、女房に抱留められて、放せくと悶ふる間に、はや才藏は格子を出て、顔顔の邊に血入染む男の顔を見やりて、張臂に袖を拂ひて悠々と立去りけり。